

佐倉慈先生と共依存し
たい。

朝潮

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エロ系です。タイトルに全てが詰まっている。

挿絵はえいじやー様から。

目次

第0章	おやすみ	
第1話		1
第1章	ひとりよがり♡	
第2話		6
第3話		12
第4話		18
第5話		23
おはよう		
第6話		30
第7話		36
おねがい		
第8話		44
第9話		51
いつしよに		
第10話		57
第11話		63
第12話		72
わかったわ♡		
第13話		79
第14話		87
第15話		96
第2章?ふたりよがり♡		
第16話		103
第17話		113
うえでは		

第27話	第26話	それぞれの☆	第25話	第24話	第23話	かくえんせいかつ	宮本權の独白	佐倉慈の独白	変異	第20話	第19話	第18話
188	180		173	166	160		150	143		135	128	120

第37話	第36話	第3章? しゅっぱつ♡	第35話	第34話	第33話	かわる	第32話	第31話	第30話	第29話	もうだめ♡	第28話
258	252		246	238	231		224	217	210	203		196

第47話	第46話	第45話	第44話	あさから♡	第43話	第42話	第41話	第40話	はっけん☆	第39話	第38話
326	318	314	306		302	296	289	282		273	266

番外：オナニーの日♡	第49話
333	339

第0章 おやすみ

第1話

ガタ…ガタ…！

宮本權は悪寒を覚えた。

この地下シエルターに逃げてから、何ヶ月たったか。

こんな場所にまで入ってくる「やつら」はいなかった。

…だが、この人為的になっているような音。

間違いない。ついにこんな辺鄙な場所にまで侵入してきたのだ。

カタカタカタカタ…

顎が震え、歯と歯ががぶつかり合い、ちいさな音を鳴らす。

それが聞かれてしまうのではないか、と思ってしまう、さらに恐怖が加速する。

パシャ！パシャ！

なぜか今朝から始まった浸水。

その水の上を進み、ゆつくりと近づいてくる。

人だ。明らかに人が歩いている音に聞こえる。

通り過ぎろ、通り過ぎろ、通り過ぎろ、通り過ぎろ…

外部との唯一の出入り口である部屋の扉。

櫂の願いは叶わず、足音の主は扉の前で歩を止めた。

そして、扉が開く。

ゆつくり、ゆつくりと。

鬼か悪魔か。

何が現れるのかと身を震わせるしかなかった櫂。

「ウ、そ…っ…こんなどここに…ひ、人…が…」

しかし、現れたのは女神だった。

桃色の、綺麗なウェーブのかかった肩まで伸ばされた艶やかな髪。

ふんわり系の見た目のうえ、ぴよこりと飛び出たアホ毛がもつと可愛らしさを助長させている。

「佐倉せんせ…っ」

それは、巡ヶ丘学院高校のマドンナ、佐倉慈先生だった。

国語教師であり、その圧倒的な「癒し」で異性は勿論同性も引き寄せる皆の姉さんの

存在だ。

誰かが呼び始めた、めぐねえという呼称もあだ名として定着してしまったのがその最たる証拠だ。

そんな最早女神と言っても差し支えないような存在が今、極限状態な權の目の前に現れた。

權には、佐倉慈の姿が、希望そのものに。いや、神にすら見えた。

「来ないでツ!!」

…故に、拒絶された時の衝撃は大きなものだった。

突如現れた希望に縋りつこうとした權は、突然のことに呆然としてしまう。

がつくりと膝を床に打ち付け、その痛みを感じないまでに深く絶望していた。

しかし、慈にはそこまでしてでも拒絶せざるを得ない事情があった。

「うえで、かまれて…感染…血が…わた、も、頭が…」

いつものふんわりとした笑顔は何処へやら、顔には焦燥の色が浮かんでいる。

大きく開かれているはずの瞳も険悪なものになり、ただならない事を伝えている。

「そん、な…せんせ…」

「ごめんなさ…い…にげて…」

權がどうして気づかなかったのか、と言うほどに、肩口から覗く赤い鮮血。

そして、今もその血はポタポタと腕を伝い床に流れ落ちている。

「つ……あ！つ！つあ……！」

その事によやく気付いた權は、口をパクパクと動かす。

なぜか声が出ない。声にならない声喉奥から空気と一緒に漏れ出る。

何分のも感じられた数秒が経ち。

慈は、ゆつくりと体を傾かせ：

「佐倉先生！」

どすん！とその軽い体を地面に投げ出した。

それを見た權は、躊躇わずに慈の元へと四つん這いで向かった。

腰は抜け、膝は笑っていて、側から見ればさぞ面白い光景だっただろう。

「佐倉先生……佐倉先生！」

よやく慈の元へ辿り着いた權が慈の体を揺するが、完全に意識が飛んでしまっているようで反応はなかった。

死んでしまったのかと思うと同時に、触った時についてしまったべつたりとついた血を見て身震いする。

息が荒くなる。死んだ、死んでしまった……佐倉先生が……

「……ううっ……！」

突然上がったうめき声に、權はびくりと体をすくませた。

しかしすぐハツと我に帰り、慈の口元に手を当てる。

權の手に、弱々しい吐息が触れた。からくも慈はまだ息をしていた。

それを確認した權は、急いで部屋を飛び出した。

戻ってきた權の手には、注射器のようなものに入った薬品が握り締められていた。

その薬品の保管されていた箱には、「血清」と書かれていた。

第1章 ひとりよがり♡

第2話

同封されていた指示書のようなものに書いてあるの通りに処置を進める。
血管の場所を見極め、柔肌に押し当てて銀の針を突き刺す。

「うっーううーうあう……」

注射を嫌がるかのように、慈からうめき声が上がった。

その声は普段の慈とは似ても似つかないような奇妙な声だった。

それは權にとって慈の死の想像と結びついてしまった。

このまま佐倉先生が死んでしまったら、と考えてしまい、瞳から勝手に涙が溢れ、視界が歪む。

ポロポロと大粒の涙を零しながら、注射液を全て注入し終わった。

後はこの薬の効き目と、慈の生命力を信じるしかない。

指示書によれば、感染した疑いのあるものは例え血清を打ったとしても隔離しておく

なければならぬ。

だが、それは權にとってはとても耐えられないことだった。

1ヶ月。いや、2ヶ月か？ずっと1人シエルターの中で来るはずもない救助を待ち続けていたのだ。

折角出会うことのできた人間と、感染しかかっているとはいえ離れたくはなかった。

代わりにと手と足を救援物資の中に入れていたロープで固く縛り付けた。

これでももしゾンビになってしまっても、動けなくできるし、最悪解かれたとしても逃げる時間くらいは稼げるだろう。

「…すみません、佐倉先生…痛くないですか？」

權が問いかけるが、帰ってくるのは荒い息遣いのみだった。

慈は今戦っているのだ。せめて、止血だけでもしてあげようと思い慈の肩に目を向ける。

「っ！ひっ…！」

慈の、感染者に傷を受けたであろう肩の皮膚が爛れていた。

さつき見たときはこんなことにはなっていないかった。

感染が進んでいる。もう、慈は助からないかもしれない。

そんな考えが一瞬頭をよぎったが、權は思い直して傷口に包帯をぐるぐると巻きつけ

る。

もし慈が感染してしまっていたら、もう死んでしまおう。ただ、それまでは全力で助けたい。

除菌シートで血の垂れた部分を拭い取る。

手に触れると、白くて細く、しなやかで柔らかい。女の子の腕だ。

勝手に触れてしまうことに背徳感を覚えながら、拭き残しが無いよう丁寧に血の跡をなぞる。

そこまで出血はひどくないようで、2、3枚で全ての血を拭くことができた。

「うう……う……」

それは、血を拭くために慈の側に近付いたせいだった。

耳元で、慈の吐息が聞こえた。

ぞわり、と權の背筋になんともいえない感覚が走った。

緊迫した状況でここ何ヶ月も感じていなかった、性の衝動。

權は、自分の下腹部が熱く昂るのを感じた。

一度そういう風に見てしまうと、もう止まらなかつた。

乱れた衣服。少し捲れてしまったスカート。そこから覗く柔らかそうな肢体。

今まで權の目に写っていた聖母は、一瞬にして淫女へと変わってしまった。

(…何を考えてるんだ。やめろ、俺…)

そんな事を心で強く念じながらも、權の手は慈の体へとゆつくりと伸びていった。

(命を救ったんだし、少し触るくらい当然の権利だ。)

心の中で、甘い誘いが囁く。

(ダメだ。絶対にダメだ。バレたら人生が終わる。)

理性と本能がせめぎ合う。

(人生が終わったところで何だ。どうせこんな世界で死ぬなら、楽しんで死んだほうがマシだ。)

「…」

ごくり。と生唾を飲み込んだ。

ドツドツドツドツ!

心臓が鼓動を早め、頭の中で響いている。

「これは…心臓が動いているかの確認です…」

誰に言い訳するでもなく、權は小さく呟いた。彼は欲望に負けていた。

權は右手をゆつくりと胸に近付け、慈の胸に押し付けた。

ふに…

柔らかい。

柔らかい！

初めての感触に、感動すら覚えた。

權は好奇心に当てられ、両方の手をその大きな双丘を多い被せた。

慈は胸が目立たない服を着ていても大きく見える程度の巨乳の持ち主。

ここまでしても、揉んでみる勇氣まではなかった。

きつと、胸を揉んでしまったら、心音を聞いているという言い訳ができなくなってしまうから。

だから、そつと添えるだけ。押し付けて感じるだけ。

少し落ち着いて感じてみると少し硬い。きつとブラジャーのせいだ。

「…それはダメだ…なに、考えてるんだ…」

權は自分の恐ろしい考えに恐怖した。

そんな事をしたら、もし生きていたとしてももう一生口を聞いてくれないかもしれないかもしれない。

…やめろ、やめろ、やめろ…

「こ、これは…血で汚れた服だと汚いから…それと、体に異常がないか見るため…」

權は手を震わせながらゆっくりと慈の服を脱がせ始めた。

結局、理性は本能に勝てなかった。

こんな特殊な状況も相まって、權は止まれなくなっていた。紫色のワンピースをたくし上げる。

そんな背徳的な行為に、興奮がまた上がる。權の肉棒はこれまで以上に硬く膨れ上がっていた。

中から、曲線美を描く白いおみ足が現れる。それだけで心臓の鼓動が跳ね上がった。

期待に腕をふるふると震わせながら、もつと大きくめぐり上げる。

ふくらはぎから、太ももへ。そしてその奥、太ももの付け根。

これまでで既に大きいと思っていた鼓動は更に激しく鳴り響く。

胸を叩かれているかのように強く脈打つ。

…白だった。

鼠蹊部に沿うように、可愛らしくレースがデザインされた、清廉なショーツ。

女の子の大事な部分を隠すために作られた衣服。

權はその一点に視線が釘付けになった。

第3話

「はあっ…はあっ…」

やってしまった。

スカートを捲った。その中の、下着を見てしまった。

ただ、それだけの事にとっても興奮した。

權は今、これまでの人生の中でも一番の背徳感を味わっていた。

「こんな時に、こんな事…ダメだ…」

細菌と必死で戦う慈を感じながら、權の手は止まらない。

駄目だと理解ついても、好奇心を止めることができない。

權はショーツを見るだけでは飽き足らず、その上までめくり上げる。

ショーツで隠された女性的な下腹部。ちらりと覗く骨盤の形に浮き出した鼠蹊部。

その上には引き締まったウエストと形の良い綺麗なヘソが鎮座している。

「…くっ…」

權はおなかフェチでもあった。

くびれからお尻へと続くラインが好きで好きでたまらない。

ほっそりとした、しかし女性的な肉付き。そしてその中心にある可愛いおへそ。

図らずとも、慈のおなかは權の理想そのものだった。

權は衝動のままに、ガバツ！と勢い良くワンピースを脱がせた。

すると、中からぼよん！と大きく弾みをつけた2つの白いおっぱいが現れた。

慈のそれは、權が目測で想像していたものより大きいものだった。

この2つの山の中に顔を埋めたい。埋めて甘い匂いを感じたい。

權はゴクリと生唾を飲み込んだ。

(やってしまった…今起きられたら、俺はどんな罵詈雑言を並べられるんだろう…)

慈の格好は、手足を縛られ、身につけているものは靴と靴下、それからショーツとブ

ラジャーだけ、という見るのを憚られるような扇情的なものになってしまっている。

こんな事をして、許されるわけがない。そんなことはわかつている。

でも、もう引き返すという選択肢は、權の頭から無くなっていた。

改めて、邪魔な衣服を取っ払った慈の体をじっくりと視姦する。

半分ほど血で汚れてしまったワンピースは無残にも全て脱がされ、腕の部分に絡みつ

いていた。

先にロープで縛ってしまったせいであらう。脱がしきることが不可能だったのだ。

(エロい…ネットで見たどんな画像よりも動画よりも、エロい…)

画面越しではない、という臨場感というものを差し引いても、ここまで興奮する体を見たことがない。

權は運命だと思った。慈以外には一生こんなに好きな女性には出会うことはないだろう、と。

(ごめんなさい、佐倉先生…)

權は慈が苦しみながら眠っているのを良いことに、慈の体を弄び始めた。

まずは、ワンピースの上から既に触ってしまった一番存在感のある胸だ。

相変わらず心臓はうるさいが、伸ばした手にもう迷いはなかった。

ブラジャーの少しザラザラした感触に戸惑いながらも、慈の胸を堪能する。

グツと力を入れると、柔らかさの中に弾力も感じる。素晴らしい。その一言に尽きた。

ずっと触っていたい。ずっと感じていたい。この谷間に住みたい。

ぽよん、ぽよんとブラジャーでしつかりと形を補正されていてもこれほどに弾むものなのか。

幸せだった。地獄が始まって、始めての幸福だった。むしろ、こんなことになってよ

かったとさえ思った。

この感触を楽しめるなら、もうここから出られなくなつて、助けが来なくなつて良い。今までの普通の生活と、地獄だが慈の胸が揉める生活なら、間違いなく後者を選ぶだろう。

…いや、それはない。胸を揉めなかつたとしても平和な世界の方が良いに決まつている。

しかし、一瞬でもそんな考えになつてしまふほど、心地の良い感触だつた。

「…これ以上、脱がすのはダメだよね…」

權が慈の全てを感じるには、一枚の布の存在が邪魔だつた。…だが、これ以上脱がす理由がない。

正当な理由があれば、自分を納得させてブラジャーだつてパンツだつて、脱がすことができる。

權は必死に理由を、言い訳を探した。胸を揉みながら、考えを巡らせた。

(…そんなの、どうでもいい…)

しかし、思いつかなかつた。

先に理性の壁が壊れて、理由を探す事を諦めた。

そしてブラジャーを外そうともぞもぞと動かしてみる。

(これ、どうやって外すんだ?)

ブラジャーを始めて触った權は、ホックの外し方がわからなかった。

そもそも、留め具が裏側にある事さえ知らなかった。

焦れた權は強引にブラジャーを上を持ち上げる。

ぷるるんっ!

支えを失った慈のおっぱいは大きく弾み、その頂点にある桜色の突起が顔を出した。現れたのは、綺麗な桜色をした、ツンと上を向いた、可愛らしい乳首だった。

權は思わず見入ってしまった。

(これが、佐倉先生の乳首…)

それを見てしまった瞬間、ぞわぞわと言いやうのない快感が身体中を駆け巡った。

舐めたい。吸いたい。噛みつきたい。

色々な感情がごちゃ混ぜになり、權の興奮を熱く熱く高めた。

「佐倉先生…佐倉先生…うう…」

しかし、その欲望は必死に抑え、胸に手を添えるだけで我慢した。

權は無意識に「舐める」事と「自慰」はしてはいけないと心に決めていた。

それらをしてしまうと、一線を超えてしまう気がして怖かった。

慈を汚してしまう事を恐れ、「触る」という行為に収めていた。

超えてはいけない一線はとうの昔に超えてしまっているのだが。

第4話

「っ…はあっ…うう…うあ…」

慈は相変わらず熱に浮かされているかのようになされていた。

いつ死んでしまってもおかしくない状況で、それでも權の手は止まらなかった。

ブラジャーを外して、慈の上半身の全てを曝け出させてしまった權は、いけないものを見てしまったような気がして（いや、実際にそうなのだが…）自らの手で慈の胸を覆った。

「す、すごい…モチモチだ…」

手のひらに感じる、慈の胸の圧力と突起の感触。

すべすべしていて、マシユマロのように柔らかくて、でも弾力も持ち合わせていて…

その感触だけで、權はおかしくなってしまうそうだった。

「パンデミック」の事件が起きてから、意図せず禁欲の日々を送ることになった權。

始めは、このシエルターで生活していたのは1人ではなかった。

慌てて逃げる校長を追いかけ、指示を仰ごうとしたところこの地下シエルターに辿り着いた。

その校長はというと、地獄が始まってから一週間ほどして、ある日突然首を吊っていた。

これなら、最初から1人でいた方が良かった…

自分が、人が。死ぬのが怖くて。人肌が恋しくて。

寂しくて切なくて、望みがなくて。

その欲望が、全て佐倉慈という1人の女性へと向かっていった。

「うあ…ん…はあう…う…ぐ…ああつ…」

「…」

慈の、必死に戦っているその声も喘ぎ声のようにも聞こえて。

懼の精神をゴリゴリとすり減らしていつている。

(採みたい…このおっぱいを、自分の手で…)

胸など、身も蓋もなく言ってしまうばただの脂肪の入った袋だ。

それなのに、なぜこんなにもロマンを感じてしまうのか。

慈の体だというだけで、どうして愛おしくてたまらないのか。

懼は欲望に任せて、慈の胸を手ですくい上げた。

むにゅっ…

權は、生命の神秘に感動すら覚えた。

ブラジャーや服越しとは全く違う。

この感触は、幸せだとか、そういう次元で語れるものではない。

權は、この胸は自分に揉まれるために生まれてきたかのようにだと思った。

むにゅん。むにゅにゅん。

直に触れてしまったことにより抑えが効かなくなってしまうた權は、慈の胸の上に添えた双方の手をゆつくりと動かす。

開閉を繰り返す權の手によって、慈の胸は自由自在に形を変える。

押し付けられ、広げられ、潰され、引っ張られ。慈の胸は好き放題に弄られた。

(世界には、こんな素晴らしいものがあるんだ…)

權は飽きもせずは何分も、何十分もその大きな果実を揉みしだいた。

もしかしたら、何時間と経っていたのかもしれない。それほどに集中していた。

しかし、權はどれだけ興奮していても決して激しく強くすることはなかった。

おっぱいは揉みたいけど、痛みや苦しみで慈に不快な思いはさせたくない。

權は慈にそんな勝手なエゴを押し付けていた。

胸の感触を存分に味わった權は、ついに、その大きな山の先に咲いた、ぷっくり腫れ

上がっていて、綺麗な桜色の花卉をつつく。

慈の乳首は、その見た目や雰囲気にはふさわしい、可愛らしく控えめな大きさをしていた。

親指と人差し指の側面で乳輪をつまんでじっくりと観察する。

くに…♡くに…♡

最初はおつかかなびつくりと言った様子で、いくらを摘むように慎重に触れる。

あまり強く触ってしまったては痛そうに思えて、優しく優しく扱う。

くにくにと触っているうちに權も段々と刺激するのにも慣れてきた。

引っ張ってみたり、優しく押し潰したりと色々触ってみる。

權はこの可愛らしいさくらんぼを口に咥えてみたくて仕方がなかった。

成人向けの雑誌を見ると、必ずと言っていいほど出てくる乳首を吸ったり舐めたりするシーン。

この蕾を舌の上で味わう事ができたなら、どんなにだろうか。

それは間違いなく世界で一番甘美なスイーツだろう。

しかし、權はそれだけはダメだと必死で自分を叱りつけた。

それをしてしまうと、本当に止まらなくなってしまう。

慈を傷つけてしまう。ここまでの事をしておいてだが、それだけは本当に嫌だった。

乳首も乳房とは違った感触だが、しっかりと柔らかかった。

しかし、同じように乳首をクリクリと飽きもせず触っていると、だんだんと乳首が硬さを帯びてきた。

乳首の大きさも少し大きくなったように感じ、感触もグミのような硬さまでになった。

(もしかして、佐倉先生も、気持ち良いのかな…)

ドキドキと心臓が高鳴る。

乳首が硬くなったのは、気持ちが良い証拠ではないのか。

自分が慈を気持ちよくさせている。そう考えただけで脳が痺れた。

もつとしてあげよう。そう考え始めたその時。

「っはあっ!」

「っ!」

突然、これまでうなされていたただけだった慈が大きな声を上げた。

權は心臓が止まったかと思うほどにドキンと鼓動を跳ねさせた。

第5話

慈が突然大きな叫び声をあげた。

權は驚きすぎてひっくり返りながら尻餅をついた。

慌てて飛び退いたはいいものの、パンツ以外脱がしてしまっていることをどう謝ろう

…

權はパニックになり、しどろもどろになってしまった。

「あ、あ、あの…っ！…ち、ちが…っ！ぼ、ぼく、そんなつもり、なくて！」

「…うあ…う…ぐうっ…いあ…」

が、慈は起きた様子はなく、未だ悪夢にうなされていようだった。

緊張が最大限に達していた權は、はあー。と長いため息をついた。

そして、自分は何をやっているんだろうと我に返る。

寝ながら苦しんでいる人さまの体を触って、揉んで、弄って。

とんだ最低野郎だ、俺は。權は本気でそう思った。

しかし、興奮冷めやらぬのも事実。

これほど性欲が湧き上がってしまったら、一度出しておくしかない。

權は慈のワンピースをお腹のあたりまでずり下げ、元通りとまではいかないものの丸出しよりは幾分かマシだろうと言ったくらいに処置だ。

權には、慈の服を元通りにするほどの余裕がなかった。

權はいそいそと慈を寝かせた部屋から出て、自慰ができそうな場所を探した。

このシエルターに生きている人間は2人の他には誰もいないだろうが、一応物資の陰に隠れてズボンを下ろした。

中から、パンツを突き破らんばかりに自己主張をしている棒がかおをだした。

よく見たら、パンツの棒の頂点の部分にシミができています。

ココには何も刺激を与えていないのに、先走りかドロドロと出てきていた。

これまでの人生の中で一番と言って良いほどに膨張していた。

自分でも呆れる。どれだけ興奮していたんだろうか……

權はパンツの中から長らく寄り添ってきた相棒を取り出した。

そして、棒を握ってしゅこしゅここと擦り始める。

何年もやってきた行為だ。その手際もお手の物だった。

權が想像するのは、勿論先程の慈の姿だった。

滑らかな肢体。柔らかな胸の感触。弾力のある乳首。

どれを取つても一級品のオカズたり得た。

そしてふと気になった。慈はどうして急に大きな声をあげたのか。

離れて冷静になつた今にして思うと、嬌声のようにも感じられた。

それは、もしかすると：

どうしても気になつて仕方が無くなつてしまつた權は、自慰を途中で止めてまで慈の様子を見に戻つてきた。

勿論、しつかりパンツもズボンも履き直してきている。

慈は今もなお、荒い呼吸を繰り返し、うーうー呻いていた。

權は、地面に投げ出され縛られている慈の服を再び剥いだ。

罪悪感はあるものの、最初の時ほどの迷いはなかつた。

慈の乳首は未だ硬くなつたままだつた。

それがどうにも、触つてもらふのを健気に期待しているように思えた。

心臓が、まだ昼頃のはずなのに既にもう一日の平均を超えていそうなほど早く動いている。

權は、慈の乳首をピン！と摘んで引つ張つてみた。

「はあうっ♡」

やっぱりそうだ！

權はこれまで以上に気持ちが高ぶっていた。

慈は気持ち良さにたまらず喘ぎ声をあげたのだ！

何度か乳首をくにくにと触って、慈の反応を観察する。

「あぐ…うん…はあうん…♡う…ああう…♡」

權には、慈のうめき声に嬌声が混じっているように聞こえた。

辛そうな慈を気持ちよくして少しでも楽にしてあげたい。

そんな大義名分が出来てしまった權が止まれるわけがなかった。

それから何度も何度も乳首を触り、慈の快感を引き出した。

苦しそうな慈を救ってあげたい。そう思い込むことで、權は罪悪感すら覚えなくなっていた。

しかし、權は自分の欲望をもっと叶えたいと心の底でかんがえていた。

できることなら、乳首を口に入れて思いつきり吸い付きたいし、ガジガジ噛んで味わってみたい。

キスもしてみたいし、じゆるじゆると激しく唾液の交換をしてみたい。

お腹も思いつきりさすったり舐めたりすりつけたりしたい。

女の子の一番大事な部分も見てみたいし、舐めたいし、もちろん入れてもみたい。

…でも、それは許されない。許しちゃいけない。

權は更なる快感を求めてしまった。自らの下半身へと手を伸ばす。

權の股間には、棒が布地を押し上げてテントが張られている。

先程、出し損ねた精が溜まっているのを感じる。

自慰を途中で止めてしまったツケが回ってきてしまった。

中途半端に刺激してしまったせいで、肉棒が激しく快楽を欲している。

權の一瞬正常に戻った思考も、今は欲望に支配されてしまっていた。

權はゆっくりと慈に近づき、腰を下ろした。

ズボンの上から肉棒を、慈の生殖器に押し当てた。

權も、慈の体を触ることが当たり前だと思ひ込み、思考が麻痺してしまったのだろう。

でなければ、こんな事はしなかったはずだ。

(ごめんなさい…ごめんなさい、佐倉先生…)

權は押し付けた肉棒を、布を何枚も挟んで膣口に押し当て、擦り始めた。

すり、すり。と腰を動かしている間も、胸を触ることも忘れない。

側からみれば、大分おかしい体勢になっていることだろう。

(起きないで…起きないで…起きないで…)

このままバレてしまうよりは、処置が間に合わなくて死んでしまった方が良いでしょう。

ないか、と。

そんな事を考えてしまった。本当にそうなってしまったら、今度こそ權は自殺しかない。

それほど權の中で人の死というものは大きな絶望となっていた。

「先生…佐倉先生…♡」

そんな先の事を一切考えず、權は自らの肉棒をズボンとショーツ越しに慈の股間に擦り付ける。

權はもう、ただ純粹に自分の中の欲望を叶えるためだけの馬鹿な頭になっていた。

男は、魅力的な女の体の前にはあまりにも無力だった。

ずりっ♡ずりっ♡ずりっ♡

權の独りよがりな愛は、擦り付ける度にどんどん膨れ上がっていく。

刺激としては物足りないものだったが、權にとってはそれで十分だった。

「あっ…せんせ…いく…いくっ…出ます…」

これまで以上に腰の動きを早くしてオーガズムを急かした。

そして。

びゅるるるっ！びゅるるるっ！びゅるるるっ！！

權のズボンの中で、溜まりに溜まった欲望が十分に限界を迎えた。

「先生……すき……すき……すき……っ」

權は頭をおおきなおっぱいに埋めて、しばらくの間絶頂の余韻に浸っていた。

おはよう

第6話

この深い睡魔に誘われるがままに、このまま眠ってしまった。

ちょうど、世界一気持ちの良い布団に包まれているのだ。

このまま微睡みの中、深い眠りに寝入ってしまった。

しかし、股間のネバつとした嫌な感触がそれを許してくれなかった。

權は、もはや抱きついていっているといても良い慈から離れて、股間の洗浄を行なった。

地面に直接寝転がされていた慈は、寝苦しさを覚えて目が覚めた。

「ううん……」

状況を理解できない慈は、眠気眼でもぞもぞと動く。

慈は寝起きがあまり良い方ではなく、朝が弱かった。

手足の擦れるような淡い痛みと動き辛さに違和感を覚え、しっかりと体を起こす。

数秒うとうとと微睡みの中で船を漕ぎ、意識を覚醒させる。

「きやあつ!？」

慈は、ようやく自分の置かれている状況に気が付いた。

ショーツは残されてはいるものの、服とブラジャーを脱がされている。

更には、手と足がロープのようなもので結ばれ、拘束してあった。

これでは満足に動くことができない。そもそも、立ち上がるだけでも大変だ。

「な、なに…う…これ…」

慈には、こんな状況になった経緯を思い出せなかった。

自分がこんな状況に置かれている理由が全く理解できない。

「…おはようございませす。佐倉先生。」

「っ!？」

慈は人の声を認めると、咄嗟に結ばれている手で胸を覆い隠す。

手首のあたりで纏められていたワンピースがぱさりと落ちる。

その服を胸の前に持つてきて、せめて大事な部分だけでも隠した。

「だれ…?？」

慈は、自分の服を脱がしている時点で相手がまともな精神状態ではないと判断した。

声のした方向をキツと睨みつけて、反抗心を前面に押し出す。

しかし、相手が巡ヶ丘学院の制服を着た幼い少年だという事に気が付き毒気が抜かれた。

「あつ…そ、その…ぼ、僕は1年の宮本です…」

權は、慈が起きるまで部屋の隅で体育の時にするような三角座りをして、慈の寝顔を見て時間を潰していた。

なにをすることもなく、死にながら生きてきた權にとって、慈の寝顔を見ていただけで至福の時間と思えた。

慈は、そんな權が自分を裸にひん剥いて手足を縛っている意味がわからず、混乱していた。

そもそも、学園生活部以外の生存者がいる事や、自分が全く知らない場所にいることにも理解が追いついていなかった。

「な、何でこんな事…」

「昨日のこと、覚えてないんですか？」

昨日のこと？

と、慈は思い返す。そういえば、昨日何があったのか思い出せない…

「うっ…」

「大丈夫ですか!？」

權は、突然頭を抑えてうめき声をあげた慈へ咄嗟に声をかけた。

それを、慈は手で制して心配いらぬことを伝える。

キリキリと頭が痛み、ゆっくりと昨日の記憶がフラッシュバックした。

…あの日。久しぶりの…こんなことになってしまつてから初めての雨が降つて。

それを嫌つたのか、雨なのにしっかりと「登校」してきていた「彼ら」は校舎になだれ込んできた。

「彼ら」が生前の記憶を模倣しているのはうつすら気がついていて。

それなのに、私はこんな単純なことに気がつかなくて。

バリエードが破られて、何百人もの「彼ら」が押し寄せてきて…

それに気づいた頃には、もう手遅れになっていて、屋上まで逃げることもすらできなかった。

あの子達を、防音のため頑丈に作られた鍵のかかる、放送室に押し込んで…

「うつ…うつうつ…」

ぼた…ぼたぼた…

いつの間にか慈の瞳からは、自分の情けなさに涙が溢れていた。

少し考えれば気づけたはずなのに、あの子達を危険に晒してしまつた。

「佐倉先生……」

權は、泣いている慈の事が不憫に思えてしまった。

大人でも、こんなに泣いてしまうことがあるのか、と。

權は、慈の涙が止まるまで背中をさすっていた。

「先生が、傷付いたままこのシエルターに入ってきたんですよ。覚えてませんか？」

慈は、なんとか自分が感染してしまうところまでは思い出せたが、覚えていたのはそれまでだった。

しかし、状況からしてここが自分が向かったあの書類に書かれていた「地下区画」だろうということを理解した。

そして、彼がここで生活していて、自分はそこに感染した状態で入り込んでしまったのだということも。

「……でも、あれ……私、確か嘔まれて……」

そう。慈はその後感染者に傷を付けられ、自我すらも怪しくなっていた。

最後に残った意識を、なるべく学園生活部から離れるために使ったはずだった。

その朧げな記憶が確かなら、慈はこうして起き上がり、喋り、泣いている事はおかしい。

そもそも、あれは性の悪い夢だったのではないか。そんな考えが頭を過ぎった。

「血清を使いました。」

しかし、そんな希望は權の発言によりすぐに打ち砕かれた。

「血、清……？」

「はい。この場所には色々な薬があるみたいで……」

權は、慈にこの場所のこと、そしてランダルコーポレーションという大手企業が作った試作品である血清のこと。

知り得るすべての情報を慈に伝えた。

第7話

この場所のこと。保存されていた大量の物資のこと。その内の1つである、血清という薬のこと。

權は、一生懸命に自分の知り得る情報を慈に話して聞かせた。

緊張によりとところどころ詰まったり囁んだりと客観的に聞いてとても聞き辛かった話を、慈は教師らしく最後まで聞き終えた。

「そう……この学校に、そんな物が……」

慈は、「緊急避難マニュアル」というおぞましい書類を読んで、ある程度の情報を保有していた。

しかし、実際に見て経験していた權の方が幾分かこの施設や備品については詳しいようだった。

話を聞く限り、この宮本という一年生も、この場所のことは事件が起きてから知ったようだった。

きつと、校舎をまだ把握しきれいでなかったのか、逃げ迷っていた中でたまたまたど
り着いたのだろう。

「でも、服を脱がす必要はなかったんじゃ…」

慈は、ワンピースに体を隠し、少し頬を染めながら言った。

助けてもらったとはいえ、いくらなんでもこれはやりすぎだ。

しかし慈は、どんな理由だったにしろ權を叱るつもりはなかった。

命を助けてもらったという恩もあるが、それ以上に、權と話せば分かり合える、改心
できると信じていた。

慈は、こんな世界でも生徒のことを信じていたかった。

權は、慈のその言葉と、なによりその仕草にどきりと心臓を跳ねさせた。

改めて慈の格好を確認して、かあつと頭が赤くなつた。

權は、あらかじめ考えておいた言い訳を慈に伝える事にした。

言い訳といっても、それは本当に大事な事だった。

「…そうですね。自分じゃ見えませんよね…」

權の反応は、慈の思っていたものとは違うものだった。

どこか悲しそうな、泣きそうな顔をしている。

權は、慈に今の状態を見せるのは大変に心苦しかった。

それほどに、今の慈の体は見せるのを躊躇するほどだった。

「…少し待っていてください。すぐ戻ります。」

「？」

慈は、訳も分からないまま權が部屋から出ていくのをキョトンとした表情でただ見ていた。

そんな慈を見て、權はグツと心臓を掴まれたかのような感覚を覚えた。

今から、權は慈に残酷な事実を教えなければならぬから。

部屋に戻ってきた權が手に持って来たのは手鏡だった。

自分の身なりに無頓着な權には必要なかったが、地下シエルターには日常生活に必要だと思われる日用品はある程度揃っていた。

この手鏡も、その備品のうちの1つだ。

慈は、渡された手鏡を覗き込んで。

そして、全身からサーッと体温が引いていくような気持ちの悪い感覚を覚えた。

「なに…これ…」

傷のあった、今は權によって包帯が巻かれている肩口。

そこから、下は肘あたり。上は頬にまで届く、大きな火傷跡のようなものが出来上がっていた。

その部分は皮膚が引きつって、すぐに目を背けたくなるような痛々しいものだった。

「その跡、最初は小さいものでした。時間が進むにつれ、どんどん広がって行って……醜い。あまりにも醜い。」

その部分だけが、人間ではないかのような。

そんな気持ちの悪さを孕んでいた。

「……そう……なのね……」

慈は、ゆっくりと言葉を絞り出す。

確かに、こんな物が時間と共に広がっていたら確認せざるを得ない。

冷静に考えれば、だとしても全身を脱がす必要まではない。

が、少し抜けているところもある慈がこれ以上疑問を抱くことはなかった。

(気持ち悪い……)

慈が、自らの肌を抱いたのはそんな感想だった。

この跡が、どのような意味を持つのかは分からないが、きつと良くないものだということはわかる。

全身に回っていたら、きつと手遅れだった。慈は、この傷跡の事をそう解釈して、ぞわりとした悪寒を覚えた。

私がこの場所を知らなかったら。私の意識がもっと早く無くなっていたら。私が地下区画を目指さなかったら。

私も、きっと「彼ら」の仲間になっていただろう。

…今、私が生きているのは奇跡だ。

慈には、昔から自責の念が強いきらいがあった。

不幸は重なり、「自分が唯一の大人」という状況に、それはますます加速していった。それが明らかに慈の精神を苦しめることになったのは、そう。「緊急避難マニュアル」を読んだからだ。

あの時、しっかりと確認していれば。そう、何度も思った。なんども、後悔した。

そしていつしか慈は、悪いのは大人だわたし。と、思うようにまでなっていた。

(…この子も、被害者だ。)

訳も分からずこんな場所に逃げ込んで、そしてそのまま何日間も一人で生きてきたのだ。

こんなに近くに生存者が、助けを求める生徒がいたのに、なぜ気付いてあげられなかったのか。

慈は、自分の無力さに齒噛みする。

(私のせいだ…私のせいで、こんな事に…)

「先生。…その、痛くないですか？」

權が、あまりにもな様子の慈に向かつて問いかけた。

…もしかして、この子は私の事を心配してくれているのか。

わざわざ「感染」してから彼の前に現れた、危険を運んできただけの私に。

なんて、優しい子なのだろうか。

もし、感染した人間が現れたら、私は…どうしただろうか。

「ええ…痛くはないみたい。ありがとう…」

(…そうだ。私は先生なんだ。…こんな事で悲しんでなんかいられない…)

痛みは確かにない。

だが、特に女性が、自分の肌がこうも醜く歪んでしまつて平気なはずがなかった。

そんな彼の優しさに、慈は心配をかけないように笑顔で答えた。

それは、とても綺麗な、世界で一番悲しい作り笑顔だった。

「…本当ですか？無理してませんか、先生…」

權がそう思ったのは、慈のあまりの肌の痛々しさ故にだった。

触れても痛くはないのか確認するため、權は慈の首元へと手を伸ばした。

本当は肩か腕へと触れたかったが、そこは慈がワンピースで鉄壁のガードを敷いているため触れることができなかった。

慈は、自分でも気持ち悪いと思ってしまうその跡に躊躇なく触れる權に驚いた。

「気持ち悪く、ないの……？」

「……」

權はすぐに返答することができなかった。

確かに、その跡は權にとっても気持ちの悪いものではなかったから。

「正直に言くと、少し怖いです……でも、佐倉先生はゾンビとかじゃないので……」

權は、痛みがないか感触を確かめるため、スリスリと跡をなぞる。

しかしそれによって慈が痛みに反応した様子はなく、本当に痛みはなさそうだ。

そう權が判断し安心したところで、慈の瞳からひと雫の涙がこぼれ落ちた。

「えっ、あつ……だ、大丈夫ですか!?! やっぱり、痛みが……」

「ううん……ちがうの。痛くはないから、安心して……」

慈は泣いてしまった自分を見て焦り出す權を安心させるため、流れ落ちる涙をグツと堪える。

私が弱みを見せたら、みんなが不安になってしまおうから……

しかし、一度流れてしまった涙は止まらなかった。

慈が、言つて欲しかった一言。

こんな体になつてしまつてもう人間ではなくなつてしまつた。

肩から頬にかけての大きなあからさまな証拠があれば、人間に戻ることはできない。そんな現実を突き付けられ、それでも生徒のために動こうと決意した。

「ゾンビじゃない。」

ただ、その一言だけで、慈は救われた。

一度許してしまつたら、涙は次から次へと瀬戸際なく溢れ始めた。

あの子達の前でも、一度も見せたことがなかつた涙。

これまで泣きたいのを我慢し続けていた。

自分は大人だから、先生だから。

今までそうやって我慢してきた。

それが全て溢れ出してしまつた。

「うぐっ……う……わたっ……わだじ……しらな……こんな……うあつ……先生……だから……っ！」

権はそんな慈を、涙が枯れるまで、ずっとずっとしやくり上げる背中を撫で続けた。

おねがい

第8話

(わたし、は…あの子達を、命を投げ打って助けて…それで、許されようとしていた…?)

(あの子達を守って死んで、ハイ終わりって…そんな簡単な事じゃ無いよね…)

(あの後、あの子達が無事に助かったって根拠もない…もしかしたら、扉が破られてみんなもう…)

(そもそも、これは雨の日が危ない事を予測できなかった私のせい…こんな事で、責任が取れるわけがないじゃ無い…)

慈は、止まらない自責に押しつぶされそうになりながら、背中を撫でる權の手に慰められていた。

その反面、權は泣きじやくる慈を抱きながら女性の体の柔らかさと香りを楽しんでいた。

少し前に出しきったはずだった欲望は、再びむくむくと頭を持ち上げ始める。

「わたし……さいいてーな……おとなで……ひつく……たすけをもとめてた……せいともまもれない……うう……」

「先生は最低なんかじゃありませんよ。いつも生徒のことを思ってくれる素敵な先生です。」

「ぞんないぞんない、も、ん、っ！」

これは何を言ってもダメだな、と早々に諦め、權は適当に相槌を打ちながら背中を撫でる人形となった。

数分に渡って泣き通した慈は泣き疲れたのか、気絶から目が覚めたばかりのはずがうすうす寢息を立て始めてしまった。

權は大きな子供か……と思いつながら、しかし自らの興奮を悟られる心配がないことに安心してふう……と一息休憩を挟んだ。

「あの……ごめんなさい。私昨日、凄く恥ずかしい事を……」

翌朝。

寢床を出て来た權を、頬を染めながら謝罪する慈が迎えた。

權は昨夜、慈の体を想像しながらしっかりとご休憩した後、慈が起きる前に眠ってし

まっていた。

足を縛られたままなので、ぴよんぴよんと跳ねないと移動できないのがとても残念だった。

しかし、權はそんな慈のどうにも子供らしい様子に心臓を撃ち抜かれていた。佐倉先生好き…

少し残念だったのは、慈の体には權が寝る前に慈へとかけておいた小さな毛布が巻かれていた事だ。

両手は縛られたままなのでそのまま巻いたのだろう、跳ねている間に落ちてしまいうななくらい危ういものだったが。

もちろんそんなもので慈の発育の優れた体が隠しきれはるはずもなく、結果としてやはり大変いやらしい格好だったのだが。

「それと、おはよう。權くん。」

慈は、例えばゆきさん、ゆうりさん、くるみさん、といったように、生徒の事は下の名前で読んでいた。

だからこそ、「生徒との距離感が近い」と評判の先生だった。

權は巡ヶ丘には入学したてで、まだ先生の名前と顔も一致していないあやふやな状態だった。

が、その持ち前のキャラと顔の良きで、慈のことだけはしっかりと記憶していた。

「いえ…こんな事になったので、誰が泣いてもいいと思いますよ。」

「その事はできれば忘れてほしいけど…」

慈が、また一段とポツと頬を染める。

權は、泣き出す校長の姿を辟易する程見せられていた。

それに比べたら何倍も気持ちの良いものだった、と權は考えていた。

この流れで、慈はそろそろ不便さを覚えてきた手首にくくりつけられたロープを權に向ける。

「ねえ、權くん。この紐解いてくれないかな？動きづらくて…」

「…駄目です。」

慈は思わず絶句してしまった。

解いてと頼めば、すぐに解いてくれるものだと思っていたからだ。

「血清の効力を、僕たちは知りません。例えば、発症を数日遅らせる、という効果かもしれません。」

「…そう、だよね…」

完全にウイルスを克服した気になっていた慈は、見せられた現実に少し気分が落ち込んだ。

懼は慈を落ち込ませてしまったと慌てて励ます。

「あー！いえ、その…不安にさせるつもりはなくて…」

「…いいえ。懼くんの言う通りね。元はと言えば私が感染しまったわけだから…閉じ込められたり、殺されないだけマシだと思っわ。」

しかし、慈には帰らなければならぬ場所があった。

ずっとこの場所で時間が過ぎていくのを待つてはいられない。

（酷い別れ方をしてしまった。あの子達は、きっと今も泣いているだろう。）

特に、今の状態のゆきさんにストレスをかけすぎてしまうのはきつと良くないわ。」

「懼くん。私は学校の3階に住んでいたの。そこには、他に3人のお友達がいて…私が死んだと思っっていると思うから、出来るだけ早く戻らなくちゃいけないの。」

「…」

懼は驚愕した。

慈の他に、まだ3人も生きている人間が学校にいた事に。

そして、慈はその場所に帰りがっている事にも気がついた。気がついてしまった。

「それでね。…懼くんも私達と一緒に上の階で暮らしてみない？」

それは、慈のどうしても叶えなければならぬ望みだった。

こんな場所に1人生徒を放置しておくわけにはいかない。

見つけてしまったからには、助けたいと思つてしまった。

「みんないい子達だから、きつと気に入つてくれると思うの。」

それが權にとつても一番いい事だと判断していた。

しかし、權の様子はどうも喜んでる感じではなかった。

慈は、苦々し気な表情を浮かべる權を不思議に思った。

「……ここにいたら、ゾンビが襲つてくる事はありません。」

權は、その心の内をポツリポツリと話し始めた。

「佐倉先生が来るまで、この場所に近づいてきたゾンビはいませんでした。佐倉先生は、

上の階で襲われたんですよね……？」

「それは……そうだけど……」

これまででは、3階まで上がってくる「彼ら」は少なかつた。

……なんて言つても、權は納得しないだろう。

「……先生は、ここを出ていくつもりなんですか？」

慈がいなくなつてしまう。そう考えただけで、權は泣きそうになつてしまう。

その微妙な変化に気が付いた慈は、あわあわと慌てふためいてしまう。

「他の人間の前で発症したら大変です。……一週間くらいは様子を見たほうが良いです

よ。」

確かに權の言う事は最もだ。しかし、慈にはそれは方便だと感じた。きつと、權は初めてあつた生存者と別れるのがつらいのだろう。

そう考えた慈は、ひとまず上の階に上がるのは諦めた。

どうせ、今もまだ沢山の「彼ら」が校舎内に残っているだろう。

せつかく助かつたのに、すぐに感染し直してしまつては意味がない。

ここを出るのは、校舎内が落ち着いてからの方が現実的だ。

慈は、權の宣言した一週間を目安に、權を説得することを決めた。

「…權くん。聞いてほしいの。学校で、私たちに何があつたのか。」

第9話

「学園生活部っていつて……私たちは、これまで部活動をしてきたの。」

慈と離れたくないという気持ちが出て見えてしまう權を見て、慈はあの日から起きた事を權に話す事に決めた。

少しでも、自分たちに興味を持ってもらえないかと思つての行動だった。

權は、慈の話を黙つて聞いていた。

「ゆうりさんは私たちの中で一番頼れる子。」

慈は、悠里の事を思い浮かべながら語る。

慈自身も羨んでしまうような、女性らしい体つきの女の子。

身に纏う、全てを包み込んでくれるような優しい雰囲気。

でも、しっかりと怒る時には怒ることができるお姉さん。

「ご飯を作ってくれたり、洗濯をしてくれたり。家計簿を使って、学校の電力や水分、食料なんかを管理してくれているの。」

今思えば、悠里は主婦のような役回りだった。

こんな世界になっていかなかったなら…と、慈は思った。

「学園生活部を作ろうって提案してくれたのも、ゆうりさんなのよ。」

今でも思い出す。

ずっと泣いて落ち込んでばかりだった由紀を励ますために始めた部活。

それが、由紀の笑顔を取り戻した日の事を。

「くるみさんは、とっても強い子。いつも、「彼ら」から私たちを守ってくれてるの。」

次に慈が思い浮かべたのは、ボーイッシュなツインテールの女の子。

本人には言えないが、王子様然とした姿は、きつと女の子にモテるタイプだと慈は思う。

シヤベルを持って快活に笑うその姿に、いくら勇気づけられたかわからない。

彼女がいなければ、きつと私たちは屋上から出ることすらできなかった。

「何人もの「彼ら」を押し退けてくれたわ。嫌な役回りを押し付けちゃって、謝っても謝りきれないけど…」

いくら死んでいるとは言え、人を殺すのが気持ちの良いことなわけがない。

胡桃は平気だと笑うけれど、慈はどうしても真に受けることができなかった。

「彼女が「彼ら」を追い払ってくれたおかげで、今日までは3階にバリケードを張って安

全に生活できていたの。」

胡桃が「彼ら」を殺し、3階を制圧して皆で作ったバリケード。

それも、大量に入り込んできた「彼ら」に壊されてしまった。

「ゆきさんは、とつても明るい子。」

その事を頭の隅に追いやるため、慈は強引に胡桃の紹介を終わらせる。

最後に、面白い形の帽子を愛用する自分の生徒の姿を思い浮かべた。

「こんな事になつても、日々を楽しく生きていられるのはゆきさんのおかげ。」

その言葉に、權の表情がピクリと反応した。

誰だつて、暗い気持ちで生きていきたいわけがない。

「部活を作つてから、ゆきさんは、色々な事を提案してくれるようになったわ。」

部活を始めてからの彼女は、とても明るくなった。

それから、他の子達の顔にも段々と笑顔が戻り始めた。

今思い出しても、部の中心にいたのは間違いない彼女だ。

「でも、彼女は……」

私が、変えてしまった。

その言葉は、慈の喉元につつかえてついぞ出る事はなかった。

「……」

慈は、心の中で自分のことを責め立てる。

由紀の時間を止めてしまった事。

それは、慈にとって許せない過ちだった。

(…卑怯者。ゆきちゃん是我的せいであんな事になってしまったのに…悪いところだけ言わないなんて、詐欺師みたいな事…)

慈はしばらく口を閉ざしてしまつたが、その空気を払拭するように無理矢理元気な声を出す。

「皆、いい子達なの。それぞれが、それぞれの役割を持つてて…皆で一緒に生き抜こうとしているの。」

慈は、ここぞとばかりにまくし立てる。

真摯に伝えれば、きつとわかつてくれるはず。そう信じて。

「權くんも、きつと気に入るはず。皆もきつと受け入れてくれると思うわよ。」

慈は、小さくなつて座っている權の手を取る。

權は唐突なボディタッチに驚きつつ、内心ドギマギしていた。

こんな美人に手を握られて。健全な男の子なら舞い上がったしまうだろう。

「…佐倉先生」

「…うん。」

慈は、悲しそうに自分を呼ぶ權に、安心するように微笑みかけた。手を撫でながら子供をあやすように語りかけ、微笑みかける。

怖がっている權に向かつて、大丈夫だよ、と伝える。

：しかし、權は自らの手を包み込む慈の手に違和感を感じていた。

とても冷たいのだ。：まるで、死人のように。

前に触った時はそんな事は無かった。人肌に暖かかったからこそ、慈の体に母性を感じて安心できたのだ。

權は、あの血清とかいう薬は上手く効かなかったのかと不安を覚えた。

片や慈も、權の体温を感じないことを不審に思っていた。

手の感触はあるのに、人肌の暖かさを感じる事ができないのだ。

慈は、それを長らく半裸でいたせいで自分の体の感覚がおかしくなっているのだろうとあたりをつけていた。

「やっぱり、私は一週間したら様子を見て、上の階へ上ってみるつもり。一緒に来て欲しいけど、無理には言わないから：」

慈は、手を離して今度は權の頭の上に持っていく、なでなでと優しく撫で付けた。

男の子相手には少し恥ずかしいと感じたが、慈がやったことの中で由紀が一番安心したのがこれだったのだ。

慈はこれ幸いにと權にも試してみた。

結果としては大成功で、權にとってはこれまでのどんな励ましよりも幸せな気分となっていた。

「私達と一緒に生活したくなったら、教えてね。歓迎するわ。」

權は慈に包まれながら、自分はどうするべきかと少し揺らぎ始めていた。

いつしよに

第10話

巡ヶ丘学院。地下のシエルターにて。

手足を縛られた裸の女性が、もじもじと体をよじらせていた。

「はい、口を開けてください。ほら、あーん。」

「うう…ねえ、やっぱりやめない？私、自分でできるから…」

「でも、そんなことしてたら時間がかかりますよね？」

彼女に相對するのは、制服を着た男子生徒。

2人はなにやらもめている様子。

「ほら、早く食べてください。佐倉先生。」

「む…」

慈の手は、權によって縛られている。食事を摂るのも一苦勞だ。

そこで、權は慈に食事を食べさせようとしていた。

權が切り分けたハンバーグをスプーンですくい、慈の目の前に差し出す。

「あ、あくん……」

（まさかこの歳で、一回りも年下の男の子に食事を食べさせられることになるとは思っても見なかったなあ……）

慈は、顔を真つ赤にしてスプーンの上に乗せられたものにかぶりつく。

「はあむー……んっーもぐ、もぐ……」

ええい、ままよ！と、思い切って口に入れる。

カチン、とスプーンと歯がかち合い、拗われたハンバーグの欠片を口の中に入れた。ソースが舌先に触れた瞬間、慈の顔がキラキラと輝く。

驚いた。久しぶりに食べたハンバーグがとても美味しかったのだ。

小さくもぞもぞと口を動かす慈の姿は、まるで小動物のようだった。

「美味しいー！すっごく美味しいよ、權くん。」

（女神か……結婚したい）

小学生のように、ハンバーグを食べてはしやぐ慈。

その嬉しそうな表情を見ながら、權は自分のハンバーグに口をつけた。

甘辛いデミグラスソースが舌に絡み合い、噛み潰すと肉厚なミンチと中から溢れ出た肉汁が口の中で踊る。

櫛は、シエルターの食材を食べている時だけは幸せだった。

ちなみに、櫛はしっかりと自分と慈のスプーンを分けていた。

櫛にも、流石に目の前で間接キスを堂々とする勇氣はなかった。

「そうですね。肉汁が中までぎっしり詰まっています。」

「本当にね。こんなに美味しいの、久しぶり…」

いつも食べているものに、文句があるわけじゃない。

毎日作ってくれている悠里の料理が美味しくないわけじゃないし、ケチをつけるつもりもない。

だが、1ヶ月以上も食べられなかった缶詰以外の肉の味は格別なものだった。

そして、この美味しさを他の生徒たちと共有できないのが少し寂しかった。

「はい、もう一口どうぞ。」

「あ〜ん…」

朝食にハンバーグとはかなり重いものだったが、普段良いものを食べられていないであらう慈に櫛が気を使って美味しいものを選んだのだ。

シエルターに保存されていた食料には肉や魚といった美味しいものが多く、それが櫛一人だけならば1年以上も保ちそうなほどの量があった。

毎日食べて寝るだけの櫛は、食事だけが唯一の楽しみだった。

慈は少し嫌そうだったが、權はどうしても慈に美味しいものを食べて欲しかった。

「はん…はん…はむ…こくん。…ふう。本当に美味しいわね。」

慈は、ぎゅつと詰まったミンチ肉を何度も何度も噛み締めて嚥下する。

絡まった薄味気味のデミグラスソースの味が、お腹を刺激する。

勝手に唾液が分泌され、もう一口、もう一口、と催促する。

昨晩は食べられなかったが、これほどまでお腹が空いているのはおかしいと感じた。

幸いなことにそのハンバーグは1人前でもとても大きく、慈が満足しても余るほどの大きさがある。

（そういえば、私の最後の記憶は…お腹が空いた事だった…）

本能的に感じてしまった、人間を食べたいという欲求。

それを必死に押し込めて、行くあてもなくできる限り遠くへと向かった。

私はあの時、あの子達を食べようと…

「はい、どうぞ。」

權は次の一口を、スプーンに乗せて差し出した。

慈は、それをどうしても人間の肉を想像してしまって…

（嘘…どうして美味しそうって思ってしまうの…？）

その肉を、これまで以上に美味しそうだと感じた。

…そう、感じてしまった。

「どうしたんですか？」

「っ…っ…っ、その…」

突然食べなくなってしまう慈を、權は不思議そうに見つめる。

純粋な目でじっと見られた慈はたじたとなくなってしまう。

「はあむっ！」

慈はどうしようかと少しの間逡巡したが、結局ハンバーグを口の中に含んだ。

肉を食べる、という行為は怖かったが、今は、權に無用な心配をかけないようにしたかった。

結果的に悩みを一つ増やしてしまうこととなったが、しかしハンバーグは本当に美味しい。

本当にほっぺたが落ちてしまいそうだ。

(でも、ちよつとこのソース、ちよつと薄味…?)

慈は、デミグラスソースが水で薄めたような味に薄くなっている、と感じていた。

勿論、權は正常にとても濃い味を味わっていた。

加えて、温めていたはずのハンバーグの温度を感じることができていなかった。

慈は気がついていなかったが、焼くことはできなくてもせめて暖かくしないと美味し

くないと考え、冷蔵されていたハンバーグをシャワーのぬるま湯で湯煎していたのだ。

慈の体は、人知れず段々と人間としての機能が抜け落ちてきていた。

それに慈が気がつくのは、もう少し先のことだった。

「先生。ほっぺたにソースがついてますよ。」

「えっ、うそっ!?!」

「ほんとです。」

（入籍したい…）

第11話

シヤコシヤコシヤコシヤコ…

食事の後は歯磨きだ。

歯磨きは大事だ。しっかり磨かなければ、虫歯になってしまう。

虫歯になってしまうと、歯医者のないこの世界ではどうすればいいのかわからない。

これからは、病気には一段と気をつけなければならぬ。

「あ…あひひへえ…」

「もう少し我慢しててくださいね。」

ただ、權が磨いているのは自分の歯ではなかった。

手の動かしにくい慈のため、權が磨いてあげているのだ。

「おうひい…おうひいほ…」

「大きい？」

「ほうひい…」

「納品？」

「もおひいー！」

「もういいい？」

「ほうー！」

確かに、權は慈の歯をかれこれ30分は磨き続けていた。

普段あまりこういうことを言わない慈が言ってしまうのも無理はない。

ただ、權としてはこのままずっと慈の歯を磨き続けていたかった。

綺麗な白い歯と、中から覗くチロチロとしたいやらしい舌をずっと見ていたかった。

口を開ける慈の顔が。口端から溢れ落ちてしまう唾液がエッチで、それをさせている事が愉悦だった。

「はい、どうぞ。」

しかし、歯磨きには終わりというのは絶対に来る。

權は諦めてうがい用のコップを持ってきた。

美しい陶器を見たらなぞりたくなってしまうように、權もその衝動を抑えられなかった。

權は、無防備にさらされていた慈の背中を、つう…となぞった。

「ひゃあうんっ!？」

慈から思いの外大きな声が出て、權も驚く。

「ちよつとお…悪戯しないの。」

「ごめんなさい…」

子供に叱りつけるように、優しく諭す慈。惚れた。

權は高校の教員というより保育士みたいだと思った。

こし、こし…

權の腕が、慈の陶器のように綺麗な背中を往復する。

「どうですか？痛くないですか？」

「ううん…気持ち良いよ。」

慈は身体中に汗をたくさんかいたように気持ち悪がっていた。

權は気にしない…というかむしろ興奮してしまうのだが、慈にとっては辛いだろう。

という事で、手足を縛ったままシャワーに行かせるのは危険と判断した權は、濡れタ

オルで慈の体を拭いているのだ。

例によって、手が動かさず背中が拭けない慈のため、權は甲斐甲斐しく働いた。

本音を言えば、慈の背中に浮き上がる肩甲骨や背骨のラインに欲情していただけなの

だが…

「うん、ありがとう。もういいよ。後は自分でできるかな。手伝ってくれてありがとう

耐えきれなくなった情欲を鎮めていた。

權が自分から部屋を出て行ったのは、紳士だったからでも何でもない。

ただ、慈の肌の感触を忘れる前に今すぐ自慰をして気持ちよくなりたかったからだ。自らの欲望を愛撫して慰める。勿論、「オカズ」は先程の慈の体だ。

あの黄金比率で出来上がった体は、何度見ても慣れることはないだろう。

權は、夜中にもぞもぞと動き出す。近くに慈がいることに興奮してしまったのだ。

寝ている慈を想像して、胸を揉みしだいた時のことを思い出してしまったのだ。

あの感触を一度覚えてしまうと、また触りたくなってしまふ。

だが、あの時と今は違う。触れれば慈はきつとすぐに起きてしまふだろう。

「……はあっ……はあっ……はあっ……」

だからこそ、權は自分を慰めて落ち着かせようとした。

慈が起きないよう、音を立てないように気を配ってもぞもぞとズボンを下ろす。

中からは、カチカチになった肉棒が現れる。

今日だけで3回は発散したはずが、もうこんなになっちゃってしまっている。

こんな事では、隠し通せるのも時間の問題だ。

權が自分の息子を手に、慰め始めようとしたその時。

「…何してるの?」

「!？」

權は、突然投げかけられた言葉にビクン!と全身を凍りつかせた。

それは、紛れもなく少し離れた位置で寝ていたはずの慈の声だった。

(佐倉先生に…バレた!?)

權の全身から、サーッと血の気が引いた。

終わった…人生終わった…

權はこんな事をしている所を見られ、絶対に嫌われたと思った。

「こっちにおいで。」

「…はい。」

權は、叱られるのだらうと思って、ズボンをあげて慈へと近寄る。

すると慈は、權の予想もしてなかった行動に出た。

「…」

「!？」

慈は、無防備に近寄って来た權を抱きしめてしまったのだ。

突然のことに驚き、權は硬直してしまう。

「眠れないのね。怖い夢でも見ちゃった？」

「…」

（お、お、お…おっぱいが…!?!）

權は答えられなかった。…というか、答えるだけの余裕がなかった。

權の顔には、慈の全てを包み込む大きな胸が触れていた。

しかも、押し付けてきたのは慈の方なのだ。つまり、合法。

「名前、覚えてるかわからないけど…ゆきちちゃんもね。夜眠れない事が多かったの。」

この辺りで、權は慈が自分のしていたことに気がついていないことを悟った。

落ち着いて考えれば、こんな真つ暗な中で見えるわけがない。

とりあえず最悪な展開にはならず済んだ、とほつと胸をなでおろした。

…すると、どうにも慈とくつついてこの状況がたまらなく幸せに思えてくる。

「でもね。こうしてあげると、段々と落ち着いてくれるの。」

慈は、權の頭を慈しむように、大事な我が子をあやすように撫で始めた。

慈の誤算だったのは、女の子と男の子では違うという事だった。

權の方は、慈の体が柔らかいやら香る匂いがエロいやら心臓がうるさいやらでそれど

ころじゃなかった。

もうどうにかなってしまいそうだと本気で思った。

「よし、よし。いいい、いいい。」

とどめに、脳髓まで届くかのような囁き。

權は、甘くとろけるかのような時間に、固まってしまつて動く事ができなかった。

「落ち着いた？」

權は、声を出したら震え声になつてしまひそうで、首を縦に降ることで答えた。

本当は、むしろ落ち着かなくなつてしまったのだが、幸い慈にはそんなことは気がつかれていなかった。

「そう、良かった…怖くなつたら、いつでも言つてね。またこうやってぎゅ〜つてしてあげるから。」

權は、咄嗟に離れそうになつた慈の体に手を回した。

離れたくなかつた。どうしても慈と離れるのが嫌だつた。

「安心して。權くんが満足するまで、先生はどこにもいかないから。」

それに気が付いた慈は、嬉しそうな声色で再び權のことをその胸に抱きしめる。

この頃になると、慈は權にかなりの情が湧いていた。

（この子は、何としてでも守る。何としてでも、助ける。どうにか説得して、絶対に一緒に来てもらおう…）

慈は、自分の世話を嫌な顔一つせずにしてくれる權のことをいたく気に入っていた。

こんなに優しく、とてもいい子なんだろうと考えていた。

側や權はというと、今すぐ自分の股間を弄り回したくて仕方がなかった。

だが、それ以上に、慈の抱擁を1秒でも長く感じていたい。

そんな矛盾した考えを持っている齒がゆい状況に悶絶する。

(でも、これじゃ生殺しです、先生…)

權は、こんなに近くにあるのに自分から触れられない虚しさで、思いつきり発散したい切なさで一人震えていた。

ただ、この夜が權の人生の中で一番幸せな時間だったことは言うまでもなかった。

第12話

慈が感染して、そして地下に降りてきてから5日が経っていた。

その頃には、慈も權も、互いのいる生活に慣れ始めてきていた。

「佐倉先生。どうぞ…」

「あ〜ん…」

最初はとても恥ずかしかったこの餌付けも同じ事だった。

慈は、差し出されたスプーンに嘔み付く。

「はむ…んむ…んむ…」

スプーンの上に掬われている食材を口の中に隠す。

慈がスプーンから口を離すと、乗せられていたものは手品のように消え去った。

慈の歯がスプーンに触れるカチンとした感触。

そして慈の口と共に少しだけ引っ張られるスプーン。

權は、慈によるその間接的な感触さえ愛しかった。

權の慈への依存はもう病気の域に達していた。

「ありがとう。おいしいよ。」

こくと喉を鳴らして飲み込んだ慈は、ふんわりと笑ってお礼を言う。櫂はそれだけで救われた。それだけで生きていけた。

(おいしくない…)

が、櫂とは反対に慈の方はそうではなかった。

日に日に大きくなっていく食べ物への嫌悪感に、吐き気を催していた。

ある程度したときから、慈は見た目では美味しいと思う料理も、土を食べているかのように感じていた。

味をおいしく感じる事ができない。温度は一切感じない。あるのは、不快な食感だけ。

(おいしくない…)

それをおくびにも出さず、慈は食べ物美味しいと感じている演技を続けていた。

そうしなければ、自分が人間をやめてしまったことを認めてしまうようぞ…

「はい、どうぞ。」

「はむ…」

再び差し出されたスプーンを、慈は嬉しそうに啜える。

櫂には絶対に気付かれるわけにはいかない。拒絶されるのが怖かった。

(おいしくない…)

慈は、口に入れたものは必要最低限何度か嘔んで小さくするとすぐに飲み込む。

1秒でも長く味を感じていたくないからだ。

(おいしくないっ！)

慈は毎日3度この地獄を味わっていた。

だが、權が喜ぶのなら、という一心で我慢を続けることができた。

食事は、辛くて苦しい。でも權くんの笑顔を見ることが出来る。

あまり笑わない彼が、幸せそうな表情をすることが、慈にとつてはとても嬉しいことだった。

慈は、由紀が笑わなくなってしまうから、暗い顔の生徒を見るのがとても辛くなつた。

彼女たちを笑顔にできない自分の無力さをまざまざと見せつけられているようで、胸が苦しくなる。

だから、私は演技をする。

私が笑っていると、權くんが喜んでくれるから…

地下では日差しが入ってこないため、昼夜の感覚がなくなってしまう。

寝るタイミングは毎日バラついている。

眠くなれば權が慈に声をかける。

それが、2人の就寝の合図となっていた。

「佐倉先生……」

「ふふ。わかつたわ。」

慈は權の体を抱きしめる。

ふんわりとした感触と、慈特有の甘い香りと、死人のような冷たい体。

慈の体温は冬は辛いかもしれないが、今は春と夏との間。

むしろ、權にとってはひんやりとしていて心地が良かった。

「どう? 眠れそう?」

「……はい。」

「じゃあ、權君が寝るまで、先生ずっとこうしてるわね。」

權は、慈に抱きしめられながら眠るのが日課になっていた。

最初は落ち着かなかつた慈からの抱擁も、今では逆に落ち着く。

母親にも感じたことがなかつたほどの「母性」を、全く他人の女性から感じる。

それは側から見たらおかしくないことかもしれないが、權はそんなことどうでも良かった。

むしろ、慈が本当の母親だったら……などと考えてしまう。

慈は、櫛の頭を優しくなで付ける。

まるで、本当の自分の子供のように。

(子供ができたなら、こんな感じなのかな…旦那様も、恋人すらいないけど…)

由紀を寝かしつける時にも感じた、保護欲。

この子は私が守ってあげなきゃ。

…それが、大人の責任だから。

それが、私にできる、唯一のこと。

今日も櫛の手によつて朝食を終わらせた後。

慈は話を切り出した。

心苦しいが、言わなければならないことだった。

「櫛くん。…そろそろ、どうかな?」

「…なにか、ですか…?」

櫛は警戒しているようだった。

そう。今日は、慈が避難区画に来てから7日目の朝。

櫛が提案して、慈が宣言した期日の日だからだ。

「先生と、一緒に来てくれるか。…答えは決まった?」

「つー…それは…」

權は言葉を詰まらせた。

權としては、慈と離れるつもりはなかった。

が、このシエルターを出すのは怖い。

こんな幸せな生活が、ずっと続くと思っていた。思いたかった。

永遠にも感じた時間は、誰が願っても戻らない。止まらない。

「…先生、今日の夜にここを出るつもり。夜は「彼ら」も少なくなっているはずだから…」

「佐倉先生…」

權にはどうしても決断ができなかった。

權にとっては、この地下シエルターだけが安全な場所なのだ。

自分から死地に飛び込みたがる人間はいない。

だとしたら、慈はとても強い人だ。

(そんな泣きそうな顔をしないで…)

慈は慈で、權の顔を見て早くも折れかけていた。

しかし、彼女は權だけではなく上で逃げ延びているであろう彼女たちも大事な生徒なのだ。
自分を死んでいるかと思っっているはずの彼女たちに、早く伝えてあげたいのだ。

特に由紀さんは、あの危うい状況で私までいなくなってしまうたらどうなってしまうかわからない。

「それまでに、決めておいてね。 權くん。」

「…」

もし權がここに残るのを選んでも、慈は權の事を見捨てるつもりも忘れるつもりもない。

絶対にまた戻ってきて、今度は学園生活部の子たちと共に説得するつもりだ。

絶対に守る。慈のその思いに、嘘偽りはなかった。

わかつたわ♡

第13話

「んーと……こつちが確か薬品類で……」

慈は、上の階へ持って上がるものを見繕っていた。

シエルターには沢山の物資が揃っている。

食材に、衣服に、日用品に、緊急避難用品。

特に、女性にしか使い道がないものは權には全く必要のないものだ。

その物資に目をつけた慈がお願いして、權が許可を出していた。

「わっ、こつちの棚にはこんないっぱい缶詰が……」

沢山の棚が設置してあり、その中にはぎっしりと物資が詰まっている。

これほどの量があれば取り放題だが、慈一人が持ち出せる量には限界がある。

多すぎる物資を前に、慈は一生懸命吟味していた。

「ん……む……」

慈自身は一生懸命のはずなのだが、そのほんわかした場違いなうなり声がどうにも間抜けで、ふざけているかのようになってしまう。

身につけているのが下着だけというかなりラフな格好からもそう感じられた。

シヨーツから飛び出たお尻の付け根。それがフリフリとリズムよく左右に揺れる。

そんな姿を後ろから眺めていた權の股間がムラツときた。

「…佐倉先生。」

愛おしくなってしまった慈に、後ろからぎゅつと抱きついた。

毎晩抱き合って寝ている權は、慈に対するスキンシップに抵抗がなくなってきた。た。

慈なら許してくれる。こんなことができるのも、そう確信しているからこそだ。

「權くん？」

權の考えは正しく、このくらいの事なら慈は笑って許すつもりだ。

今なら、ご機嫌な慈から頭をなでなでされるオプションもついてくるかもしれない。

「佐倉先生…どうしても、行っちゃうんですか？」

「…ええ。私を待っている子たちがいるから…」

權の希望を折ってしまうのは、とても心苦しかった。

が、半端な希望を持たせてしまうのはよくない。

慈ははつきりと答えた。

權は考えた。考えてしまった。

…もう一生会えないのなら、最後に自分の欲望を全てぶつけてしまいたい、と。
拘束を解く前の今なら、慈は自分に反抗できない。

そのことが、權の欲望に拍車をかけた。

「…？權くん？」

慈に抱きついたまま喋らない權を不審に思い、慈は問いかける。

「權…くん…？」

「さくら…先生…」

(こんな事、してしまつたら…絶対嫌われる…でも、もう一生会えないかもしれないし…)

「ちよつ…えつ？えつ!？」

自分の匂いを付けてマーキングをするかのように、スリスリと自分の体をすり付ける。

慈は突然の權の行動に戸惑ってしまう。

…ここまでなら、悪戯好きの男の子、として慈の中で処理されていただろう。

「もう。くすぐったいよ、權くん…」

戸惑いつつも、慈は權の行動を受け入れる。

甘えてくれているのかも、と慈は嬉しい気持ちにすらなっていた。

…それが変わったのは、硬くて棒状のモノが、お腹に擦り付けられてからだだった。

(嘘……これつてもしかして…)

慈にはそれが何か心当たりがあつたようで、ほんのりと顔を蒸気させた。

慈は、權の事を守るべき生徒だとは思つても、「男」とは見ていなかった。

それは、權が高校生にしては幼い少年のような顔立ちだという事もある。

「權くん、そろそろ…」

權の手は、肩、腕、手の甲と、慈の柔肌を撫でて回る。

冷たくなつた慈の体は、それでも權の心を温めた。

權の手は、そのまま慈のお腹のあたりまでおりてくる。

「はあっ…はあっ…せんせ…」

「ひゃあっ…やだ、くすぐったいよ…」

女性らしく丸みを帯びたお腹に、曲線を描くくびれ。

權の興奮は最高潮へ達した。

初めて無意識の慈の体へ触れた時のような高揚感を感じた。

このまま、行くところまで行ってしまいたい。

(…佐倉先生と、セックスが、したい。)

「えっ!?!そこは…ダメっ!」

しゅると手が伸びたのは、慈の下腹部。

唯一の着衣であるショーツ。

流石の慈も焦りを感じて、權を嗜める。

頭ではわかつていた。

しかし、權はどうしても自分の体を制御しきれなかった。

權は、自分の胸の中でもどもぞと身悶える慈を押し倒した。

「先生…好きです…好き…どこにもいかないで…」

權は慈の胸に顔を埋め、強く抱きしめる。

もう離したくない、と強く、強く。

慈は、そんな權をどうしても拒否することができなかつた。

今拒否してしまえば、一生消えない傷をつけてしまうような気がした。

慈は、權を落ち着かせるために両手で權の頭を包み込んだ。

「…ありがとう、權くん。」

慈は、純粹に好意を告げてくれた生徒に礼を述べた。

耳元で囁かれる癒しに、脳髓がとろけてしまいうさだ。

權は、たまらずズボンをずり下げた。

「ひ、わ、わ、わ、へっ!？」

慈は權が股間から取り出した肉棒を視界の端に捉えて、顔を真っ赤にしてしまう。

權のソコは、子供ながらに立派な大人になっていた。

ある意味慈のせいで、とても元気になっている。

「先生……っ」

「えっ、ちよつと……權くん!? ダメ。…ねっ?」

ズリ、ズリ…

權の肉棒が、慈のショーツの上を滑る。

權は慈の体を感じたまま、犬のようにへこへこ腰を動かして快感を貪った。

いけないことをしている。權は背徳感に酔い痴れた。

もつとしたい。もつと欲しい。

權は、慈のショーツに手をかけた。

いれたい。

權の頭に浮かんだのは、その言葉。

慈の胸に顔を埋めながら、手探りでクロツチの部分をつ引っ張り、ずらす。そして、その部分へ頭の先を押し付ける。

「だめーだめーだめだよ……」

慈と權は、互いに視線を合わせて見つめ合う。

そこにいるのは、理性を失った獣だった。獣に言葉なんて通じない。

權は、腰を動かしてナカに入れようと試行錯誤する。

しかし、初めての權にはどの部分に入るのか、よくわからなかった。

「……お願い……やめて……」

いよいよ危機を覚えた慈の瞳から、ポロリと一筋の涙が流れ落ちた。

それを見た瞬間、權の心から欲望という欲望がスーッと消えていった。

後に残ったのは、慈への罪悪感と後悔だけだった。

「あ……僕……そんなつもり……なくて……」

自分のしてしまったことに震え、謝罪する。

どうしてこんなに自分は欲望に弱いのか、情けなくなってしまう。

「ごめんなさいっ！ごめんなさいっ！ごめん……な……っ！っ！」

權は子供のように泣きじゃくった。

自分のしてしまった事の重大さに、落ち着いてからやつと気が付いたのだ。

「こんな事して…信じてもらえないかもしれないけど…僕、本当に先生を傷付けるつもりなくて…」

泣いたら許してもらえるわけではない。

強姦未遂はその程度で許される事ではない。

…それでも慈は、自分が權を泣かしてしまったと受け取ってしまった。

「…一緒に…」

慈は、一大決心をする。

これが正しいのか間違っているのか。

慈には判断がつかなかった。

「一緒に、来てくれるなら…いいよ…」

「…え？」

慈と權に、大義名分が生まれてしまった。

第14話

「一緒に来てくれるなら……いいよ……」

慈は、敢えて茨の道を選んだ。

（私、最低の教師だ……）

生徒とまぐわうなど、教師としては失格だ。

しかし、慈はそれでも權の事を救ってあげたかった。

最近はや々と笑顔を見せるようになってきた權。

学園生活部の子達は、1日を幸せに生きている。

それを、權にも伝えたい。彼女達と友達になれば、きっと元気になるから……

（私の体で、この子を救うことが出来るなら安いものだ。）

權が自分の体を求めるのなら、それを差し出そう。

自分の選択が教師として間違っているとしても、きっと後悔しない。

（私を救ってくれた命を、この子のためにも使う。）

慈は、權を受け入れた。

權は、慈に許可を取ってショーツを脱がす。

慈の顔は沸騰しているかのようになつて赤になつていゝる。

両手で腰を持ち、その上に張り付いてゐる布を持ち上げる。

慈のショーツだけ脱がすことがなかつたのは、權自信が慈のお♡んこを見るのが怖かつた、ということもあつた。

そんなことで嫌いになるとは思わぬが、あからさまに使用込まれてゐるような見た目だつた場合ショツクを隠しきれぬい。

權の心臓がドクンドクンと大きな音を鳴らし始め、期待と不安に包まれる。
すすす…

見たい。でも、見たくない。

そんな複雑な心境の權は、好奇心に背中を押されてゆつくりとショーツを下ろす。

肌の上に乗つた、可愛らしい桃色の毛がひよつこり現れた。

(…可愛い…)

權はどうしてか、慈のそんな場所に生えてゐる毛を愛おしく感じた。

多少もさつとしていているものの、内側に纏まった気品のある陰毛だった。

慈の体ならどの場所でも愛せるという自信はあったが。

「あまり見ないで…」

シヨーツの上部からはみ出した毛をじつと見つめている權に、慈はたまらず頼み込む。

普段はしつかりと行なっている毛の処理も、ここ一週間はできていない。

慈は処理の甘い毛がはしたくないと思われていないかとても不安だった。

慈は腰を持ち上げ、權がシヨーツを下ろしやすいうように気を使った。

そのタイミングを逃すまいと、權はするりと慈の腰からシヨーツを引き抜いた。

…目の前に繰り広げられているのは、桃源郷。

桜色の葉の下に、桃色の花弁がちよこんと隠れている。

素晴らしい。素晴らしい！なんて素晴らしい！

頬ずりしたい。毛に手を押し当ててさわさわしたい。

「可愛いですね…」

「も、やだ…っ」

慈の羞恥心は、そろそろ限界へと近づいていた。

自分の股間を凝視され、可愛いと言われてしまった。

こんなに恥ずかしい経験は人生で初めてだ。

羞恥心で人が傷つくのなら、慈は既に致命傷を負っていたことだろう。

權は自分の股間から天高くそびえ立つ肉棒を握り、慈の股間へあてがう。

慈はびくりと腰を震わせた。

慈は、權の普段と比べて何倍もの大きさにも膨れ上がったものから目が離せずにした。

(これが…お♡んちん…)

流石に形くらいは知っているが、実物を見るのは初めてだった。

こんな状態のお♡んちんは、写真ですら見たことがない。

慈は、真正正銘初めて見たのが權のものだった。

(もう、やっちゃうんだ…)

正直にいうと、少し怖い。初めてはかなり痛いものだと思っていた。

体の内側から、膜を破られるのはどれほどの痛みなのだろうか。

慈には想像もできなかった。

權が自らの棒を押し当てると、くにゆり、と歪む。

とても柔らかかった。まだ入り口も入り口だが、權はとても興奮する。

ああ、この中に入れてしまったら、どれほど気持ち良いのだろうか。
つぶ…

權は思い切って、頭を穴の内部へと突き入れる。
すると皮が突つ張り、股間に痛みが走った。

「い、痛…いたた…」

慈は、權のためにならざれだけ痛くても耐える、という覚悟があった。
反対に權は、そんな事は少しも考慮していなかった。

セックスとは、入れてしまえばあとは気持ち良いだけだろうと思っていた。
「待って、權くん。入れる前に、濡らさない…」

權は、きつと初めてだ。

慈は初めての權をリードしてあげたかった。
が、幸か不幸か、慈も初めてだった。

大した助力はしてあげられない。

「濡らす…って、どうすれば…」

セックスが初めての權は困惑していた。

慈自信も、どこをどう弄れば…なんてことはよくわからなかった。

咄嗟に思いついたのは、「舐めてもらう」こと。

だが、お風呂に入っていない慈のソコを舐められるのには抵抗があった。そもそも、恥ずかしくてそんな事言えるはずがない。

「そ、そうね……どうしよつか……」

舐めるは却下。触ってもらうにも、權はどこを触ればいいかわからないだろう。そもそも、慈もどこが触られて気持ち良くなるのかわからない。

……となれば、普段から自分がしている慰め方を教える他なかった。

自分でどこを触るのが気持ち良いのかを教えなければならぬのだ。

これまで、こんなに恥ずかしいことがあつただろうか。

「わ、私の……お、おお、おば……」

「……っ」

急に奇声を上げ始めた慈に、權は困惑する。

もしかして、恥ずかしすぎて壊れてしまった？

權がそんなことを考えていると、慈は覚悟を決めたように一呼吸置いた。

そして……

「おっぱい……触って……っ」

「っ……っ……」

權は一瞬にして胸打たれた。

世界中に、これ以上に可愛い生き物がいるのだろうか、とすら思った。それほどに、慈の台詞は衝撃的だった。

「…わかりました。」

權は断る理由はないと大喜びで胸に手を伸ばした。

慈は男に初めて触られる、とドキドキしているが生憎その童貞も処女も既に捨ててある。

バレてしまったら、折角のチャンスを不意にしてしまうかもしれない。

權はその事を慈に悟られないよう、慎重に胸に手のひらを覆い被せた。

「…柔らかい…」

權は思わずと言った様子で呟いた。

一度経験していても、この柔らかさは、この弾力は飽きたりはしなかった。

許されるのなら、いつまでも触っていたくなる魔性の存在だ。

「恥ずかしいから、感想とかあまり言わないでくれると…」

權の言葉に、慈は顔を赤らめる。

今日だけで恥ずかしいことを何度もしている慈でも、異性に胸を好き放題触られる、というのはかなり恥ずかしかった。

そして小さな快感も生じていることも加えて恥ずかしい。

もにゆん、もにゆにゆん。

むにゆん。むにゆうん。

「ひゃあんっ!?!はあんっ!あうん…!」

慈のおっぱいは、權の手の中で自由自在に形を変えた。

素晴らしい。何者にも例えようがない、女性だけの存在。

「すごいです。佐倉先生のおっぱい…押せば押すほど、跳ね返ってきます…」

「だからあ…っ!」

慈は自分の下腹部を直接触った事はなかった。

直接触って痛くなってしまうのが怖かった。

指で触って、膜が破けてしまう、みたいな事を聞いたこともあった。

だから、自分を慰める時はいつも胸を弄って快感を得ていた。

優しく揉みしだいて、未来の恋人に揉まれている自分を想像してみたり、乳首をつまんで甘い痺れを感じたり。

誰にも言えない、一人の情事。

そもそも、恋愛という気持ちが変わらなかつた慈は、恋人を作ることもなかつた。

その見た目からか、声をかけてくれる異性もたくさん居た。告白だつてされたこともある。

しかし、なんとなく怖い、という感覚があり、一步踏み出せないでいた。

「佐倉先生……気持ち良いですか？」

「……うん、うん……気持ち良いわ……」

それなのに、自分はどうして今一回りも年下の男の子に、自分がおっぱいを揉まれて気持ち良いかどうかを答えているのだろうか。

慈は、甘い快感と恥ずかしさで、もうおかしくなってしまうそうだった。

第15話

權は、慈が許している事をいいことに、慈のおっぱいを好き放題揉んだ。

權にとつてはそれはもう至福の時間だったわけだが、慈はどうなのだろうか。

ふとした疑問を解決するため、權は慈の女性器の状態を確認する。

「うーん…あまり濡れてませんね…」

權の言う通り、慈の女性器からはあまり愛液が分泌されていなかった。

じつとりと湿り始めてはいるのだが、触ってみないとわからないくらいの違いだ。

目に見えて濡れるのは、もう少し後になるだろう。

「佐倉先生。本当に気持ち良いですか…？」

權は、慈の女性器があまり濡れていないため、感じている演技をしているのではないかと疑った。

異性経験の乏しい彼には、女性器の濡れ具合でしか女性の感じ方を判別する方法がなかった。

慈は、疑う余地もなく感じていた。

それも、教え子に胸を揉まれている、という状況による背徳感も加えて楽しんでいた。そして自己嫌悪し、更に増える背徳感で自分を縛り、身悶える。

「うん。気持ち良いよ…」

慈は、どうしてこんなことを言わなければならないのか、と恥ずかしくなってしまう。しかし、そうしてでも權には、自分が気持ち良い事をはつきりと伝えてあげたかった。でも、あまり濡れてませんよね…」

「そんなことないよ。」

慈は焦った。

エッチをする事で權は自分についてくる事を了承した。

自分が濡れなければ、エッチをすることができない。

それは、慈にとってはとても良く無い事だった。

「僕、佐倉先生にもつと気持ちよくなってもらいたいです…」

…このままでは、ダメだ。

權には、絶対に一緒に生きてもらわなければならぬ。

でなければ、自分自身を許せないだろう。

慈は意を決して、自分の性癖を權に伝えることにした。

「權くん、ちょっと…」

「何ですか…?」

慈は、少し躊躇しつつもしつかりと言いつつ切った。

「その、えつと…私の、ち、乳首…触ってみて。」

(ああっ！言ってしまった…！私、生徒になんてことを…)

慈は、こんなことを言ってしまう自分に嫌悪した。

自分は教師失格だ。正常な世界に戻ったとしても、もう教師を続ける事はできないだろう。

しかし慈の頭の中とは裏腹に、慈の女性器はその背徳感によって湿り気を帯びてきていた。

「乳首って…これですよね…」

權は、慈の言う通りに桃の先端に鎮座している桜の蕾を突つづいた。

慈の乳首は、既に恥ずかしいくらいピンピンに勃起してしまっている。

触ってくれと言わんばかりに主張している蕾は、權の指に嬉しそうに震えた。

「そう。…摘んでみて。」

慈は顔を真っ赤にさせながら、權に自分の乳首を摘むように促す。

權はそんな慈の提案に、初めて慈の体を触ってしまったことを思い出した。

(やっぱり、あの時佐倉先生は気持ちよくなってくれていたんだろうか…)

その時に弄り回したせいかな、乳首の触り方は何となく予想ができています。

權は、慈の硬くなった乳首を親指と人差し指で軽く摘んだ。

「ひゅんっ!？」

慈は、その刺激に呆気なく嬌声をあげてしまう。

それはとても甘美なもので、權はいよいよ興奮も絶頂へと達しようとしていた。

「佐倉先生は乳首を触られるのが好きなんですね？」

「ひゅっ…ひいん…ひゃあう…そ、そんな事言わないで…」

權が乳首をむに、むにと指で挟む度、慈は面白いようにひんひん喘いだ。

これだけ反応をくれるのだ。乳首が慈の弱点で間違い無いだろう。

權は段々と楽しくなってきた、慈の乳首をいじめ始める。

「ひん…ひあ…っ！ひゅ…あんんっ！」

擦ったり、摘んだり、転がしたり。

色々な方法で慈の乳首を刺激する。

可愛い反応をする慈がとても可愛くて、本来の目的を忘れてしまうほどに熱中してしまふ。

「はあ…ひんっ！か、權くん…っ！ちょっと、休憩…」

「…わかりました。」

「…ありがと…ひうんっ!? ちよ、ちよっど!」

休憩と言う慈に、權はフェイントを入れて最後の一回、慈の乳首をくにと摘み上げてから離れた。

そんな悪戯に慈は満更でもなさそうにプリプリと怒るような仕草をする。

「ごめんなさい…反応が可愛くて…」

「か、かわ…っ!も、もう!先生をからかうんじやありませんっ!」

「…本当のことなのに…」

「っ!もう!もうっ!」

その言葉は、慈には恥ずかしさも限界を超えてしまった。

そんなこと言う子は誰だ!とばかりに權の頭をグリグリと撫で回す。

慈なりに、恥ずかしさをごまかしているのだろうか。

「…でも、佐倉先生が乳首をいじめられるのが好きなのは証明されましたね。」

權は、慈の女性器から溢れ出る愛液を見ながら慈へと話しかける。

乳首が弱いことを知られた慈は、もう穴があれば入りたかった。

ここに來てまさか追撃されると思っていなかった慈は、再びシユンとなり大人しくなってしまう。

「…先生。そろそろ、いいですか…？」

休憩もそこそこに、權は慈へと再戦を申し込む。

これが始まれば、權は童貞を、慈は処女を捨てることとなる。

人生において、大事な瞬間。それを同時に迎えることのできる2人は何と幸運なことだろうか。

「…わかったわ。」

慈も覚悟を決め、その姿はまるで戦争に行く兵士のようなだった。

「そんなに緊張しないでください…僕までドキドキしてきます…」

「…ふっ、そうね…リラックスしなきゃね。」

慈は、大きな緊張をしていた事を恥じた。

(私がこんな事では、權くんだって緊張してしまう。私が引つ張ってあげないと…)

慈は、權のことを自分のその豊満な胸へ抱きしめた。

いつも、寝る時にしてあげるように。

そうすると、權もリラックスしてくれと思うたからだ。

「ぎゅ〜。どう？安心する？」

「…はい。とつても。」

權にとって、慈に抱きしめられる事はとても幸せな事となっている。

慈が今こうして權のことを抱いたのは正解だったようだ。

「…入れてもいいですか？」

「…うん。ゆつくりね…？」

「わかりました。」

慈は、処女喪失をしてしまうのが怖かった。

具体的には、その時に感じてしまうであろう痛みが、だ。

しかし、それは權に抱きつく事で少し緩和されていた。

慈が權に抱きつく行為には、權だけではなく慈の方にもリラックス効果があった。

ずぶ…

權の、頭が入った。

權の肉棒は、入り口を念入りに確かめるように何度も何度もそこを擦りあげた。

「あつ…うう…」

それだけの事で少し気持ちよくなり、嬌声をあげてしまった慈は權に抱きついたまま赤くなつた。

そして、これから来るであろう痛みに備えて、權の事をぎゅつと強く抱きしめた。

第2章？ふたりよがり♡

第16話

おっとり系の慈には似合わないもさっとした桜色の毛をかき分けて、目的の場所を探り当てる。

びったりと閉じたその場所は、未だ誰の侵入も許していないと主張しているかのようだった。

權は穴がどこなのか、エッチな漫画や動画を見た時の記憶を頼りに、陰唇をこじ開ける。

(…きた…っ)

っん、と慈のひんやりとした下腹部に押し当てられる、弾力のある亀頭の感触。權のそこはとても滾っているのに、暖かさを感じる事ができないのが残念だ。

「っ、このまま押し込んで、良いですか…？」

「うん…良いよ。」

慈は、内心怖くて仕方がないのを隠しながら權へと微笑んだ。
そんな慈に、權はもう我慢する事ができなかつた。

慈が驚かないように、ゆっくり、ゆっくりと押し込んでいく。
ずず…

權の肉棒は、腰の動きに合わせて慈の中を突き進む。

合わせて訪れた激痛に、慈は歯を食いしばって耐える。

もし痛いといつてしまえば、優しい權はきつと止めてしまう。

そう思つて、慈はこの激痛を心の中に押し留める。

(冷たい…)

權は、慈の中がひんやり冷たいことに驚いた。

もう、慈の暖かさを感じることはできないのだろうか。

皮膚が冷たいのだから体の中まで冷たくてもおかしくはないのだが、それがどうしても悲しかった。

(すく、きつい…！)

それと同時に、權は慈の激しすぎる締め付けを感じていた。

異物の挿入を拒むかのようにぎゅうぎゅうに締め付ける慈のお♡んこ。

それを、權は無理矢理腰を押し込めて突き入れた。

ちゆるん、と慈のお♡んこは權の頭を啜え込む。

慈の中を感じ、權はこれ以上ないほどの幸福を味わった。

「はあ…はあ…先つぽ、入りました…」

「うん…權くんのが入ってるのわかるよ…」

慈が、權にもつと入れるように促す。

これだけでこんなに幸せなのに、全て入れてしまったらどうなってしまうんだろうか。

權は期待に震えた。

「ずずずっ…」

カリ首を超え、なおもゆっくりと、だが着実に進む權は、先の方に何か引つ掛かりを覚えた。

そして、それはきつと処女の膜だ、と思ひ至る。

（佐倉先生は処女だったんだ…！）

慈の清廉な見た目に、もしかするとそうではないか、という淡い期待を抱いていたのは事実。

が、この年まで貞操感の強い女性などそうそう居ない。

そう諦めていた權も、その妄想が本当だと知り自分が慈の初めての男になれる事を心

の底から喜んだ。

「ここからすこし、痛いかもしれません…」

權は、膜を破る前に慈に忠告をした。

慈は既に下腹部が熱く、今もなおキリキリと痛んでいた。

この上まだ痛いのか、と戦々恐々としてしまう。

ずつ…ずつ…

權が、腰を突き入れる。

慈の奥の奥から流れてきている愛液が權の肉棒の挿入を手助けする。

引つかかっていた膜は、ゆつくりと、しかし確実に裂けていく。

めりめり…

權は、聞こえるはずのない処女喪失の音のようなものを幻聴した。

自分が、愛している女の初めてを奪っている。

慈が、自分のお♡んちんで、股を引き裂かれている。

痛みを感じているはずの慈には申し訳なかったが、その事が、たまらなく嬉しかった。

「うっ…うっ…うあ…」

慈は、まるで股が裂けているような感覚を覚えた。

痛いのは痛い。が、あの子達を置いてきてしまった時と比べると、こんなもの屁でも

ない。

慈は、權に心配をかけないよう絶対に「痛い」と言わない事を徹底した。

しかし、權に顔色から無理をしているのが伝わってしまう。

「先生……大丈夫ですか……？」

「大丈夫……だから、もつと奥まで……」

慈は權に心配されないよう、やせ我慢を貫いた。

そんな慈を權はとて愛しく思い、どうせなら一息に、と腰を突き入れる。

「ずずずっ！」

「ふうふうっ……！」

歯を噛み締め、喉の奥からうめき声が漏れる。

それは側から聞いてもとても痛そうなものに聞こえた。

「ぜ、ぜんぶ……挿入ったね……♡」

「先生……」

權は慈の事を気遣うが、慈は決して弱音を吐くことはなかった。

（自分で決めたことだ。最後までやり通そう。）

この子の想いを、全て受け止めよう。

悪いのは私たち大人だ。勝手なことに巻き込んで。

この子は生徒なんだ。私が守るべき存在だ。

この痛みに誓おう。この子は、私が絶対に守る。）

慈は瞳に涙を溜めながら、權と繋がれた事を嬉しく思った。

「動きますね…」

「うん…きて…」

初めて繋がることのできた二人は、初々しく体を動かす。

權が腰を持ち上げて肉棒を引き抜き、再びゆつくりと慈の中へと戻っていく。

ずっ…ずっ…

「はぁう…っ…ううっ…」

慈は、まだ膣壁に擦れるような痛みを感じていた。

これまで何も入れた事がなかった場所に、いきなりこんなに太いもの（權のサイズは平均的なもの）を挿入してしまったのだ。

痛いのも当たり前だろう。

「先生…手、握ってください。痛いの、和らぐかもしれないので…」

權は、辛そうな慈をみて、少しでも負担を減らしてあげようと画策した。

ドラマか何かでやっていた出産の痛みに耐えるときは手を握っているシーンを思い

出し、危うげな記憶を元に慈へと提案した。

慈は、手に添えられた櫛の手をそっと握りしめた。

拘束紐のせいで手がつながつているため、若干苦しい姿勢となったが、慈は櫛の思いやりが嬉しかった。

「本当だ…ちよつと、痛くなくなったかも。ありがとう、櫛くん。」

慈は笑い、櫛にお礼を告げた。

櫛は櫛で、自分の提案した事で慈が喜んでくれた事がとても嬉しかった。

慈は、何度自分のことを喜ばせてくれるのだろうか。

櫛は、慈を自分に巡り合わせた幸運に感謝した。

「少しずつ、動かしていきますね。」

「うん、お願い…」

慈のお♡んこからは、破瓜の血液がタラタラと流れ落ちていた。

それを、櫛はとも不憫に思った。

どうにかして、慈の痛みを和らげてあげたかった。

ずちゅつ…ずちゅつ…

慈が痛む刺激に慣れてきた頃。

權は慈に確認を取り、ゆっくりとスピードを上げていった。

慈はまだまだ痛かったが、初めての權の記憶を気持ちよかった、で終わらせてあげたかった。

少し無理をして、腔壁を擦る權を受け止める。

そんな様子の慈に、權は慈は気持ち良くないのだと直感した。

「先生…乳首、触つてあげます。」

「へっ？ちよっ…いい、今は…ひゃうっ!？」

權は慈の痛みを紛らわすため、一生懸命に乳首を摘んだ。

そして、痛くならないように優しくぎゅう、ぎゅうと押しつぶす。

「っ…っはあっ…ちよ、ちよっど、まって…っ！」

下から痛みが、上から快樂が。

同時に与えられる感覚に、慈はもうわけがわからなかった。

この頃には死人のように冷たかった慈のお♡んこが、權の熱く滾る肉棒によりじんわりと暖かくなってきていた。

「はっ…はあっ…！先生…出ちやいそうです…っ」

「はあっ！はううっ！そ、そうね、出ちやうわよね…」

組んず解れつ、互いに初心者ながらも、なんとか頑張っていた2人。そんな中、權が慈の体の中で射精感を覚えた。

それを聞いた慈は焦る。

このまま膣内に出してしまうとまずい。

もし赤ちゃんができてしまったら、自分だけではどうしようもない。

そもそも、妊娠してしまった自分を見て、あの子達はどう思うだろうか…

「うあっ！急にきつく…！」

そんな事を想像してしまった慈は、思わず体を強張らせてしまった。

それに連動して、慈の女性器がキュンキュン締まった。

「お願い、權くん。…外に出して？」

「…うう…嫌だ…お願い…中に射精させてください…っ」

快楽も絶頂に達しようとしている權が懇願する。

慈は、お願いをする生徒に、そして權に弱かった。

(…そうだ。私はどうして初めに、外に出してもらおうと決めておかなかったの…)

「駄目…赤ちゃんできたら、どうするの…っ？」

「育てます！頑張つて2人分働きます！だから…っ！」

「そんな単純なことじゃないのよ。わかってるの…？」

「でも…でも、僕…佐倉先生に、子供産んでほしいです…」

「…っ」

(なんてことを言うの、この子は…)

權と慈は、教師と生徒。

その事を必死に意識する慈。

權のエッチな言葉に、興奮してしまう自分を心の底から嫌悪した。

「佐倉先生…！先生…！せんせい…！うっ…」

「だ、だめ…っ！」

びゅっ！びゅびゅーっ♡びゅるるっ♡

「で、てる…なかに、いっばい…」

いけないことなのに。絶対に、許してはいけなかったのに。

温度を感じることはできないはずなのに、体はとても冷たいはずなのに。

慈の体は、なぜかぼかぼか暖かかった。

第17話

慈は、權の射精後、息も絶え絶えになりながら嗜める。

「駄目って……言ったのに……」

「ごめんなさい……」

權は慈の体にぎゅうとしがみつки、最後の一滴まで全て慈の中に注ぎ込もうとしている。

權はあまり反省してはいないようだった。

「……赤ちゃん、できたらどうするの……」

慈は、少し恥ずかしがりながらも怒っていた。

權が避妊の事を甘く考えているのなら、それは正しておかなければならない事。

教師として、避妊の大切さを教えなければならなかった。

しかし、帰ってきた返答は、慈が予想だにしていなかったものだった。

「責任取ります……結婚してください……」

突然の告白：いや、プロポーズに、慈の頭の中は真っ白になった。

慈は数秒固まって、そしてみるみる顔を赤く染めていく。

慈は、心も体も初心な女の子だった。

「えっ?! ひえっ?! えっ、うそ、もう! な、何言ってるの…先生をからかわないで?」
「からかってなんてないです! 僕、本当に先生のこと好きです。」

「えっ、ちよつと…えっ、本当に? えっ?」

「好きです。…好きでした。ずつと、前から…」

挿入したままの姿勢で、權は慈に迫る。

慈は、とてもまっすぐに見つめられる瞳からすぐに目を逸らしてしまう。

結婚はない。…だけど、言われた事はとても嬉しかった。

それが、慈の思い描く教師の思う事ではないことに、慈自身気付かないでいた。

「そ、それにしても、結婚って…ちよつと早すぎるんじゃない?」

「…そうかもしれません。でも、もうすぐ結婚できる年です。」

「それに…僕、先生より好きになれる人なんて世界のどこにもいません。」

「…っ」

真剣に慈にとって恥ずかしい事を次々と告白する權に、慈は不覚にもときめいてしまった。

慈には、恋愛経験という高尚なものはない。

故に、純粹に好意をぶつけてくる權に絆されていた。

「そんなに可愛いかわいって言わないで…」

「嫌です。可愛いです。佐倉先生。」

「もう、それ…！私…もお…いやくあ f r t g ふ y j c o ー p」

あわわわ、と恥ずかしいやら嬉しいやらで頭がショートしてしまう。

慈は、正常に言葉を紡げていなかった。

(結婚、なんてまだ考えられないけれど…)

もし本当に世界が終わってしまったら、地球に私たちだけしか人間がいなくなってしまう。

種の存続のため、自分は權と結婚する事になるのだろうか。

人間として、教師として。何が正解なのか、何が正しいのかはわからない。

だが、慈にとつて嫌な気持ちではなかった事は確かだった。

「…佐倉先生。あの、もう一回良いですか…？」

「もう一回って？」

まさかまたプロポーズ？とドキドキしてしまう慈。

だが、その期待ははずれ、權がしたかったのはセックスだった。

出したばかりの權の肉棒がむくむくと起き上がっているのを見た慈は、自分の考えが間違っていたことを悟った。

「ごめんなさい……先生への気持ち溢れて……我慢できなくて……」

「えっ……いや！ちよつと待って、休憩させて……」

慈の下腹部の痛みもようやく薄れてきていた頃だった。

慈としては1回だけのつもりでいたため、その提案は完全に予想外のものだった。

「すみません……これで最後なので……っ」

「もう、權くん……っ！」

中から溢れ出る精子のおかげで滑りやすくなっている。

慈のお♡んこは、ちゆるんと權の肉棒を簡単に飲み込んだ。

「ああんっ！」

当然、權はこれで最後にするつもりは欠片もなかった。

2人の夜は、まだ終わらない。

權が満足したのは、5回戦を終わらせた頃だった。

權にとっては、一ヶ月溜めに溜めた性欲を吐き出す絶好の機会だ。

仮にも權は性欲の多感な男子高校生。

何度も何度も復活してしまうのも仕方ないと言えば仕方なかった。もうその頃には慈も痛みのお腹に少しだが快感を感じ始めていた。

「もう！駄目って言ったのに…」

自分は生徒との情事で感じる変態だったのか。

その事が恥ずかしくて、誤魔化すように權を叱る。

「ごめんなさい…」

權は反省はしているようで、しょんぼり落ち込んでいた。

慈は少し言い過ぎたかと思い、すぐに權を許した。

「…いいのよ。先に許したのは、先生だから…」

（ああ、改めて考えたら、なんて事を…）

後悔先に立たず。

冷静になって思い返せば、とんでもない事をしてしまったものだ。

慈は、お腹の辺りを押し込んで中に吐き出された精子を流し出す。

運が悪ければ、あるいは良ければ、もう手遅れかもしれないが。

どろり。

5回も直接中に射精されてしまっている。

全てを掻き出すには、少々時間がかかりそうだ。

「…出しちゃうんですか?」

「当たり前ですつ!」

これから上に戻るというのに、このままでいろと言うのか。

もしあの子達の前で垂れ出てきてしまったら、言い訳も思いつかない。

そもそも、そんな状態で彼女たちに会う度胸はない。

慈はここで出来るだけ吐き出しておこうと考えていた。

「佐倉先生。」

「なあに?」

慈が顔を上げた瞬間、何かが唇に触れた。

それが權の唇だと理解するまでに、1秒と必要しなかった。

「…な、な、なな、な…つ!」

「結婚の話、本気ですから。考えておいてくださいね。佐倉先生。」

慈は再び顔を赤く染め上げる。

この子は何度自分を照れさせれば気が済むのだろうか。

權の方も恥ずかしくなったのか、上に行くための物資を集める、と言い残してそのま

ま別室へと駆けて行った。

まったく、恥ずかしいのは自分の方だと言うのに…

慈は、頬を染めたまま、その様子を問題児を見るような目で見つめていた。

(…どうしよう、この状況…)

とりあえず、この事は彼女たちには悟られないようにしなければ…

慈は改めて頭を抱えた。

櫛はすっかりと忘れてしまっていた。

慈が、半分感染してしまっている状況だという事を。

血清には、試作品と書かれていた事を。

慈は、そもそも考えてすらいなかった。

自分が櫛と粘液接触を行う事で生じるリスクを。

自分が「彼ら」の仲間になってしまっていると言う事を。

2人は知らなかった。

試作品の血清は、対象者の体内を全て正常に戻すことは出来ない。

そして、この感染症は感染するのに必ずしも「噛まれる」という行為は必要ない。

噛まれて出来た傷跡から細菌が体内に侵入する事で発症する。

細菌が、体に侵入さえしてしまえば発症するのだ。

うえでは

第18話

櫛は物資の中にあつた大きな巾着袋に荷物を入れていた。元々、15人が1ヶ月保つ程度の物資が設備されていた。そんな袋程度では全ての物資は入りきらない。

「…これも、持っていていきましょう。」

櫛は、追つてきた慈に手に持った箱を見せる。

「それは？」

「血清です。先生に使つたものと同じものです。」

「それって…」

「3つありました。1つは使つたので、残りは2つです。」

いっになく真剣な顔で、櫛は続ける。

「先生の体が完全に治つたとは限りません。もしもの時のため、持つて上がりましょ

う。」

「…それは…」

「もし、そうなつたら…私は見捨てて、生徒たちのために使つてあげて。」

自分が薬によつて完治しないのなら、何度薬を使つても同じ結果になるだろう。

だとしたら、自分以外の人間に使つて欲しかった。

それは本心からだったが、同時に「彼ら」になつてしまうのも怖い。

「…もし、その…学園生活部？の人たちが感染してしまつていて、間に合いそうなら、使いましょう。」

權の返答に安心する。

私は生徒たちが守れるなら、それで…

「でも、佐倉先生を見捨てるつもりはありませんから。」

「…うん。ありがとう。」

權に否定された事で、少し救われた気がした。

そう、言つて欲しかったのだろうか。

…だとしたら、私は、とてもズルい人間だ。

「？」

慈は頭を振つて話題を逸らそうと視線を彷徨わせる。

そして櫛の隣に積まれている物資の中で、見慣れないものを発見した。

小さな箱型で、正面には大きく0・02と書かれていて…

「えっ…これって…」

まさか、と思ひ、慈はその小さな箱に手を伸ばした。

「コンドームです。」

「ええっ!?!」

慈は何事も無く応える櫛に驚いた。

えっ、コンドームって、えっ!?

「ど、どこでこんな物…」

「救急物資の中に、薬と紛れて入ってました。」

「へ、へえ…そう、なんだ…」

いくら日用品が常備されているとはいえ、これは流石に…

というか、何故こんな世界でそういう行為をする人間がいるとも思っただろうか。

いや、私が言えたことではないのだが…

「つて!どうしてある事教えてくれなかったの?あるなら…」

付けていたのに。

「…だって、生でしたかったから…」

拗ねたようにツンと口を尖らせる權を、少し可愛いと感じた。

こんな權の、悪戯っぽい所も愛嬌だと思ってしまう。

「でも、赤ちゃんっていうのはね…」

「知ってます！…子供じゃないんですから。」

高校一年生の15歳など、慈にとっては充分子供だったが。

「じゃあ…」

「それでも、僕は佐倉先生に子供を産んでほしいです。結婚…したいです。」

「だ、だから…」

慈はあわあわしながら嗜める。慈はこの手の話には弱かった。

「それじゃあ、行くわよ。声や足音は出来るだけ小さく。わかった？」

「はい。」

「…もし、「彼ら」がいたら、「彼ら」がない事を確認した場所まで戻って、見つからないように隠れること。もし見つかった場合は、すぐに先生に知らせる事。」

慈は注意事項をつらつらと並べるが…

その前に、權にはとても気になることがあった。

「彼ら」の数がとても多かつた場合、すぐに引き返す事。それから…」

「あの…先生。」

「なあに？」

權は、ポヨンと揺れる悩ましい慈のおっぱいを見ながら問いかけた。

「裸で行くんですか？」

「え？…あつ！」

いくら一週間ずっと裸だったとは言え。

手足の拘束を解いて安心してしまったのだろうか。

慈は素でポンコツの娘だ。

慈は物資内の衣服を確認して、ガツクリとうなだれていた。

「な、何でこれしかないの…」

用意されていたのは、女子用の制服と男子用の制服が数着のみだった。

元々着ていた服は血だらけになってしまつて着るに着れない。

本当に、これを着るしかなさそうだ…

「この歳でこの服はちよつと…」

「まだ大丈夫ですよ。先生、まだ若いので！」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど……でもこれは……」

「じゃあ、裸で行きますか？」

「着る！ちゃんと着るからあ！」

慈は、大切な何かを失ってしまうような気がした。

結局、制服へ着替えるしかなかった慈は、自分の姿がどう見えるのか戦々恐々としていた。

胸はぎゅうぎゅう。腰はパツパツ。そもそも、ギリギリとは言え体が収まったのすら奇跡だ。

裸よりは多少マシだが、慈は自分の姿がどうなっているのか確認する勇氣はなかった。

教師が制服って……絶対、コスプレ、だよね……？

「ね、ねえ……本当に大丈夫？ やっぱり、きついでしょ……？」

「大丈夫です。というか、最高です……！」

「あのね……」

慈は馬鹿なことを言う權にお小言を言ってあげたかったが、これ以上考えないほうが

身のためだと思い直した。

服のことは、もう考えないようにしよう。

「あ、それと…これ、どうぞ。」

「？」

權が慈に差し出したのは、何の変哲も無い湿布だった。

慈は、權がそれを自分に渡した事を疑問に思う。

「それ。最初だけでも隠したほうが良いかもしれないと思って。」

權が言っているのは、慈の頬にまで達している感染の証拠。

皮膚が引き攣ったようにしわくちゃになっている部分だった。

「…そうね。ありがとう。」

そこまで頭の回らなかつた慈は、權の好意に素直に感謝した。

確かに、いきなりこんな傷を見てしまったら驚いてしまうだろう。

どうして自分が生きているのか。自分がどうなつてしまったのか。

しっかりと話して、もし受け入れられなかつたらきつぱりと諦めよう。

慈は、もう隠すつもりはなかつた。

「權くん。貼ってくれる？」

「わかりました。」

傷を隠すように貼るのは、1人では難しい。

慈は權に頼み、傷が目立たない程度に綺麗に貼ってもらおう。

首筋から肩にかけて露出している部分は、どうしようもなかったが。

「行きましょう。權くん。」

「…はい！」

私たちは、地下シエルターから脱出する。

第19話

夜目を慣らして、壁から顔を覗かせる。

「彼ら」はあまりいないみたいね……」

一週間も時間を開けたおかげか、幸いなことに「彼ら」の数はそこまで多くはなかった。

1階の廊下に数人：いや数匹？いるのが見えるが、見つからないうちに階段まで走っていけるだけの距離は離れている。

慈はこれなら問題ないと判断を下し、地下へと続く階段から飛び出した。

その後ろから、出来るだけ会話も少なくと決めている櫛も続いた。

カシユン！ガランガラン！

懐中電灯に電源を入れ、それを反対側に向かって投げつける。

大きな音が鳴り、光で「彼ら」を反対側に引きつける。

勿体無いが、懐中電灯ですら十何本と常備されていた。

多少の無駄遣いもできる量だ。

「…上を確認してくるから、少し待ってて。」

「はい」

階段に隠れて、小声でヒソヒソ作戦を伝え合う。

まず慈が階段を上がり、クリアリングを行なう。

障害物が多い場所は、影に隠れていないか確かめることが重要になってくる。

慈は素早く確認を行い、小さな声で下で待っている權を呼ぶ。

「けほっ…けほっ！」

「…大丈夫？」

「はい…風邪ですかね？」

あまり音を立てたくなくなかった權と慈はひやりとしたが、「彼ら」が集まって来る様子はない。

慈は廊下を確認し、再び階段を昇り周囲を確認する。

「きゃっ!？」

「彼ら」の一体が、慈の正面に現れた。

確認を怠ったつもりはなかったが、それでも完璧とはいかなかった。

思わず声を出してしまつた自分を恥じ、手に持った「水筒」を構える。

リーチは短い、金属製の上水をたっぷり入れてあるため鈍器として使えなくもない。

あれだけ色々と設備が揃っていたのだが、胡桃の使うシャベルのような良い武器になりそうなものはなかった。

苦肉の策として持つてきたが……

「ふっ！」

「あ、あ、あ、あああ……」

ガツン！

それなりに力を入れて頭に向けてスイングする。

頭が潰れたりちぎれたりすることはなかったが、ふらりとよろめいた。

その間に、慈は不意を突かれて崩していた体勢を立て直す。

腰をしつかり落として、水筒を構える。

「あ、あ、あ、あああ……」

来るなら来い、とばかりに動く屍をじつと見つめる。

その惨たらしい見た目には、不思議と恐怖感はなかった。

「……？」

水筒を構え臨戦体勢の慈に、「彼」は不思議と反応を示さない。

こちらを不思議そうに見つめ、そして背を向けて体を引きずり、歩き出す。

「…なっ…何なの…」

その奇妙な行動に、慈は心の底からゾツとした。

どうして、自分を見て襲ってこないのか。

その理由を考えるのが怖かった。

「佐倉先生…」

「くら…隠れてなさい…」

權は、慈の悲鳴を聞いていてもたってもいられなくなっていた。

普段からふわふわしている、暴力と一番遠い位置にいるあの先生がゾンビ相手に戦えるはずがない。

「あ、あ、あ、ああ」

權が現れた瞬間、「彼」は慈への反応が嘘のように襲いかかる。

慈の近くまで歩いてきた「彼」は、それでも何故か權の方しか見ていなくて…

「つらあ…」

權は手に持つ水筒を振りかぶり、「彼」の頭を再び打ち抜いた。

そして、呆然としている慈の腕を引っ張り、集まってきていた「彼ら」から逃げるよ

うに階段を駆け上がる。

多少音が出てしまっても、ここで嘯まれるよりはマシだと考えた。

多少強引な方法だったが、2人は3階へと辿り着いた。

慈が前もって説明していた通り、「彼ら」は階段が苦手な様子。

ここまで来ると、徘徊している「彼ら」は見える場所にはいなかった。

「どうしたんですか？」

權は、先程から様子のおかしい慈へと問いかける。

心配そうに慈を見やると、青ざめた顔が目に入った。

「やっぱり、怖くなっちゃいましたか……？」

「……うん、大丈夫。」

そんな様子の慈に、權は慰めようと言葉を発した。

が、慈は気丈に振る舞った。

先行すると言いつ出したのは慈だった。

それが大人としての役割だと思つたから。

それなのに、心配をかけてしまった。

「壊れたバリケードはすぐそこよ。」

今は、何も考えないことにした。
少なくとも、生徒の前では。

教師は、生徒の前で弱くあつてはいけないのだ。

「いきましよう。」

だから、私は笑う。

どんなに怖くても、どんなにつらくても。

「バリケード、治ってる…」

慈が感染し、階下に降りた時は倒れていた机で作られたバリケードが、しっかりと立っていた。

それどころか、ワイヤーで補強されてもいた。

「生きてたんだ…」

慈が頭の隅に追いやっていた、生徒たちが全滅してしまったのではないかという危惧はとりあえず無くなった。

自分の行動は無駄ではなかったのだ、と、ボロボロと涙が流れてしまう。

「先生。早く行きましよう。このままだと、バリケードのせいで死んじゃいますよ。」

「…そうね。ごめんなさい。」

慈は涙を拭って前を向く。

もう、泣かない。泣いてはいけない。私が泣く資格なんてない。

この子供達を守りきるまでは、泣いたりなんてしない。

「あ、めぐねえ。」

「…ゆき、さん…？」

バリケード越しに、うとうとしながら廊下に立っている由紀を見つけた。

彼女を見た瞬間、早くも涙がこみ上げそうになった。

本当に泣きたいのは彼女たちだ。

私は、それを全て受け止めよう。

「ゆきさん。あのね…」

「今日も見回り？いつもありがとうね。めぐねえ。」

「…え？」

慈は、一週間ぶりに由紀と再会した。

由紀は、三時間ぶりに慈と再会した。

第20話

「私、丈槍由紀！3年C組！学園生活部に入ってるよ！よろしくね〜」

「オレは宮本權です。1のBです。よろしくお願いします。丈槍先輩。」

「せ、せんばい……！むふふつ、權くんはこーはい君かあ……！」

「あ、まあ……（權くん、つて……）」

目がしいたけになつたぐいぐい来る由紀に少し及び腰だが、仲良くできている気がした。

慈は、その様子を微笑ましものを見るような目で見ていた。

「私の事はゆきでいいよ。ゆき先輩って呼ばれたかつたんだあ。」

「わかりました、由紀先輩。……これでいいですか？」

「おお〜！バツチリだよっ！」

この状況でこんなに冷静になっている由紀はおかしい。

また、どこか心が壊れてしまったのだろうか。

(…でも、ゆきさんが元気そうではよかった…)

こんな事は思っではいけない。

なのに、目を輝かせている由紀に、慈は救われるような気がした。

「權くん、部活は？」

「帰宅部です。エースで4番です。」

「えーす…？部活に入っていないなら、学園生活部に入らない??」

「は、はい、オレは入っても良いですよ…」

ぐいっと顔を寄せる由紀に、權は半身引いた。

由紀の異性に対する接し方に、權は距離が近すぎて困ってしまった。

(由紀先輩がこんなにアグレッシブなんて聞いてない…)

權は説明不足な慈を心の中で責めた。

そんな權の内心は、ニコニコ顔の慈には少しも届いていなかった。

「トイレに行きたくて起きた」という由紀に、慈と權は他の部員達のもとへと案内してもらった。

「彼ら」が攻め込んで来ことを危惧して、今は頑丈な扉が付いている放送室で寝ているという。

そして、布団の中でうなされていた2人を起こしたところ、初めは夢かと混濁していた意識も、時間が経つにつれはつきりとしてきた。

後ろでそれを眺めていた由紀や權に気付きもしないまま、何分と泣き続けていた。

「うああああ！わああああ！めぐねえ！めぐねえええ！」

「めぐねえ…ぐすつ…無事で良かったです。本当に…」

慈は、何の躊躇もなく学園生活部の部員達に歓迎されていた。

それも、生きている理由もそこに泣きついてきたのだ。

どちらも普段の様子からは泣いている姿を想像できない子達だったため、慈は驚いた。

胡桃は「彼ら」の仲間となつてしまった先輩を弔つた時に一回だけ。

悠里に至つては、こんな事になつてしまつても未だ涙は見たことがなかった。

「もう…佐倉先生でしょ？」

慈が優しく諭しながら2人を撫で付けると、2人はそれまでよりも大きく泣き始める。

そしてそれほど心配をかけてしまった事に罪悪感を感じた。

(これからは絶対に泣かせない。泣かせてたまるものか。)

慈は、強い決意を自らの胸の中で誓った。

「…それにしても、どうして…」

瞳に涙を浮かべながら、悠里は慈へと問いかける。

それは当然疑問であり、むしろ何故今まで聞かなかつたのかという問いだった。
「それは…その、權くんが…」

慈が視線を向けた事により、權に全員の視線が注がれる。

2人は、ここに部外者がいたことに驚愕した。

私達以外に生き残つた人間がいた、という事実よりも、だ。

それほどまでに、2人は周りが見えていなかったのだ。

「あ…どうも…」

急に注目を集められた權は、緊張しておかしなことを口走る。

いや、初めて会つた相手にとる態度としてはあながち間違ではないのだが…

「この学校の地下にいた私を助けてくれたの。薬を使つてね…」

「地下…?」

「薬…?」

2人は、初めて聞く情報に不思議そうな顔をする。

慈にはあのマニュアルのことをもう隠すつもりなどない。

初めは罪悪感に加え、知らぬが仏だと思い黙っていたが…

慈は、しっかりと伝えていなかった事を後悔していた。

「ねえ、何のお話？」

意識の外から話しかけられた事によりびくりと震える。

2人はほぼ同時に、抱きついていて慈から離れた。

すつかりと由紀の事を忘れてしまっていたのだ。

「ゆきちゃん！起きてたの？」

「うん。おトイレ行きたくて…」

「…その事については、また明日話しましょう。今は、皆眠いだろうから…」

幼児退行してしまった由紀に、この事を説明するのはまだ早い。

そう判断し、言いかけた慈を胡桃が慈へ抱きつく事で止めた。

「…まだ、寝たくない。今寝たら、夢が覚めちやいそうだから…」

（恵飛須沢さんはあまり甘えるようなタイプではないと思っていたけど…それは勘違いか。）

「…そうね。」

一度寝てから、と考えた慈だが、考えを改める。

2人は夢の中でうなされ、悪夢を見ていたようだった。

今は、そんな場所に戻るよりも再会を喜んでいたいだろう。

「くるみちゃんずるい！私も！」

黙って見ていた由紀は、我慢できなくなつたとばかりに慈へと抱きつく。

慈は、自らの行動を思い出し恥ずかしがっていた悠里を再び呼び寄せる。

「けほっ！けほっ！……すみません……けほっ！」

空気を読んで空気に徹していた權は、喉の調子の悪さに我慢できず、咳をこぼす。

「あつ……あの、めぐねえを助けてくれた人ですよね？」

「ええ、まあ……成り行きで……」

今まさに、慈へと抱きつこうとしていた悠里は、權の存在に動きを止めた。

そして、名残惜しそうなながらも慈へと甘えるのは諦めた様子だ。

「私は、巡ヶ丘高校3年、若狭悠里よ。」

「あ、どうも……オレは宮本權です。同じく巡ヶ丘の生徒で、1年です。」

權達が話していたその間に、恥ずかしそうに胡桃は慈の体から離れた。

そして、何事もなかったかのように、だが少し頬を染めながら自己紹介を始めた。

さっきのことはなかった事にしようだ。

「私は恵飛須沢胡桃。3年だ。どうやってかはわからないけど、めぐねえを助けてくれたんだよね？ありがとう。」

「私からも。ありがとう…」

「でねでね！かいくんは入部希望なんだって！」

初めましての相手にも下の名前を呼ぶ、コミュニケーション能力のお化けか。

幼児退行した事を知らない權は、失礼にもそんな事を考えていた。

「はい。出来れば、なんですけど…」

權は、この場所にいた生徒3人を先輩だと知り、敬語になつて話し始める。

まさか由紀が由紀先輩だったとは、と失礼なことを考えていた。

「もちろん！部長として、あなたを歓迎するわ。」

悠里は、一切の躊躇いなく權を学園生活部へと迎え入れた。

知らない人だからとか、男だからとか。

そういう感情を抜きにして、純粹に人助けをしたかった。

それに、權はどうやら慈を助けてくれたらしい。

次は、自分たちが權に報いたかった。

「ところで、由紀ちゃんは宮本くんと知り合いなの？」

「ううん？さつき廊下で初めて会ったんだよ。」

（廊下…ということは、由紀ちゃんがここまで連れてきてくれたのかしら）

由紀が連れてきて、その間に自己紹介は済ませてあるのだろう、と納得した。

その考察は、一切の間違えなく当たっていた。

「あの……一つ聞いてもいいですか？」

「何かしら？」

悠里は、部活の詳細か、でなければ自分達の事か何かを聞かれるものだと思った。

もしかしたら、由紀の精神の異常を気づかれてしまったのか。

由紀は、慈がいなくなつてから悠里からして見てもおかしくなつてしまったように見えただけだ。

が、しかし、權の問いは全員が予想していたものの遥か斜め上をいつていた。

「地下から上がってくる時に思ったんですけど、何で防火扉を閉めてないんですか？」

「……ぼ、ぼうかとびら……？」

（……オイ！）

変異

佐倉慈の独白

私はあの日から、段々と眠れなくなってしまうた。

最初の頃は、寝つきが悪い程度だった。

床に直接寝ているのが辛いのだと、そう思っていた。

おかしく思い始めたのはいつからだっただろうか。

どうしても眠れないのだ。眠気もない。

「…よく寝てるわね。」

私は、すうすうと寝息を立てる彼女たちの頭を撫でる。

先程まで泣いていた事が不思議なくらいに落ち着いている。

ほつと微笑みが溢れる。私は、またこの子達を守る事ができるんだ。

「…」

守ると言えば、權くんのことだ。

彼は女子と同じ部屋だと落ち着かないと言って隣の部屋で寝ているはずだ。

私にとっては彼も庇護対象。

バリケードが復活しているとは言え、少し不安だ。

壊れた過去があるため、盲信はできない。

あとで、すっかり様子を見に行かなければならない。

：子供とはいえ、彼もやつぱり、男の子だ。

今日はびつくりしたな。まさか、あんな事：

私でなかったらどうなっていたと思っっているのだろうか。

私だから良かったものの。私だから良かったんだよ？

：やつぱり、これからも權くんは私とえっちしたいんだろうか？

もしかしたら、この子達の誰かと恋したり：はあ、若いなあ。

私の時と同じようなことになる前に、すっかり言っておかないとダメかな：

それとも、適度に気持ち良くしてあげる方が喜んでくれる？

男の人は、毎日でもえっちなことをしたいって言うし：

：ううん。違うな。

少し麻痺してきているような気がする。

私は教師。生徒を守るべき立場。

「むにやむにや…めぐねえ…」

「……はいはい。なんですか？」

寝言で私の事を呼ぶ由紀さん。

彼女の顔はとても幸せそうだ。

…それが良い事なのか、悪い事なのか。

私には判断がつかないけれど…

權くんにも、幼児退行しているような節が見受けられる。

由紀さんとのコミュニケーションが、良い方向に転がればいいけど…

私は、ねむりこける由紀さんの頭を撫でる。

ゆつくりとした動作で、優しく。

こんな手で、生徒たちに触れてもいいのだろうか。

汚れた、なんて言えない。

だって、そう言うとな權くんが汚いものみたいだから。

悪いのは、生徒と関係を持ってしまった私。

「…はふう。少し落ち着こう。」

また、自分を責めてしまった。

そりゃ、悪いのは私だけど、こんな事を考えているといつか押しつぶされてしまう。

私は暫く様子を見た後、気持ち良さそうに眠り続ける彼女たちの元を離れる。窓から射す月光で、暗いはずの廊下が良く見える。

この階で生活していた頃はなかった血の跡や壊れた箇所が目に入る。少し見つめてから、すぐ近くにある隣の教室へ。

起こしてしまうとまずいと思い、ゆつくりと横開きの扉を開ける。

…そして、喘ぐ權くんの姿を見た。

「あ、ああ…あ、ぐう…」

「權…くん？」

その声は、まるで「彼ら」のようなもの。

喉奥から絞り出すように空気を吐き出している。

感・染

その言葉が、すぐに私の頭に浮かんだ。

「權くん！權くん！大丈夫！先生の声、わかる！」

私は必死に問いかける。

が、彼から帰ってくるのは全てうめき声、喘ぎ声、喚き声。

どうやら意識はないらしい。

私は、跳ねるように地下から持ってきた物資の袋を漁る。

彼が持ってきた物資は、当たり前だがこの部屋にありすぐに見つかった。

中から取り出したのは、私に使ったはずの血清。

「う……がああ……っ！うあっ！」

「……はあ……はあ……大丈夫。あなたは死んだりしないわ。」

激しく打ち付ける鼓動。勝手に荒くなる呼吸。

一刻一秒を争うと、私は付属していた説明書をさつと読み流して治療に入る。

何も難しいことはない。これを、腕の血管に打ち込むだけ。

「……はあ……はあ……いま、助けてあげるからね……！」

緊張からか、手がフルフルと震える。

針を腕に押し付け、震えないようしっかりと固定する。

ぷす……ちゆうう……

これで大丈夫なはずだ。

私もこれで大丈夫だった。

大丈夫だ。大丈夫だ。絶対に大丈夫だ。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

大丈夫……な、はずなのに、安心できない。心がざわざわする。

櫛くんも、こんな気持ちだったんだろうか…

頭の中に響くうるさい鼓動も、止まらない腕の震えも。

治らない荒い呼吸も、滲む視界も、引き裂かれそうに痛む心も。

全部、全部どうでもいい。何も気にならなかった。

「ぜったい、死なせない!!ぜったい!ぜったい!!」

私は、強く、強く櫛くんの手を握った。

もし、この手が冷たくなったとしても。

絶対に離さない。絶対に見捨てない。

「どうして…なんでこんな…」

いつの間にか流れていた涙が、床にシミを作った。

櫛くんは、「彼ら」に噛まれてしまったのだろうか。

だとしたら、上に行こうなんて言い出した私のせいだ。

私の…いや。噛まれているはずがない。

櫛くんはずっと私のそばに居たし、離れたのは数秒。

その間に噛まれた?…いや、あり得ない。

噛まれる前に、「彼ら」が声を上げた瞬間に私が気づく。

噛まれてない…だとしたら…

まさか…私の…せい…？

私が、權くんに感染させた…？

思い当たるのは、先程の行為。

2人で交わった、その記憶。

「まさか…」

私が、殺した…？

宮本權の独白

朝日に照らされ、ゆっくりと意識が浮上した。

ぼんやりとした視界の中、オレは朝を実感した。

そういえば、オレはシエルターから脱出したんだっけか…

こんなに眩しいと感じるのは久しぶりだな…

「あ…体、だる…」

布団の中でもぞもぞと動くが、なんだか身体中の気力が全て吸い取られたように怠い。

まるで、風邪の時のような感覚だ。

「！」

もぞもぞ運動していると、パツチリした目と目が合う。

世界一美しい女性が、寝起きのオレを覗き込んでいた。

「えっと、佐倉先生…？」

「! 權くん!」

がばつ!と抱きついてきた。

えっえっ、なにこの状況!?

オレは一向に構わない、というか嬉しきしかないけど…

「体に異常はない?ちゃんと動く?」

「大丈夫です…何ですか…?」

とりあえずここぞとばかりに抱き返してしなやかな肢体を堪能する。

オレ、こんなに美人な人とエツチなことしたんだよな…

無理やり襲ったこと、怒ってないのかな…

また頼んだら、してくれないかな…?

「…覚えてないの?」

「え?何をですか…?…つていうか、どうしたんですか…」

「良かった…本当に、良かった…」

殴られるようなことをした記憶はあっても、抱きつかれる謂れはない。

それに、泣いてもいるようだし…本当に何があっただろう。

泣いている先生を見ると、オレまで悲しくなってしまう。

「佐倉先生…泣かないでください…」

オレは、オレの肩に頭を押し付ける佐倉先生にドキドキしていた。

そして、緊張しながらも撫でやすい位置に置かれて、頭の上に手を置いた。

よし…よし…

佐倉先生の頭を撫でる。その行為だけで、とても幸せだった。

お風呂に入れていないのにサラサラな髪が心地よい。

むんむんと薫る良い匂いの中に、汗の匂いが混ざっている。

オレは昨日の佐倉先生と交わった時、鼻に感じた香りを思い出した。

朝だということもあり、すごい、興奮する…

オレは元気になつている股間に勘付かれないよう、腰を引きながら慰めた。

「權くん、お昼までずっと眠ってたんだよ。」

「昼…? ああ、もうそんな時間なんですか…」

「先生、もう心配で心配で…」

体が気怠いのは寝すぎたからかな。

というか、そろそろ離れてくれないと我慢できなくなる…

「僕は大丈夫ですよ。佐倉先生。」

「本当に元気なのね? 良かった…本当に…」

「そんなに心配することですか? ちよつと疲れてただけだと思いますよ。」

「…違うの、權くん。」

「へ？」

オレは、どうやら感染してしまっていたらしい。

昨夜、佐倉先生が薬を使って助けてくれたそうだ：

いや、全然気がつかなかったし、今でも信じられない：

だって、噛まれた記憶も苦しかった記憶も、何も無いのだ。

佐倉先生が気がつかなければ、そのままゾンビになっていたかもしれない。

突然すぎて、恐怖すら感じなかった。

「そうですか…：ありがとうございます。助けてくれて…：」

全て説明し終えた佐倉先生は、オレに頭を預けたまま泣いていた。

こんなに悲しそうに泣いてしまって。オレはどれだけ心配をかけたんだろうか。

女の子を泣かせるなんて、最低だ。

「違う…：違うの…：全部、私が悪いの…：」

「そんな事ないですよ。佐倉先生は、僕の事を助けてくれたじゃないですか。」

助けてくれたはずの自分が悪いと言ひ募る佐倉先生が何を考えているのか疑問に

思っていると、佐倉先生が首を振った。

「權くんは、感染したことに気づいてなかったんだよね？」

「はい。なので、今でも実感はないです。」

「…やっぱり。嘔まれてないって事は、私から感染したに決まってるわ。」

「…！」

…予想していなかった。

佐倉先生も、半分ゾンビの仲間なのだ。

オレは甘かったんだ。

「ごめんなさい…謝って許されることではないけど…本当にごめんなさい…」

「佐倉先生は、何も悪くないですよ。」

「そんなわけない！」

佐倉先生が、ふさわしくない大きな声をあげた。

そんな先生に、オレは素直に驚いた。

「私、殺しかけたんだよ？殺されかかったんだよ？私が悪くないわけない！」

「そんな事ないですよ。」

「ある！私がいなければこんな事…」

「違います。それは絶対に違います。」

佐倉先生がいなかったら。

良かったはずがない。そんな事は絶対にない。

「僕は佐倉先生を助けました。佐倉先生は、僕を助けました。…これで、貸し借りは無しです。」

「でも…」

「何か、どうしてもお詫びをしたいのなら…」

オレは少し考える。セックス、は言い過ぎか。

となれば、結婚…は、こんな形で了承してほしくない。

絶対、いつか自分の力で振り向かせてみせる。

と、なるとあとは…

「キス、してください…」

「！」

佐倉先生は目を見開いた。

それほど、オレの言葉が予想外だったのだろう。

「赦してくれるの…?」

「はい。でも、とびつきり大人の、ですよ。」

佐倉先生は何度かパチクリ目を瞬かせ。

そして、涙を流しながら泣き笑う。

「…もう。エッチ…」

づつ…

結婚しましょう…

「ん…」

佐倉先生は、静かに目を閉じる。

それが、誓いのキスを待つ花嫁のようで。

「…んっ…」

「ん…はん…んっ…」

ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ…

啄ばむように唇をはみ、口をモゴモゴさせる。

佐倉先生も勝手がわからないようであたふたしていた。

「ちゅ…んちゅ…ちゅぶっ…」

「はん…はむ…はあ…はちゅ…ちゅ…」

佐倉先生が驚いてしまわないよう、軽いものからゆつくりと、ねっとりしたものに変えていく。

キスなんて初めてしたため勝手がわからないのはオレも同じだ。

唇を舐めたり、口の中に含んだり、少し吸ってみたりしてみる。

ちゅっちゅ、といやらしい音が鳴って、佐倉先生とキスをしているという実感が湧いた。

「ちゅ……はむ……ちゆるるっ……ちゅ……」

「ぶちゅ……か、懼く……ちゅ……はあん……はむ……」

佐倉先生の緊張が解けるまで、唇の外側を責める。

そして、少しずつ口の中に侵入していく。

まずは唇の中に。そして歯茎。

「はむ……ちゆる……んちゅ……」

「ん!?……んんっ!?……ちゆる……はあむ……」

そして、ついには歯の奥へと入る。

中に隠れていた舌を引っ張り出して、舐め回す。

「はあむ……はちゅ……ちゅぶっ……ん……懼く……何……これ……美味……んむ……」

佐倉先生がエロい声を上げる。

……だめだ、我慢できそうにない。

「ちゅずっ!ちゅ……ちゆるるっ!はあむ……はん、はん……」

「はむ……はちゅ……ちゆるるっ!ちゅ……ちゅぶっ!……んはあ……」

オレも、そして驚いたことに佐倉先生も。

互いに舌の動きが激しくなっていく。

舌にちゅうちゅう吸い付いたり、舐め回したり。

口の中で出来る限りの事を全てやり尽くす。

ガタツ！

大きな音が鳴り、オレと佐倉先生はびくりと震えた。

心臓が飛び跳ね、背筋に寒気が走る。

オレと先生は、ギギギ、と錆び付いた人形のように音の方向に目を向けた。

そこには、扉から顔を出した3人の女子生徒が：

それに気が付いた瞬間、佐倉先生はオレから唇を離す。

つう、と出来上がった唾液の橋がエツチだ。

「いっついやつ！わ、わたつ！ちが、ちつ、ちがつ！」

ぼふん！と顔を真っ赤にほてらせ、ブンブン顔を振って否定する。

いや、その反応は嘘だろ佐倉先生…

かくいうオレも、顔が真っ赤になっているのがわかる。

「い、いやいや！ちよつとびつくりしたけど、恋人がいるのは悪い事じゃないって…」

「そうですよ。私たちは別に…ねえ。」

「めぐねえおつとなあ！」

「ち、ちがうのにい…」

こんなはずじゃなかった…

オレは赤くなつた顔が見られないように俯いた。

がくえんせいかつ

第23話

——最近、学校が好きだ。

そう言ううと変だつて言われそうだけど。でも考えて欲しい。

学校つてすごいよ。

物理実験室は変な機械がいっぱい。

音楽室。

綺麗な楽器と怖い肖像画。

放送室。

学校中がステージ。

何でもあつて、まるで1つの国見たい。

こんな変な建物、他にない。

中でも、私が好きなのは…

「おはよう、由紀ちゃん。」

「はーい、めぐねえ！」

「今日はしつかり起きれたみたいね。」

「うんっ！」

佐倉慈。

巡ヶ丘の、元国語教師。

そして今は、唯一の大人にして部の顧問。

「じゃ、部室へ行きましょうか。」

「はーいー！」

由紀は今日もいっぱい元気だ。

「みんな、おはよー！」

扉を開けると同時、勢いよく挨拶をする由紀。

「ん、おはよ。」

無愛想な挨拶をするのは、恵飛須沢胡桃。

ボーイッシュなツインテールガールで、部の戦闘担当。

「おはよう、由紀ちゃん。」

ふんわりと微笑んだのは、若狭悠里。

料理洗濯なんでもござれ。女性らしい家事お化けの頼れる副部長。

「おはようございませす。由紀先輩。」

そして最後に、唯一の男子部員の宮本權。

新入生で新入部員。これからどんな活躍をするのかに要期待だ。

由紀が入ってきた後から慈が教室へ入る。

すでに全員と朝の挨拶を終わらせている慈は席へと着いた。

その間に、由紀はぱたぱたと台所へ立つ悠里の元へと駆けていく。

「りーさん。今日の朝ごはんは？」

「今日はスパゲッティよ。2つ味があるから、好きなの選んでね。」

悠里は、IHコンロで麺を茹でながら、味付けのパックを見せる。

カルボナーラとミートソースの2種類のパックだ。

「私ミートソース！」

「私カルボで。」

「えーと…カルボナーラをお願いします。」

「じゃあ私もカルボナーラで…」

結果、由紀一人がミートソースという状況になる。

「えー。ミートソースは私一人なのお？」

「いいえ。私もミートソースよ。」

「わーい！リーさんお揃いだね！」

「ええ、そうね。」

悠里は、元気な小学生を相手取るように返答する。

そんな様子に、慈と胡桃はいつも通りか、と苦笑い。

「いただきまーす！」

全員の合掌の後、箸を取り食事に手をつけはじめる。

「はふはふはふーもぐもぐー美味しいよ、リーさん！」

「ふふ。ありがとう。…でも、もう少し噛んで食べましょうね、由紀ちゃん。」

「はあい…」

口の中をもごもごさせながら、悠里の言葉通り噛み始める由紀。

こんなせかいで、まともな食事を摂れているのがどれだけ幸せなことか。

しつかりと味わって食べなければならない。

「ごちそうさまでした。」

慈と權。そしてその他の部員3人と2つに分けて、水の溜まった容器へとつける。

權に感染したのは、同じ食器を使ったことよって起きてしまったのではないか。……と、言うことになっていた。

權も慈も、さすがに思い当たる理由を説明するわけにはいかないと思ったからだ。

食器による間接的な感染の可能性も十分あるため、この措置は真つ当なものでもある。

慈は、食べ終わった由紀へと話しかけた。

「それじゃあ由紀ちゃん。今日も授業を始めるわよ。」

「はあい！」

由紀と慈は、2人揃って教室を出ていく。

彼女たちは、これからマンツーマンで授業を行うのだ。

「行つてきまーす！」

「行つてらっしやい。」

残る3人は、由紀たちを見送った。

「じゃ、あたしも朝の見回り行つてくる。」

「あ、僕もいいですか？」

「…そうだな。一緒に行こうか。」

「洗い物任せちゃつてすみません。」

「いいのよ。気をつけてね、2人とも。」

「わーってるよ。」

「ありがとうございます。」

2人は、教室を出た。

しばらく2人で歩いて、そして胡桃が權へと問いかける。

それは、權には無言に耐えきれなかったと言うわけではなく、ずっと聞きたかったことのように思えた。

「なあ…その、本当に大丈夫なのか？」

「？ 何がですか？」

「感染。…いや、見てるぶんには大丈夫そうなんだけどさ。」

「…そうですね。別段、変わったところはないともいます。変化がなさすぎて、本当に感染したのかって思っちゃうぐらいで…」

「そうか…それは、良かったよ…」

胡桃は、複雑そうな顔で呟いた。

權が学園生活部と出会ってから2日。

今の所、權の体に異変は見られていない。

第24話

まずはバリケードの確認だ。

昨日、バリケードを防火扉の向こう側へ移動させた。

そして、内側の防火扉を閉めて二重のバリケードを築いた。

これが有効なら、学校内の安全度はぐっと増すだろう。

「しつかりと閉まっていますね。」

「これを開けるぐらい知能があったら、あたしたちもう生きてないって。」

「ですね…」

だが、ここからでは向こう側の様子が全く見えない。

權たちは、ゆつくりと防火扉を開ける。

「…いますね。」

「そうだな…」

机のバリケードは無事だった。が、その更に向こう側に「彼ら」を見た。

気づかれぬように隠れ、小声で耳打ちし合う。

胡桃は、この防火扉の有用さに舌を巻いた。

最初からこれがあれば、めぐねえも……と考えたところで首を振る。

「後輩はそこで見てて欲しい。」

「……危なくないですか？」

「大丈夫だつて。一匹なら余裕余裕。」

胡桃は、物を転がして「彼ら」の注意を引きつけ、そしてバリケードを飛び越える。

幾度となく飛び越えてきたのだろう、その動作は完全に手馴れたものだった。

櫛はというと、ふわふわ揺れるスカートに根が釘付けになっていた。

「せいっー！」

そんな間に、胡桃は元女子生徒をシャベルで斬り伏せる。

血飛沫が舞い、「彼女」は動きを止めた。

櫛は先程まで見ていた踊るスカートを見ていたことも忘れ、その無駄のない所作に感心していた。

「すごいです。恵飛須沢先輩。」

「へへへ……だろ？」

胡桃は褒められ、得意げに笑う。

胡桃にとっては、「彼ら」の処理こそが最も自分が部に貢献している事だと思っている。

役に立てている、という実感を持っている。そして、そのことが密かな自慢でもあった。

「あー、それと。胡桃でいいぜ。長くて呼びにくいだろ。」

「胡桃？」

「ちよ、ばつ…！先輩を付けるんだよ、先輩を！」

「す、すみません！胡桃先輩…」

「そうそう。」

少し頬を赤らめたまま、胡桃は強引に話題を変える。

「にしても、良く見てたな。気持ち悪く無かったのか？」

「…はい。」

權は、あんなに怖がっていた「彼ら」を見ても、怖くなかった。

それは、精神が成長したのか、それとも…

權が暗い思考へと向かっていると、胡桃が快活そうに笑う。

「向いてるかもな、後輩。」

「そうなんでしょうか…」

…これがもし感染の影響だとしたら。

自分が自分でなくなっているかのような気がして、權は寒気を覚えた。

危険なことに恐怖を覚えなことが一番の恐怖なのだ。

好き好んで火に手を突っ込む馬鹿はいない。

…が、今の權はその火を怖いと思わない。

手を入れても平気かも、と呑気に考えてしまう。

例えるなら、こんな感じだろうか。

「いいいや、無理にとは言わないからさ！無理しなくても、あたしだけでもの足りてるって言うか…」

權が黙りこくっている事に不安になったのか、胡桃があたふたとし始める。

胡桃はろくろを回してあまりにも焦るものだから、そんな様子に、權は思わず吹き出した。

「ここ、ここは安全だったから、次は反対側のバリケード見に行くぞ。」

「はい。胡桃先輩。」

胡桃は恥ずかしそうに顔を逸らして、ずんずん歩いていく。

權はその後を急いで追いかける。

權にとって、頼もしい先輩だった。

胡桃と權は、三箇所あるバリケードの見回りを終えて、元生徒会室の部室へと戻ってきた。

まだ授業が終わっていないのか、由紀と慈はここにはいない。

「つて事で、防火扉はかなり役に立つと思うぜ。」

「そう……これで、もつと安全になったわね。」

確かに、物資を取りに降りるときには音が鳴って大変だが、それよりも普段の安全の方が大切だ。

それに、いざとなれば非常用ハシゴを使えば下に降りることもできる。

「お手柄ね、權くん。」

「はい……ありがとうございます……」

悠里は、どこか慈を思い起こさせるような顔でふんわりと笑うと、權の手を優しく包み込んだ。

突然のことに、權は動揺してカチコチに固まってしまった。

女性とのスキンシップは慈が初めてだった權には、一昨日初めて出会った美人に手を触られるなんて、刺激が強すぎた。

「本当に……いくらお礼を言っても足りないわ。」

「いや、そんな大したことは…」

悠里は、後輩の權を由紀と同じ目線で見ていた。

慈の恩人だからか、この間まで中学生だったその幼い見た目故か。

この短期間で、悠里には權は可愛い弟、と言う像が出来上がってしまったていた。

緊張して謙遜する權の言葉を、悠里は首を振って止める。

「めぐねえを助けてくれた。…それだけで私たちは救われてるわ。」

「そうそう。もつと自信持てよ。」

慈。由紀。胡桃。悠里。

ここは、笑顔でいっばいだった。

權は、思わず感極まってしまう。

「…ありがとうございます。」

慈と出会って、權の暮らしは大きく変化した。

もう、地下で一人寂しく暮らしていたことが夢だったみたいだ。

上に来て。慈へ着いて来て良かった。

權は心からそう思った。

友人が化け物に変わった。

自分を助けてくれた人が自殺した。

…もう、あんなのは御免だ。

第25話

「佐倉先生、ちょっといいですか？」

「なあに？ 權くん。」

「どうぞ。」

權が取り出したのは、綺麗に折りたたまれた紫の布。

慈は見覚えのあるその布を手に取り、広げてみる。

「これ……私の服？」

「はい。洗っても取れなかった血は、毎日手洗いで少しずつ落としました。」

「すごい！ 綺麗になってる……！」

慈が、てつきり地下へと置いてきていたと思っていた服。

肩口にべったりと付着していた血は、綺麗さっぱり消えていた。

少し袖がよれてしまっただけはいるが……

それも言われなければ気づかない程度だ。

「これはお礼なんです。……佐倉先生。いつもありがとうございます。」

「權くん……ありがとう。」

慈へ気を使つてか何かを言われるような事はないが、巡ヶ丘の制服を着てから、チラと見られている気がするのだ。

現役的女子高生である彼女たちにとっては正装だが、慈にしてみるとただのコスプレでしかない。

見る人が見れば大興奮もののその衣服。慈は、裸の時と同様に今もなお毎日辱めを受けながら生活していた。

「ありがとう……本当に、ありがとう……」

慈は真摯にそう思った。

由紀を寝かしつけた慈は、未だマニュアルと睨み合う部員達を見つけた。

省エネと外へ光が漏れにくいようにと、蛍光灯ではなく小さなライトが付いていた。そのこともあつて、雰囲気は暗いように見える。

遅くまで起きている事もあるが、それ以上に暗い話をしているのかと心配になる。

「なにしてるの？」

「……佐倉先生。」

学園生活の部員達は慈も話に加える。

胡桃は特に進んでいない話し合いの内容を掻い摘んで聞かせた。

「隅から隅まで読んでみたけど……これじゃ、手がかりが少なすぎるな……」

「手がかりって言うのと？」

「なんつーか、組織？薬とか、施設とか準備してたやつらのさ。」

「そうねえ。」

もし權や慈が投与した薬がたくさんあれば、この中の誰が感染したとしても症状を抑えることが出来る。

更に、このウイルス？や薬を作成した組織が残っていればこの薬を複製、あるいは作成する事だつて出来るはずだ。

本来三本あった血清も、權と慈が使った事により残り是一本。大切に使っていくたい。

と言つても、生徒達が感染するような事には慈が命を張つてもさせないが。そしてそんな事は權が命を張つてもさせない。

「学校の親会社ってどこでしたっけ？」

「えーと、確か……」

「ランダル・コーポレーション。」

あせあせと思いき出そうとする慈。

しかし、それを權が止めた。

セリフを取られた慈はしょんぼり顔だ。

「巡ヶ丘を取り仕切る大手の製薬会社です。」

「この市の学校や病院。シヨツピングモールなんかも大体がこの会社の傘下ね。」

「あ、聞いたことあるな。悪そうじゃん。」

「確かに…いかにも黒幕、つて感じしますね。」

？マークを浮かべる慈や悠里と違い、權は胡桃の話へと乗った。

それを目敏く見つけた胡桃は切り返す。

「後輩。さてはなかなかのゲーマーだな？」

「ははは…」

本家通りなら仲間内に黒幕がいてもおかしくはないのだが。…まさかね。

「そもそも、学校の施設内に血清とかある時点でゲームっぽいと言うかなんというか。」

「確かに。そんなゲーム的なご都合主義が通るなら校内にポジションでも植ええたい欲

しかったけどな。」

続くゲーム談義に、これは終わらないなと思ひ話を逸らそうとマニュアルをペラペラ

と捲り、とあるページを開く。

——ランダル・コーポレーション本社。巡ヶ丘学院高校に、聖イシドロス大学。

開くのは、巻末の、連絡先一覧。

「マニユアルの最後に、連絡先が書いてありますよ。」

「ランダル・コーポレーションに、聖イシドロス大学、かあ…」

「大学もあるんですね。」

「大学…ここみたいなのに、誰かが生活してるかも？」

「その可能性はあるわね。」

「それに、もしかしたらここと同じように地下があつて…」

「薬が置いてあるかもしれない、か…」

悠里たちは、揃って頭を悩ませる。

もしもの時のため、薬は欲しい。が…

やはりリスクが大きすぎる。

学内が彼らで溢れているだけならまだ良い。

少しずつ引き寄せたり間引いたりして時間をかけて安全にしていけばいい。

だが、もし生きている人が生存していたとして、そう簡単に薬を手に入れられるかが

問題だ。

誰だつて感染を抑えられる薬があるのなら持つておきたいと思うだろう。

一番怖いのは物を考えられる人間の方だ。

「進学か、就職か…」

「え…?」

「あ、いや。この2つの選択肢って、まさにそんな感じだ…」

「確かに。まさにそんな感じだな。」

将来的に、このどちらか、あるいは両方に行くのは確定だ。

どこにどんな情報があるのか。そんな事実に行つて見なければわからない。

權は冗談めかして話を進める。

「オレは、なんとなく進学するのかなって思つてました。…胡桃先輩は?」

「あたしは就職がいいな。」

「意外です。胡桃先輩は、進学かと…」

——私、先輩と同じ大学に行きますから——

「…いや。やめたんだ。」

「へえ…どんな仕事を目指してるんですか?」

「永久就職して、お嫁さん…になったり、とか…」

それ、就職でいいのか…

權がツツコミを入れる前に、慈が大きく反応を見せた。

「だっ!?!だだっだっ!誰のツ!?!」

ガタン！と立ち上がった慈は、嘯んだりもったりしながら胡桃に詰め寄る。

その様は見ているこちらが恥ずかしくなるほどの慌て振りだった。

急に雰囲気の変わった慈に、他のメンバーは驚く。そして、誰よりも早く慈の勘違いに気が付いた胡桃は慌てて訂正する。

「ち、違う違う！…別にめぐねえの彼氏を取ったりしねえって…」

胡桃は慌てて胸の前で手を振り、そんな意図がないことを告げる。

今の所、この世界で生きていることが確認できている男はここにいる宮本権ただ一人。

慈が慌ててしまっているのはそのせいだろうか。

「かつ！彼氏じゃありません！それにめぐねえでもありません!!」

「ごめんごめん。佐倉先生。」

胡桃が悪気なく謝る。

そんな中、当の本人である権は気恥ずかしく縮こまっていた。

内心嬉しさが勝っていて、勝手に上がる口角を抑えるのに必死だったが。

それぞれ☆

第26話

何時からだろう。あたしが、こんな気持ちを知ったのは。

多分、初めて見た時から。一目惚れ；だったんだと思う。

別の学年の男子生徒。

部活紹介の時、やたら輝いて見えた先輩。

走るのは好きだ。

でも、部活に入ったのはきつと、そんな理由じゃない。

マネージャーって柄じゃなかった。

あたしがもっと可愛いければ、先輩の隣でお世話できてたかもしれない。

；いや。少しだけ考えたけど、やっぱりあたしには向いてない。

1年、2年と過ぎた頃。

あたしの気持ちは少しずつ膨らんでいた。

何気ない仕草や優しきなんかにときめいた。

告白とか、恋人とか。そんな変化は求めなかった。

そりゃああたしだつて考えたけど、この関係が崩れるのが怖かった。

時間なんか過ぎなければいいのに。

このまま、ずっと幸せが続いたら。

そして友達以上の進展がないまま、先輩は卒業した。

花弁舞い散る桜の木下で。

あたしが呼び出した先輩が待っている。

この時は、何を、言うんだっけ…思い出せない。

確か…

「私、先輩と同じ大学に行きますから。」

その時は…

「えっ…っ！」

気付いた時、目の前にいたのは、先輩の形をした化け物。

皮膚は爛れ、至る所から血を流している。

「ち、違う…先輩は…」

「あああ、あ、あ、…」

「う、うわああ……ああああ……」

先輩だったものは、あたしにじりじりとにじり寄ってくる。

この先は知っている。変えようの無い過去。罪。

手元にあつたシヤベルで……

「……さ……！」

あたしは……

「……みさん……！」

先輩に……

「く……み……ん……！」

手を……

「胡桃さんっ……！」

「!?」

次に胡桃が目にしたのは、部室の天井だった。

そうか、これは夢。夢か……

今でも、あの時のことは夢に見る。

(夜にあんなこと思い出したからかな。あたしはまだ、吹っ切れていないのか……)

「胡桃ちゃん、大丈夫？」

「惠飛須沢さん。随分うなされてたみたいだけど…」

見知った天井に、ひよっこりと2人の頭が突き出てくる。

由紀と慈の両名が、枕元で胡桃の顔を覗き込んだのだ。

「ああ…ごめんごめん、心配させたみたいで。あたしは平気だから…」

「平気じゃ無いよ！すーっごく苦しそうだったもん！」

こんなに真剣な由紀を見たのも久しぶりだ。

由紀にも心配をかけてしまったようだ。

(だからこそ、心配ないってとこ見せてやんないな。)

胡桃は腕をついて上半身を起き上がらせる。

「このくらい、少し起きてればすぐ忘れるっての。」

「胡桃さん。焦らなくても大丈夫よ。」

慈の手が、胡桃の手を包み込む。

どうしてか、冷たい指先がどんどん温まってくるかのような感覚を覚えた。

慈の体温は、感染の影響でとても冷たいはずなのに。

「でも、こんな気分で寝られる気しねーよ。汗も流したいし…」

今はこの嫌な汗が不快だった。それに、匂いもついたら困るし…

「…それもそうね。でも、あまり夜更かしはしないこと。」

「はいはい。」

胡桃はいつも通り威厳の無い慈のお説教を苦笑混じりに聞き流す。

その態度の所為だと気がついていないのか、むっと不満気にむくれる慈。

「…わかったよ。めぐねえ。」

「もう、めぐねえじゃなくて…」

「佐倉先生。だろ？」

手持ち無沙汰にしていた由紀が慈へ、ガバツと抱きついてきた。

「胡桃ちゃんずるいよ。めぐねえ、私も」

由紀と慈がいつも通りにわたわたとし始める。

そんな微笑ましい光景を横目に、胡桃は立ち上がる。

「ちよつと、シャワー浴びてくる。流星に、このままだと気持ち悪いし。」

「そうね。」

「…ん？」

胡桃は動けない。背後から慈が抱きついてきたのだ。

突然の事に胡桃は驚き、そして自分が寝汗が酷いことを思い出す。

この距離まで来られたら、臭くない…だろうか。

「なあ…今あたし、汗かいてるから…」

「今の恵飛須沢さん、酷い顔をしているわ。」
「…」

胡桃はぐつと力強く抱きしめられる。

やんわりと押し退けようとする胡桃だが、慈の腕はびくともしなかつた。

シャベルを振り回せるだけの腕力を持つ胡桃が本気になったとして、慈の抱擁は抜け出せない。

「めぐねえ。これじゃどこにも行けねーよ。」

「一緒に入る?」

「いやいや、いいって…」

由紀の素っ頓狂な提案に苦笑う。

「暖かいお茶淹れておくから。シャワー終わったら、少しお話ししましょうね。」

「…わーったわーった。」

慈は抱擁を解き、激励するかのように肩に手を乗せた。

漸く離してくれたかという想いと、もう少しあのままで痛かったという想いが交錯する。

…でも、そんな恥ずかしいこと言えねーな。少なくとも、あたしのキャラじゃないのは確かだ。

教室から出ていく恵飛須沢さんの背中を見送る。

(私は、先生できているのだろうか。)

——未だ、正確な現状が把握できず。布団が全員分なかつた頃。

寝袋の中で、孤独と恐怖に押し潰されそうになる。

不安で眠れなくなる。唐突に過呼吸が始まる。

もう、あんなのは嫌だ。それをこの娘達を感じるのもつと嫌だ。

私ができるのは、少しでも彼女達の孤独を、恐怖を、不安を、紛らわせてあげることくらいだ。

「めぐねえ、どうしたの?」

由紀が不思議そうに慈を見ている。

慈は拳を強く握りすぎてしまっていた。

「なんでもないのよ。さ、由紀ちゃんは寝ましようね。」

「え〜」

ぷつくりと頬を膨らませて抗議する由紀に、張り詰めた想いは霧散する。

焦りの代わりに、口の端から笑いが漏れた。

「授業で居眠りしちゃったら恥ずかしいでしょ? 恵飛須沢さんは、私に任せて。」

「はい。」

もぞもぞと布団の中へ潜り込む由紀。

そしてひよっこり頭を出して、何かを期待した顔を向けてくる。

「ね！眠るまで一緒にいてくれる？」

「…わかったわ。」

お茶は淹れられそうにはないな、と胡桃に心の中で謝った。

ちなみに悠里はこの騒がしい中、未だ深い眠りへと入っていた。

シャワーに打たれながら、拳を壁に叩きつける。

シャワー室には水音だけが響き渡る。

「あれは違う。もう、違うんだ。」

深く、自分に言い聞かせる。

それは、呪詛にも似た自己暗示。

「あたしはもう…大丈夫。大丈夫なんだよ。」

大丈夫じゃなきや、ダメなんだよ…

第27話

「おっはよー!」

じゃーん、なんて効果音の付きそうなテンションで部室の扉を開け放つ由紀。
決めポーズまで完璧だ。

「お。騒がしい奴が起きてきたな。」

「もー、酷いなあ。そんなに言わないでよ〜」

由紀は笑いながら胡桃に向けて手首をカクカク動かす。

そんな仕草が可笑しくて、胡桃は少し笑いを溢す。

「もう大丈夫みたいだね。」

「はは…昨日は悪かったな…」

胡桃は照れたようにはにかんで頬をかく。

由紀なりの励まし方が上手くいったようだ。

「おはよう、由紀ちゃん。昨日って?」

「いやいや!何でもないって!」

聞いた悠里に激しく首を横に振る胡桃。頭取れそう。

結局悠里に関してでは朝までぐっすりと寝入って起きる事はなかった。

「ふっふっふ。これはわたしとくるみちゃんのお秘密！だもんね？」

「あらあら。」

由紀の可愛らしい秘密に内容が気になりながらも悠里は流されてあげるようだ。

恥ずかしさ半分心配をかけたくなさ半分な胡桃はほつと胸を撫で下ろす。

「あれ？今日はお野菜？」

「ええ。これは食べ頃お野菜の採れたてサラダよ。」

「わあいー！」

ふとキッチンに立つ悠里を後ろから覗き見た由紀。

目敏く悠里が作っているサラダを見つけた。

普段はビタミン栄養剤で野菜の栄養を摂取していたが、屋上の菜園の野菜も収穫時期なようだ。

ドレッシングを振りかけ、最後に有り余っているクルトン代わりに乾パンを割って散らす。

シャキシャキの生野菜の中にさつくりとした意外性のある食感が飽きさせない。

普段から食べているモサモサした乾パンも、サラダに入れることでいつもと違った印象を受ける。

「由紀ちゃん、食べられるかしら？」

「食べるよ、どれも美味しいもん！流石は学校のお野菜さんだよねっ！」

「由紀ちゃんは嫌いな野菜もちゃんと食べられるから偉いわね。」

悠里は慈愛の籠った視線で由紀を褒める。

が、当の由紀本人はきよとんとした顔だ。

「？私、お野菜は嫌いじゃないよ？ずっと大好きだよ。」

「えっ？！」

悠里ははたと動きを止めた。

否、苦手だったはずだ。

苦手だからこそ、いつも頑張って食べてもらおうと工夫していたのだから。

「苦手だったわよね？にんじんとピーマンと、白菜と…」

「ううん？」

由紀はあつけらかんと答える。野菜が苦手…じゃない？

じゃあ、野菜が、苦手、だった、の、は——誰？

「っ…」

由紀ちゃん？胡桃？めぐねえ？由紀ちゃん？胡桃？私？めぐねえ？由紀ちゃん胡桃めぐねえ由紀ちゃん私胡桃めぐねえーちゃん由紀ちゃん胡桃私めぐねえ由紀ちゃん胡桃私めぐねえ由紀ちゃん胡桃私めぐねえ由紀ちゃん胡桃私めぐねえ由紀ちゃん胡桃私めぐねえ由紀ちゃん胡桃私めぐねえ

「おいおい、リーさん。由紀もそんなとこまで子供じやないつて。」

「そうそう。私もこんなとこまで子供じゃ…つて！なんか酷くない!？」

「はははは」

キリ…と脳を締め付けるような頭痛を覚えて立ちくらむ。

が、それも一瞬のことで、由紀や胡桃が言い合っている間、2人が異変に気づく前に治っていた。

「そうね。私が…間違えてみたい。」

(私の思い違いだ、きつと。野菜が苦手な人なんて、ここには誰もいないもの。)

「ごめんね。由紀ちゃん。」

「ううん、いいよ。」

由紀はいつもの調子で和ませてくれる。

悠里も、ただの勘違いだと忘れる事にした。忘れてしまった。

「おはようございます。」

「あ！權くん！おつはよー！」

「どうも…」

權は駆け寄って大きな身振りで挨拶をしてきた由紀に半歩引いた。

朝一番から何でこんなに激しいんだ：

「みんな揃ったよって、めぐねえ呼びに行ってくるねー！」

朝。慈は未だ血痕の残る職員室にいる。

あらかじめ食事前に呼んで欲しいと頼まれていたため、由紀は全員が揃ったタイミン

グで職員室まで駆けて行った。

感染の影響か、慈は段々と眠れない体になっていた。

そんな中、慈は夜は見回り朝はお仕事と称して隠し続けている。

それを気づつかれてはいないだろう

「よ。おはよう、後輩。」

「おはようございます。胡桃先輩。」

嵐のように去っていった由紀を見送り、權は当たり前のように慈の隣でもある胡桃の

向かい側に座る。

それを合図に、胡桃は無意識に組んでいた足を正した。

男子がいる事でこういう事にも気を使わないといけなところには不便にはなつたかもしれない。

「おはよう、權くん。随分胡桃と打ち解けたみたいね。」

サラダに加え、味噌汁ご飯缶詰を机に並べる。

そのついでとばかりに悠里は一線を引いている様子だった權が、胡桃と気安く挨拶を交わしたことに突つ込んだ。

由紀と接する態度を見て、グイグイいくと引いてしまふ性格なのはわかっていた。

しかし、こういうタイプはこちらから寄りなれば仲良くはなれない。

その事を踏まえて少しずつ距離を縮めていこうと思つていた悠里は、胡桃のリードに驚いていた。

「いや、その…そんな事は…」

やはり悠里との間にも壁がある。例外は今のところ慈と胡桃の2人だけらしい。

緊張からか汗を飛ばして縮こまる權を見て、悠里は權がどんどん小さくなつていく姿を幻視した。

權の不器用なそんな姿が、悠里の母性本能をくすぐる。

「ほーお？あたしと仲良しは嫌なのか？」

「いやいや！違いますって！」

「あらあら。妬げちゃうわ。」

歳上からの揶揄いに、權は弁明にてんてこ舞いだ。

慌ててろくろを回す權に2人はクスクスと笑う。

良い意味で勝気というか男勝りな胡桃が頼りになるのは悠里自身身をもって知っている。

それに加え、こうして場を和ませる事が上手い。

胡桃は男からも女からも好かれる、クラスの中心にいるようなタイプだ。

權が惹きつけられるのもわかる。

「ま、冗談はさて置き。よく一緒にいるしな。特に見回りとか。」

「それに、趣味も合うみたいだし？」

ニヨニヨと口の端を上げる悠里に口籠る。

マニユアルを見ながら2人で他のメンバーがわからないゲームの会話をしていたのは記憶に新しい。

「楽しそうね。何の話？」

ガララ、と旧生徒会室の扉が開き、慈が入室してきた。

それぞれが慈と挨拶を交わしてから、悠里は先の質問に返答した。

「先生。胡桃と權くんの距離が縮まってるって話です。」

「確かに。短い間に仲良くなってるみたいね。」

慈は僅かばかりの嫉妬心を努めて顔に出さないように笑顔が心かけた。

第28話

「どう？由紀さんたちとは馴染めそう？」

「…はい。皆いい人たちでした。」

その夜。

慈は權へとカウンセリングのようなことをしていた。

シエルターを出ることを嫌がっていた權が、ストレスを感じているかもしれないと危惧しての事だ。

結果的に慈のその心配は、全くの杞憂だったのだが。

「正直、好意的すぎて怖いくらいです。」

「ふふ…それは權くんが素敵な人だからだと思っわ。だから、皆仲良くなりたいの。」

慈は、最早習慣なつてしまっている權の頭を撫でる。權は、慈へと頭を預けた。

眠る前にこうされると、とても落ち着くのだ。

「それにしても、防火扉とは、よく気がついたわね。」

あれからたった一週間で3階にいた「彼ら」を殲滅、そして制圧してしまっていた彼女たちの行動力には驚かされる。

そして、1日でバリケードを防火扉の向こう側へ移動させてしまった事には更に驚いた。

「ゾンビの出てくるゲームとかで…」

ゲーム、か。こんな時には、そういう柔軟な発想の方が大事なかもしれない。

慈は、昨日の夜のことを思い出す。

「ちよつと待て。なんだよ、これ。なんなんだよー」

自分がいなくなってしまうたら、この事を教える事もできなくなる。

一度死の淵を彷徨ったことにより、何も隠さないことを決めた慈。

精神が不安定だと思われる由紀を寝かしつけた後。

緊急避難マニュアルを、由紀を除く部員の皆に見せた。

「あの、胡桃さ…」

「めぐねえは…知ってたのか？」

「その…」

「胡桃。落ち着いて…」

慈はどうしても言葉を詰まらせてしまう。

——知らなかった。

無責任にそう言えたなら、どれだけ幸せだっただろうか。

…だが。

「先生が知ったのは、事件の後…ですよ？ここに書いてありますから…」

權が、開かれたマニユアルを表紙に戻して、開封指示の部分を指差す。

權には、慈がこの指示を破つてまで読んでいるとも思えなかった。

そして、それは他の部員たちも同じだった。

「！…ごめん…大声出して。」

胡桃は、自分が頭に血が上っている事を理解した。

そして、隣の部屋で由紀が寝ていたことを思い出して我に返る。

「めぐねえ。…本当の事、教えてください。」

悠里が、いつにも増して真剣な表情で問う。

慈は、その迫力に飲まれてしまった。

言わなければ。全て大人の…私のせいだ。

この事を知っていれば。ちゃんと見ていれば。

「私、…こんなの…知らな…っ」

こんな事、言えなかった。知られたくなかった。

秘密にしている罪悪感が。痛みが。苦しさが。全てが、溢れ出してしまった。下に、弱さは全て捨ててきた。…そう思っていたはずなのに、涙が止まらない。なんて私は弱いんだろう。

「…めぐねえは、悪くないから。」

「そうだよ。誰も責めてないから。」

「うっ…うう…ごめんね、わたし…ぐすっ…たよりない先生だから…」

「そんなことないですよ。」

「めぐねえは、あたしたちの最高の先生だよ。な？リーさん。」

「そうね。私もそう思うわ。」

それでも、言い出す勇気が出たのは、權くんのおかげだ。

今は、勇気をくれた彼に。受け入れてくれた彼女たちに。感謝をしよう。

「私を許してくれて、ありがとう…」

「先生…」

物思いに耽っていた慈を、權が現実へと呼び戻す。

「なあに？權くん。」

慈は、權の頭を慰め続ける。

由紀や權の頭を撫でることが、慈にとっても幸せな時間だった。

自分が、生徒たちの役に立っている事を実感できた。

「したいです…先生…」

「何を…あつ」

ふと權のズボンを見やると、とある場所がとも膨らんでいるのが見えた。

慈はこの中のものを思い出して、ポツと赤くなる。

「その。由紀さんたちが隣の部屋で寝てるから…ね？」

「でも、我慢できないんです…」

慈は、食事の際のスプーンによる間接的な感染だと説明していたが…

他部員は2人のキスを見たことにより、それも怪しいものだと思っている。

今權とおかしな事をしたら、不信は確信へと変わってしまうだろう。

「駄目よ…聞こえちゃう。」

慈はやんわりと断るが、そこまで強く拒否するつもりはなかった。

權をこうしてしまったのは自分だ。

だから、彼を慰めるのは自分の責任でもある。

…そんな言い訳をしていたが、慈はこんな事でも權の役に立てることが嬉しかった。

慈は、張ったズボンの上から、カリカリと肉棒をなぞる。

刺激を待ち望んでいた肉棒が、ズボンの中でヒクヒクと動いた。

この時点で、慈は權の処理をする事を決めていた。

「とつてもつらそう…どうしても、我慢できない？」

權が頷いたのを確認して、慈はズボンを下ろす。

慈は、パンツの中から取り出したものを見て息を飲んだ。

「…これ…」

「昨日から、こんな状態なんです。多分…」

感染の所為。

權の肉棒は、皮が引き攣り、血管が浮き出していた。

フィクションで見えるような、そそりたつ大きな肉棒。

「多分、感染経路は…」

「私の、せい…」

恩人を、自分の手で殺めてしまうところだった。

慈はもう泣きそうだ。

「そんな事ないですよ。」

權は、慈の頬に貼られた湿布を剥がす。

その下から、權のものと似たものが現れる。

綺麗な慈の肌には似合わない、痛々しい傷跡。

「これで、佐倉先生とお揃いですね。」

權が嬉しそうに笑う。

慈にとつて、1人じゃないということがどれだけのことであるのか。

慈自身も、知らなかった。こんなにも安心するなんて。

「…じゃあ、口で…してあげるから…」

そして、代替案を提案した。

慈にとつても初めてだが、知識としてはある。

口の中で慰めて、気持ちよくしてあげる行為。

これなら、声が出ることもなく、気をつければ音も小さく済む筈だ。

もうだめ♡

第29話

慈は、櫛のズボンから取り出した肉棒を手にとった。

血管が浮き出てヒクヒク動き、見ようによつては怒っているようにも見える。

「はあむ……かぶ……」

慈は、そんなものを迷うことなく口に入れた。

汚いとか、気持ち悪いだとか。

櫛の肉棒には、そんな印象を受けることはなかった。

口の中に咥えこまれると、慈の体温によつて櫛に寒気が走る。

冷たい口の中は、それでもとても気持ち良いものだった。

冷たいのに溶けてしまいそうなほどの快感を感じる。

対して慈は、汗のせいか、はたまた尿なのか。自らの舌に塩っぱさを覚えた。

（これ、美味しい……すごく、美味しい……）

そして、その味をとでも美味しく感じていた。

これまで生きてきた中で一度も食べたことのないような、極上のスイーツのようだ。すぐにでも、全てを飲み込んでむしゃぶりつきたくなる。

食べ物の味を感じられなくなつてから、二度目のご馳走。

一度目は、目を覚ました權とキスをした時。

(気のせいじゃなかつた…私はもう、きつと…)

「彼ら」の仲間になつている。…少なくとも、味覚は。

人間の唾液を、汗を、尿を。まともな人間が高級料理のように美味しいと感じてたまるものか。

「ちゅ…ちゅるる…」

慈は權に、はしたないと思われるのが嫌だつた。

本当はもつと強く吸つたり舐め回したりして、久々に感じる美味しいという味覚を味わいたかつた。

しかし、そんなエッチな人とは思われたくない。權に見捨てられたくない。

「んっ…んっ…ちゅぶ…」

出来るだけ音を出さないようにしようとするも、どうしても小さな音が聞こえてしま

慈はゆつくりにしてみたり、口をすぼめたりと色々試してみる。權は変化する刺激に、心地よさを感じていた。

「先生……気持ち良いです……」

そんな慈がどうしようもなく可愛くて、權は頭に手を伸ばす。そして、ゆつくりと撫で始める。

慈は權の突然の行動にびっくりと震えたが、そのままされるがままになっている。その内心は、とても幸せな気持ちでいっぱいだった。

撫でられるのは、こんなに幸せな事なのか、と思う。

「ちゅっ……ちゅぽっ……ちゅるる……」

自分を慰めるかのような權の手の動きに、慈は思わず奉仕したくなってしまふ。ついつい口に力が入り、少しずつ強くなってしまふ。

吸い込んだり、唇を押し付けたり、舌で頭の部分を触ったり。

知識がないなりに慈は頑張って權に奉仕を続けた。

「先生……」

ニユルニユルと自由自在に動き回る舌に、權は射精寸前。

ヒクヒクと肉棒を痙攣させ、数億の子供を排出する準備に入っていた。

慈は肉棒のその動きを愛らしく思い、限界が近いことを悟った。

「ぶちゅっ！ちゅるっ！ちゅぶぶっ！」

ラストスパートとばかりに、慈は少し激しめに吸い付き、顔まで前後に動かして肉棒を煽る。

ちゅうちゅうと吸い付いたまま強制的に出し入れされる肉棒。

こんな攻撃に、初心者の權が長く耐えられるはずもなく。

びゅー♡びゅびゅびゅ♡びゅるるっ♡

一気に大量の欲望が、慈の口の中に吐き出された。

(すごい…こんな美味しいもの、食べたことない…)

これまで食べていたものが残飯か何かだと思ってしまう。

それほどまでに、食べると幸せになる權の精液。

一滴も零すまいと口をすぼませて全てを口に含んだ。

慈は時間をかけて口の中で味わい、ゆっくりと喉の奥へ流し込む。

とても濃ゆい、プリプリとしたものが喉に絡みつく。

「ん…んはあ…」

權の精子を限界まで味わい尽くし、全てを飲み干した慈。

その顔は、とても幸せそうに、気持ち良さそうに緩んでいた。

「先生…飲んでくれたんですね。」

權の言葉に、慈は我に返った。

そして、何も言われていないのに勝手に全て飲み込んでしまったことを思い出す。

(私はなんてはしたないの…)

教え子の射精を口で手伝ったばかりか、それを自ら喜んで飲み込んでしまうなんて…
これではつきりわかった。わたしは、エッチな女なんだ…)

そしてなにやら自己嫌悪しつつ、そのことに自ら興奮するということでも器用なことをやってみせた。

現に、慈はそんなエッチな自分を意識し始めてから下着が濡れていくのを感じていた。

慈には、自らを貶して興奮するMの才能があるのかもしれない。

「…いやらしい先生って思わない?」

「思いません。嬉しかったです。」

「…ありがとうございます。」

慈は、權が否定したことに少しがっかりした。

…これじゃ、本当に変態みたいじゃないか。

「さあ、これで眠れるわね。」

慈は、自分の下腹部がきゅんと疼いていることを感じていた。

(早く、ここから立ち去らないと…)

またあの、深い口づけをしたくて。濃いものを受け取りたくて。

櫛を襲いたくなってしまう。

だから、今のうちに逃げなければ。

「先生…まだ、おさまってません…」

だが、それは櫛が許さなかった。

櫛のおちんちんはまた復活していた。

慈の心臓がドキドキと高鳴った。

ああ、言っちゃ駄目…それを言ったら、きつと止まらない…

「下…で…」

「なんですか?」

櫛が様子のおかしい慈を不審がって問い返す。

「…じつとしていて。」

慈は、ゆっくりと櫛に覆いかぶさる。

そして、ずつとしたかったキスを交わす。

「ちゅ…ちゅっ…♡」

(…甘い。やっぱり、櫛くんの、いや、人間の体液を飲むと美味しいんだ…)

軽いキスト、舐めるようなキス。それを交互に繰り返す。

慈は、不意打ちでキスをされて真つ赤になっているその様子を見て、心臓が掴まれたような感覚に陥った。

可愛い。胸がキュンキュンした。こんな感覚、初めてだ。

慈は、ガチガチになった肉棒を手で掴み取る。

そして、さわさわと肉棒を手で撫で付ける。

自分の肩と同じ跡の残る、權のおちんちん。

慈は、こんなにも変わってしまった權の肉棒を愛おしいとも思った。

「……あつ……あ……先生……気持ち良いです……」

慈の奉仕に、權が喘ぐ。

もうできない。我慢できない。

權くんが欲しい。中に欲しい。

慈は荷物の中からゴムの入った箱を引っ張り出すと、袋を破いて捨てた。

そして、昔の昔に習った、コンドームの装着方法を思い出す。

「今度は、こつちで、鎮めてあげるね……」

慈は思った。

私は、なんてエッチな女なんだろう。

第30話

「佐倉先生……？」

「はあ、はあ……ちよつと待つてね……」

慈は荒い息を繰り返しながら、櫛の肉棒をさする。

慈自身、自分が妙な気持ちになつてゐる事をわかつていた。

でも、止められない。……いや。止めたくない。

もう、隠し事も嘘も無しと決めたから。

クルクルと、櫛の肉棒へゴムを装着する。

ゴムの中で苦しうにぎゆうぎゆうに張つていた。

とても苦しうだ。慈は、自分が助けてあげようと思える。

くちゅり……

履いていたショーツが、ベタベタに濡れていた。

引き下ろすと、ショーツと慈との間に糸を引く。

慈は、そんな自らの痴態に頬を染める。

(…やっぱり。こんなことして、興奮してるんだ…私。)

エツチなところを、權に見られてしまった。

それは慈に大きな動揺をもたらした。

「先生…良いんですか？」

「ゴム…してるから、大丈夫。」

そして謎の理論で、權に覆い被さった。

權は、慈の匂いにクラクラしてしまう。

少し様子がおかしいとは思ったが、權にとってエツチな彼女は大歓迎。

今は、慈とまたエツチができる事を純粹に喜んでいた。

(私の恩人の權くん。私の好きな權くん。)

対する慈は、もう權しか見ていなかった。

慈の頭は、「權を貪り尽くしたい」という欲望に埋め尽くされていた。

つぶ…

權のおちんちんを、自分のおまんこへとあてがう。

挿入の方向を確かめて、頭を穴に埋め込んで行く。

それだけで、奥からどんと愛液が垂れてきた。

それは止まることを知らず、早く欲しいと涎を垂らしているようだった。

「はあっ……う、ん……」

「あ、あ……あっ……」

ず、ず、ず……

慈の腰が少しずつ沈んでいく。

秘壁が、櫛の怒張の形に押し広げられていく。

櫛が体の中に侵入してくる感覚に、慈は天にも登るような幸福を覚えた。

「う、うう……佐倉先生……っ！」

「いいのよ。私に全部委ねて。」

櫛の口からこぼれた情けない喘ぎ声。

慈はとても興奮した。

この子は、私がリードしてあげなければ。

ずずず……

櫛の肉棒を奥まで差し入れる。

感染した時の影響か、前には届かなかったような位置にまで圧迫感がある。

そして、浮き出た血管のせいかわずかしくゴリゴリとした感触も感じていた。

膣壁で擦れ上がる度、慈は腰の奥から痺れるような甘い快感を覚えていた。

痛かっただけの前回とは明らかに違う、「快感」というものを身を以て感じていた。「奥まで…挿入った？」

「はいりました…」

「じゃあ、動かしてみようか…」

快感を感じていたのは、勿論慈だけではなかった。

權が挿入したのは、ぐちゅぐちゅにほぐれた、慈の肉壺。

中にあるひだひだが權の肉棒を包み込み、汚れをぐちゅぐちゅ刮ぎ落とす。

ずちゅっ！…ちゅずっ！…ぐちゅっ！…ちゅっ！…ばちゅっ！

「あ♡あっ♡はあっ♡ひやあうっ♡」

「はあっ♡ふっ♡ふあっ♡」

前回、処女を散らしたばかりの慈のおまんこを世界一気持ちの良い穴、と思っていたが、何度も突いてほぐれ、多少柔らかくなっている慈のおまんこは次元が違った。

權の一举一動に、膣の壁がぬるぬると絡みついてくるのだ。

それはもう、肉棒を持っていかれそうになるくらいの気持ち良さだ。

「先生…これ、凄い…我慢できません…っ」

「イっ♡いいのよ。…ふっ♡ふあっ♡ゴム、してるから、あっ♡いっばい、出して…？」

これは、とても感じている顔だ。

自分が權を喜ばせていることが喜ばしかった。

慈も、自らの奥でズリズリ動き回る凹凸を、気持ちよく感じていた。集中していないと、すぐにでも全身の力が抜けてしまいそうだった。

「はあむ…ん…ちゅちゅつ…ちゅぷつ…」

權の口へ自らの口を持つていき、塞ぐ。

慈は、唯一味を感じることが出来る權との接吻を気に入っていた。

それも、舌と舌を絡ませ合うような情熱的なものが、だ。

しているだけで幸せになる。しているだけで美味しい。しているだけで気持ち良い。感染させてしまったことは後悔している。だが、それとは別に心の底では嬉しかった。

仲間がいることの安心感。そして、もう感染してしまっているのだから、接触し放題ということ。

慈は、權の口内にある唾液を全て吸い尽くすような勢いで激しくキスを交わした。

ずちゅつ、ずちゅつ、ぐちゅつ

ちゅぷつ！ちゅるる、ちゅつちゅぷ

上の口と、下の口。同時に、權を貪り尽くす。

權は慈の変貌に、気持ちいいやら苦しいやらでいっぱいだった。

「んーっ！んむ…んぐぐ…」

「射精して…いいわよ♡ゴム、してる…からっ♡いっぱい、出しちやいなさい…っ♡」
 ここまでされて、我慢できるほど權は辛抱強くない。

途端、肉棒が少し膨れ、睾丸に溜まっていた白濁液を抽送する。

びゅーっ♡ぶびゅびゅ♡びゆるるるっ♡びゅびゅーっ♡どくっどくっ♡

精を吐き出す度、どくん、どくんと跳ねる肉棒。

慈は、自分のお腹の中でこまめに動くものに気がついて、權の頭を撫で付ける。

「ちゅ…ちゅぶっ…んはあ…おちんちん、気持ち良かった？」

「…はい、良かったです…」

慈は自分でも快感を感じていたが、それ以上に權を気持ち良くさせられたことが嬉しかった。

自分の中で果てたということは、感じてもらえたという事だ。

權や、学園生活部のメンバーたちに幸せを感じてもらうこと。

それが、慈の生き甲斐だった。

ずずず…

慈は、射精の終わった權の肉棒を引き抜いて、ゴムを外す。

ゴムの中には、慈が見たことのないくらいいたつぷりと吐き出されていた。

それを見て、慈はゴクリと喉を鳴らす。

さっきの量だけでもあんなに美味しかったのに、コレを食べたらどれほどか…

「佐倉先生？」

「え？あ、ううん！…何でもないわ。」

慈は、慌てて平静を装う。

何ともないようにゴムを結んで、ゴミ箱へと捨てた。

そして、何気なく視線を向けた先に、まだ立派にそそり勃つ肉棒を見つけた。

「權くん！…それ、まだおさまらないの？」

「…すみません。一回じゃまだ…」

「そ、そう。わかったわ。それじゃあ、もう一度…」

もう一度できることが、慈はとても嬉しかった。

が、それを表に出さないようにしっかりと振る舞う。

そして、二度目のゴムを装着した。

慈は、再び訪れるであろう快楽を想像し、胸が高鳴った。

第31話

張り付いたコンドームをにゆるんと引き抜いた。

亀頭の部分に溜まっていた精が、ゆっくりと垂れ落ちる。

根元まで届く前に、慈はそれを舌で舐め取った。

「ちゅ…ちゅずつ…じゆる…」

櫛の肉棒に残った精子を、慈は自らの舌で丁寧に掃除する。

舌が動く度、ぴくん、ぴくんと跳ねる肉棒。

慈は、自分の奉仕で喜ぶ櫛を愛おしく感じた。

すると、少し柔らかくなってきた櫛が、またガチガチに硬直し始めた。

むくむくと起き上がる櫛に、慈は体かキュンキュンと喜ぶような感覚を覚えた。

「櫛くん…まだ、おさまりそうにない…？」

「すみません、まだ…」

「そ、そう。わかったわ。それじゃあ、もう一度…」

もう一度できることが、慈はとても嬉しかった。

が、それを表に出さないように平常を演じて振る舞う。

ドロドロとした白濁液を全て口に入れた後、新しいコンドームを開封した。

そして、權の怒張へと空気の入らないように先を押し付け、くるくると装着させる。

一度吐き出して少し小さくなったのか、さつきはパツパツになっていたコンドームは今ではピッタリだった。

慈は、再び訪れるであろう快楽を想像し、胸が高鳴った。

ゴム越しに、權をスリスリと愛おしそうにさする慈。

「もうできそう？」

「はい。」

權は、下腹部に薄く痺れるような、心地よい感覚を覚えた。

今すぐにでも、この快感を解き放ちたい。

一度射精したにも関わらず、もう我慢ができそうにない。

慈は、そんな權を未だ甘い液を滴らせる秘壺へと導く。

くちゅり。

濡れそぼった慈の秘部は、權の頭を擦り付けてクチュクチュと水音を出す。

慈のそこは、大口を開けて大きな權をぬぶぶ…と飲み込んでいく。

權は、慈の閉ざされた穴の中を押し広げながら奥へ奥へと進んでいく。

「っ……あ……っ♡」

慈は、挿入している間に感じる快感で、既に興奮しきっていた。

処女を散らしたばかりで、快感には敏感な時期。

先程は押し広げられるような感覚だったが、今回は違った。

一度味わったせいも、權の形が詳細にわかる。

加えて、感じる快感も強くなっていた。

こんなことを続けていると、癖になってしまう。

慈はそんな予感を覚える。

「んっ♡……あっあっ……っ♡」

權が最奥へ辿り着いた時。

慈は、お腹の底からきゆうう、と締め付けられるような鋭い感覚が走った。

そのまま慈は甘イキの状態へと運ばれた。

その瞬間、きゅんきゅんと膣内が収縮し、權を強く抱きしめる。

「っ……っ……っ……っ……」

そんな刺激に、權も同時に快感を覚える。それは快感の連鎖だった。

慈が軽く絶頂したことにより、權にも快感が分け与えられる。

「動かしますね…」

「はあ♡はあ…♡ちよつと、まって…♡」

甘イキしたことにより、膣内が敏感になっていて慈は權へと静止を求める。

が、ここまで射精感を煽られている權は止まることなどできなかつた。

權は、自分の思うがまま、本能に忠実に腰を振り始める。

ぐちゅっ、ずちゅっ…

腰をへこへこ動かして、小刻みに慈へとジャブを繰り返す。

權が腰を突き上げる度、以前は届いていなかった慈の子宮口がこんこんとノックされる。

慈は子宮口を押し上げられると、それに合わせて吐息が漏れる。不思議な感覚を覚えた。

「はっ♡はっ♡ふっ♡ふっ♡」

慈はピストンに合わせて、浅く息を繰り返す。

絶頂直後の刺激に弱いおまんこへ、權は容赦なく腰を振り続けた。

たんっ♡たんっ♡たんっ♡

大きく体を動かし、肉と肉のぶつかり合う音が鳴る。

2人の行為は、少しずつ大胆になってきていた。

止めなければいけないはずの慈も、權の与える快感に夢中になっている。

「あつ♡あつあつ♡だめ…♡だめだよ…♡」

慈は、声に乗らないように吐息に混ぜて囁くように語りかける。

否定しながらも、それは懇願しているかのような印象を与えた。

それを耳元で囁かれる權にしてみれば、興奮材料以外の何物でもない。

「きちゃう…♡また、くる…くる…♡」

「僕も…そろそろ、イキます…っ」

2人は、どちらからともなく口を合わせた。

そして、互いの舌を絡め合わせ、唾液を貪る。

「はあむ…♡はむ…ちゅ…♡ちゅるる…♡」

「ん…ちゅっ…♡ちゅずっ…♡んむ…」

下から響く快感。上から流れ込む甘美。

同時に責められた慈は、すぐにでも絶頂へと達してしまいそうだった。

2人は指を絡め、恋人繋ぎをしていた手をきゅっ！と強く握った。

「あつ♡も、ダメ…♡」

それを合図に、慈は深い部分で絶頂を迎えた。

短い宣言と共に、腰から頭へと突き抜けるような刺激が走る。

びゅーっ♡びゅびゅびゅっ♡びゅびゅっ♡びゅくびゅくっ♡

そして、同時に權も限界を迎えた。

ゴム越しに、慈の子宮口へ向けて白濁液を放つ。

「んっ♡んっ♡んっ♡」

「んむ…ん、ちゆる…♡」

口と口を繋いだまま、はむようなキスを続ける。

その間、2人はずっつと手を握り、口づけを交わし、抱き合い、絶頂の余韻を感じていた。

特に慈の方は、1分近く快感と幸福な気持ちが続く。

全てのストレスが消えて行くほどの、幸せな時間だった。

ずっつと、こんな時間を過ごしていたい。

この気持ち良さに、体を任せてしまいたい。

「先生。とつても気持ちよかったです。」

「…ありがとう。」

慈は權の言葉に、ふわふわしていた意識を取り戻した。

そして、にぎにぎと握手を続けている手とは反対の手で、權の頭を撫でる。

權はその行為により心が安らぎ、慈へと自分の体を託した。

權には、比喩ではなく、慈と本當に1つになったかのように思えた。

第32話

「あつー……あ、あふう……ああつ……♡」

どちゆつ、どちゆ、どちゆう、どちゆつ

腰が振られる度、慈の一番奥の部分へゴンゴン響く。

2人の座る床にはもう精液と愛液とが混ざり合い、小さな水たまりを作っていた。

「お、お……あああ……あう……うあ……」

結合部からぐちゆぐちゆと水を散らし、それが隠しきれないほどに大きくなつていく。

もし、あの子達が今起きたら、この音に気がついてしまうだろう。

見つかってしまったら、と想像して、慈は更に拍車をかけて興奮した。

「っーっあ……」

体に力の入った慈は、權の肉棒をきゅんきゅん締め付けた。

そして、それは權を興奮させる材料になった。

激しかったピストン運動が、更に苛烈さを増す。

「か、かい……く……声……っ！漏れちゃ……」

「はあ、はあ……もう少し、我慢してください……」

慈は息の抜けるような声で權へ囁く。

性欲のお化けになっている權には、その声は届かない。

それどころか、更に興奮した様子で慈を求め。

「はあ……はあ……はあ……」

「ふっ、ふっ……ふああ……っ」

オスとメス。獣同士の2人は、快楽を貪り合う。

あれから、何時間経っただろうか。何回出しただろうか。

興奮の冷めない權は、飽きることなく慈を抱き続けた。

そして慈も、權の全てを受け止めている。

「はっ……はあっ……あん……ん……ん……っ！」

抑えきれなくなった声を、慈は口に手を当てて押し殺す。

コンコンとノックされる子宮口。

こんなの、気持ちよくないわけがないよ……

慈のひだが、權をぞりぞりと擦りつける。

まるで慈の中で權の肉棒が洗われているかのようだ。

そして、權の反り返ったカリ首が、慈の膣壁をかく。

權の血管や引き攣った跡が浮き立つ竿の皮膚が、慈の膣壁を引つ掻き回して愉しませる。

届くことのなかった奥の方まで、全てに侵入され尽くす。

「まって、またイっちゃあ…あつ、あつあつ…あ…い！」

きゆうううっ！

膣が絞られ、その刺激で權も達する。

びゅびゅーっ♡びゆるるるっ♡びゅびゅびゅっ♡

腰を押し付け、少しでも奥へ入ろうとする權。

慈の膣も、迎え入れた權を離すまいとギチギチに締め付ける。

0.02mmの壁が、慈と權を遮る。

それは、とても薄くて厚い壁だった。

「っはーっ♡はーっ♡はーっ♡」

絶頂の最中、息を吸うことを忘れてしまっていた慈。

權の射精が収まってから、やっと息を吸いはじめた。

今日だけで何度も経験した絶頂の所為で、慈のおまんこはじんじん痺れていた。

ずるる…にゆぼ…

權が肉棒を引き抜くと、奥からかき回されて白く泡立つ愛液がたたりと垂れ出る。

それはまるで膣内射精後の光景のようで、慈は一昨日のように中に出されたかのよう
な妙な気持ちになってしまう。

しかし、權の装着しているゴムは一切の不備なく機能している。

漏れ出ているということも中で外れてしまったということもない。

「その…すみませんでした。何度も…」

賢者タイムが訪れて漸く落ち着いた權は、慈の姿を見てまず謝罪した。

慈の体は汗でベタベタで、顔の方は涎と涙でぐちゃぐちゃになっている。

このまま人に合わせるわけにはいかないくらいには酷い有様だった。

相手が男なら、確実に襲われてしまうだろう淫靡な姿だ。

「イっ…いいのよ…權くん。それよりも、気持ちよくなれた…?」

「はい。とても、気持ちよかったです…」

「そう…それは良かったわ…」

慈の意識は今にも飛んで行ってしまいそうだった。

それほどに、激しいセックスだった。

このままふわふわと浮いている感覚に任せて気絶すれば、もう取ることもできないと

思っていた睡眠を経験できるかもしれない。と、そう考えるも、このまま寝てしまうわけにはいかない。とそれを否定する。

床は大量の愛液がこぼれ落ちている。これは一度掃除しなければならぬだろう。

それに、慈には權を宥めながら眠りにつかせるという仕事が残っている。

これは、慈の行う仕事の中でも1、2を争うほどに有意義な仕事だ。

慈は、これから權も眠れなくなるのではないかと予想していた。

だから、今の眠れるうちに幸せな眠りを感じさせてあげたかった。

「…先生。」

「なあに？」

掃除をして、この時間のシャワーは他のメンバーを起こしてしまう可能性があるため、濡れタオルで体を拭いて、身だしなみを整える。

そして2人は、同じ布団に入って床に就く。

慈は、權の小さなその背中を後ろから抱きしめている。

向かい合って抱くと、慈の大きな胸で權の呼吸が阻害されてしまうため、今はこの形で落ち着いていた。

「…呼んでみただけです。」

「もう…なあに？それ。」

「先生。」

「なあに？」

「…呼んだら、いつまでも返事をしてくれますか？」

そんな權の何気ない問いかけに、慈の心が締め付けられた。思わず、抱いていた權の体を強く抱き寄せる。

私は忘れてしまっていた。…寂しかったのだ、この子も。

「…ええ。いつでも、答えてあげるわ。」

慈は、優しく權を抱きしめ睡魔へ誘う。

…どうか、この子が幸せでいられますように。

…駄目よ。

やめなさい、佐倉慈。

そんなことをやってしまったら、教師としてだけじゃなく、人間としても…
權はすうすうと寝息を立てている。

慈は、今日の仕事を全て全うした。

…それなら、少しくらいご褒美があっても…

「駄目…」

口にも出してみるが、あまり効果のないように思える。

頭の中とは反対に、自分の手が勝手に動いた。

目指すのは、ゴミ箱の中。

「ああ…どうして、こんなに美味しそう…」

ガサゴソ漁り、取り出したのは權の精子ごと捨てられたコンドーム。

「駄目…駄目…ああ、駄目なのに…」

背徳感が、慈を突き動かしていた。

そんな、真夜中の一幕。

かわる

第33話

行き先は、バリケードと防火扉の向こう側。

そして階段を降りていき、2階へとたどり着く。

今日は、權の屍処理班への就職試験をしている。

「……じゃ、あたしは少し離れた場所で見てるから。」

胡桃の採点基準は4つ。

周りにも意識を払い、しっかりと不意打ちを警戒できているか。

自分以外のものへ上手く「彼ら」の意識を逸らせられるか。

確実に動かなくなるまで、油断をしていないか。

短い時間で……出来れば、数回で倒せているか。

……そして、隠し採点として、これから何度も「彼ら」を殺していく事に耐えられそう

か。

少し行った先で、胡桃が足を止める。

そしてジエスチャーで「彼ら」がいたことを伝えた。

壁から顔を覗かせると、一匹が彷徨っているのを見つけた。

この時間から2階にいるということは、昨夜から学校に残っていたのだろう。

(お勤めご苦労様だな、まったく…)

こうしてもう一度本物を見ても、「彼ら」を大して怖い存在と思えなかった。

これは、とても危ない考え方だ。

懼はその甘い考えを払拭しなかった。

(そりゃあ恐怖に震えて生きるより、多少なりとも安心感のあったほうが楽に過ごせる)

だが、それで死んでしまつては元も子もない。

「…いけそうか?」

「はい。」

「危なくなつたら、すぐに助けるからな。」

「ありがとうございます。」

3階にあるものだけで武器になりそうなものは少ない。

懼が選んだのは持ちやすいギターだった。

弦を切れば音は出ないし、もともと棍のような形をしている。

持ち歩くのが面倒な事。そして重いという点を除けば良い武器だ。

…が、時間が経つにつれて權の腕力は日に日に増していつている。

ギターを片手で掴んでバットののように振る程度なら軽い仕事だった。

(後輩…)

胡桃は、權がどんな人間なのか。そして、下でどんな生活を送ってきたのかを知らない。

が、「彼ら」と一度戦ったことがある事は聞いた。

それも、慈を守ろうとしての行動だったようだ。慈が惚気よろしく語ってくれた。

蛮勇とも取れるが、人のために自ら死地に飛び込む勇氣は評価したいところだ。

カランカラン…

權は、事前に用意させておいた音の出るものを遠くへ投げる。

これは目当ての個体だけを引きつけ、周りにいる「彼ら」を引きつけない程度の物音が好ましい。

「彼ら」が隙を見せた瞬間、死角から飛び出す。

ギターを、腐った頭をめがけて、力任せにフルスイング。

勢いの乗ったギターは、「彼ら」の頭を正確に捉えていた。

ギターに殴打され、吹き飛び、そのまま壁とギターで挟む形となった。

頭がパシヤア！と勢いよく潰れた。

「うへえ…お前、容赦ないな…」

「…いえ。殺さないで、殺されるだけなので。」

隠れていた胡桃が顔を出す。

「彼ら」は心臓が動いていないようで、シャベルで斬りつけても人間相手よりかは血が出ない。

…が、今回權は頭を丸ごと潰してしまった。

動かなくなった死体からは、血がジユクジユク流れていた。

權は血で汚れた服を掴み、割れた窓から放り投げる。

ドシャ！と嫌な音が鳴り、その場には大量の血と嫌な臭いだけが残る。

權はこの戦い方は掃除が面倒だな、と他人事のように考えていた。

「…う、うん。合格…」

胡桃はドン引きしながらゴーサインを出した。

ここまで度胸と力があるなら、周囲への警戒を怠らなければ大丈夫だろう。

血飛沫が飛び、血を浴びてしまった權をシャワーに行かせた後。

胡桃は学園生活部部屋に、授業中の慈を呼んだ。

部屋に居るのは、胡桃、悠里、慈の人。

由紀には少しの間自主だと伝えて、教室に残してきていた。

「で、どうだったの？」

慈は早速、とばかりに胡桃に問いかけた。

心の中で順位をつけているつもりはないが…

慈としては、胡桃には悪いが權にはあまり危険なことをやって欲しくはなかった。

「うん。文句なしで合格。すぐにでも戦力になると思う。」

「っ…：そう。」

「でも、気になることが一つあって…」

悠里も慈も、不思議な表情を浮かべた。

合格ならば、何が問題なのか。

「アイツ、頭を吹っ飛ばしても、平気そうな顔してた。」

頭を吹っ飛ばした。

その言葉に、慈と悠里は顔を見合わせる。

權からは、そんな事ができる印象を一切受けなかった。

胡桃の仕事を手伝うにしても、せいぜいが胡桃の後ろから援護をする程度だと思っ

いたからだ。

「本当に、何も感じてないみたいな顔だったよ。あたしが言える事じゃないかもしれないけど、あまりにも淡々としてて、ちよつと驚いた。」

胡桃がふうと一息つき、暫し沈黙が流れた。

胡桃にとつて權は、「後輩」から「少し心配な後輩」へと変わっていた。

あの化け物を殺すという事が、どれだけの苦痛なのか。

權は、本当に平気なのだ考えてもいいのか。

「…でも、逆に危険かもしれない。平気そうに見えるのは、実は溜め込んでるからかもしれないし。」

「…そうね。胡桃はどうなの?」

「あたしはそういうんじゃないから平気。もう、作業みたいなものだよ。」

「そう…」

それはそれで、大丈夫ではないのではないか。

悠里は、そんな言葉を飲み込んだ。

しばらくして、部室の扉が開く。

入ってきたのは、シャワーを浴びてほかほかになった權。

「戻りました。」

「權くん!大丈夫?怪我してない?疲れてない?」

「あ…はい。僕は大丈夫です。」

そんな權に駆け寄り、第一に權の体の心配をする慈。

悠里と胡桃は、慈のあからさまな対応の違いに顔を合わせて苦笑いした。

2人が…否。由紀も含めて3人が見てしまったあの日の2人のキス。

この2人が生徒と教師を飛び越えた特別な感情を持っているという事は部内の周知の事実となっていた。

「シャワー、使わせてもらってすみません。」

「いいのよ。あなただって、もう学園生活部の一員なんだから。」

「…ありがとうございます。」

悠里が、淹れたお茶を權の座るテーブルの上へと差し出した。

權はそれをふうふうと冷まして、口をつけた。

…こんなに湯気が立ってるのに、生ぬるい…？

權もまた、少しずつ変化を迎える。

第34話

「そうそう。こっちだよこっち。おい、どこ行くんだ？」

權はわざと音を立て「彼ら」を引き連れて階段へと向かう。

だが、今日は何故だか「彼ら」の反応の悪い。

人間が近くにいるのに、積極的に襲ってこないのだ。

少し手間はかかるが、權は壁や床を蹴って音を鳴らし、「彼ら」を引き寄せる。

そして：

「先輩！」

「はあああつ！」

階段付近へ来たと同時に身を引く。

ザザッ！

死角から現れた胡桃が、シャベルを振りかぶって薙ぐ。

一匹の首が飛び、コロんと地面へ転がった。

「ああ、あ、あ、うづあ……」

權が引き連れて来たのは2匹。

胡桃が現れた途端、もう1匹は元気に叫び声をあげて動き出す。

「オレより可愛い女の子が良いってか、コノヤロー！」

權は「彼ら」の腹に新しく調達した武器である箒を突き刺す。

武器にしていたギターは、扱いが酷かったせいも持ち手が折れて使い物にならなくなってしまった。

その代わりになるが、殺傷力は低いものの、長いため歩行の妨害をしやすいこの箒だ。

今は、權が「彼ら」を引きつけ、時に箒で遠くから牽制。

そしてその隙に胡桃が「彼ら」の息を途絶えさせる、という方法を取っていた。

これは、「彼ら」の強い力で掴まれても同じく強い力で対抗できる權にしかできない仕事だ。

実の所、悠里もそれには劣るものの「彼ら」に引つ張られても踏ん張れるだけの力を持っているのだが……

「はあ、はあ……これで全部か。なんとかなっちゃったな……」

「大丈夫ですか？先輩は少し休憩しててください。防火扉はオレが閉めてきます。」

「いや。この階最後の扉だ。あたしも行くよ。」

ガラガラ：

激しい音が鳴ってしまおうが、どうせ呼び寄せられても扉に阻まれる。

これで、1階へと繋がる、2階の三箇所全ての扉が降りたことになった。

「とりあえず、ここの扉も閉めて、っと。：凄いな。もう2階制圧出来ちまった：」

「単純に、人手が二倍になりましたからね。オレは、これまで胡桃先輩が1人でやってたことにびつくりですよ。」

「でも、あたしがやらないとダメだしさ。出来なかつたら、死ぬだけだったから。」

「：そうですね。でも、これからはオレもいます。手伝わせてください。」

「お、頼もしいじゃん、後輩。」

2人はにこりと笑いあう。

昨日の夜中の一件で少し距離をはかりあぐねていた胡桃も、昼時になってきても通りになっていた。

役職の事もあって、權と胡桃は徐々に距離を縮めていった。

初めは人見知りでなかなか心を開けなかつた權も、この数日だけで胡桃の人当たりの良さに感化されていた。

胡桃は基本誰にでもフレンドリーだが、自分と距離を開けている相手には一線引いて、踏み込まないように接することが出来る。

それが權の、元々あまり干渉されたくない性格と相性が良かったようで、今ではパートナーといってもいいほどだ。

逆に、グイグイ押すタイプの由紀へは苦手意識を持っていた。

「んじや、今日はこの辺にしとこうぜ。」

「そうですね…昼食もそろそろだと思えます。」

「今日は何作ってくれんのかなあ。」

「先輩は食いしん坊ですからね。」

「なあ…?!?力仕事してると、たくさんエネルギー消費すんだよ!」

今日の収穫は2階の制圧。

バリエードを作る労力が減ったためにかなりスピーディーに制圧することができた。

これはかなりの大金星だ。

「お、ー!」

朗らかな時間は胡桃の鋭い声が飛んだことにより終わりを迎えた。

權は、慌てて手に持つ箒を構える。

教室の中に、動く人影を見つけた。しっかりと確認していたはずだが、死角にいたの

だろうか…

その人影は、胡桃のよく通る声に反応して教室から出てくる。

が…

「あ、あああ…」

箒を構えている權を無視して、「彼ら」は胡桃を直指して歩いていった。

「な、なに…?」

權はその状況が信じられなかった。

どうして無視されたのか、わからなかった。

「待てよ…」

「お、おい!」

權は、「彼ら」の肩を掴んで引き止める。

それは、普通なら自殺行為にもなり得るが…

「待てつつんでんだよ!」

「彼ら」は、大声をあげた權の方向を振り向いたにもかかわらず、興味を示さなかった。

再び呆然とする權へ背を向けて、そののろまな動きのまま一直線に胡桃の元へと向か

う。

胡桃は、思い切りシャベルを振り抜いてグシャリ、と活動を停止させた。

「大丈夫か…?」

「…そう、見えますか…?」

胡桃は、呆然と立つ權へと駆け寄った。

ついに、本格的に權にも副作用が出て来ていた。

「權くん！」

扉を開けて、まず權たちを迎えたのは悠里だった。

相当心配していたのか、血相を変えている。

「大丈夫!? 下で大声が聞こえたけど…」

「はい、まあ…大丈夫なのは大丈夫です…」

權は、少し自嘲気味に答える。

それを、悠里は悪い方向へと受け取った。

「胡桃。何があったの?」

「いや…」

胡桃も、悠里へと伝えあぐねている様子。

どう伝えればいいのかわからない。

「權くん。どうしたの?」

「大丈夫だった!?!」

そして、騒ぎを聞きつけた授業中の2人もやって来た。

幻想を見ている由紀と、現状を正しく認識している慈との間には緊迫感の差異がある

ものの、同じく心配していた。

「いただきますー！」

その後。

由紀がいるため、話し合いは一旦中断。

まずはご飯。その後、午後の時間を自習にして、詳しい話を聞こう。

そう考えていた。

「はふはふ！おいしいね、リーさん！」

「ありがとう。由紀ちゃん。」

そんな和やかな食事の中、權は呆然とした表情で口元をおさえていた。

「っ……」

「あれ？權くんどうしたの？」

「お、おい、どうしたんだよ……？」

「今日のご飯、美味しくなかったかしら……」

由紀も胡桃も悠里も、權を心配していた。

先ほどのこともあったからだ。

「…佐倉先生。これ、いつからですか……？」

「…」

ああ、その時が来てしまったか。

もしかしたら、權は違うかも、と希望を抱いていた。

が、そんな慈の願いも虚しく崩れ去る。

「朝から、おかしいとは思ってたんです。今日は、やけに薄味だな、つて…」

慈は立ち上がり、權の下まで駆け寄る。

そして、權を抱きしめた。

權には辛い思いをさせたくなかった。

これは、權へと感染うつしてしまった自分がしなければならない事だ。

「ごめんね…ごめんね…」

慈は、そう謝ることしか出来なかった。

第35話

「由紀さん。先生がお話を聞いてる間、教室に戻って自習しててくれる？」

「えー？私も心配…」

「もしかしたら、不良さんと喧嘩になっちゃったのかもしれないから…その時は怒ってあげないと。ここは、先生に任せて？」

「うん、わかった…」

「ありがとう、由紀ちゃん。」

食事の後、由紀を外して場を設ける。

最近、由紀に聞かせられないような話が多すぎる。

彼女は、どう思っているのだろうか…

「先生。もし、先生も一緒なら、しっかりと言ったほうがいいと思います。」

「…そう、よね…」

慈は、言いにくそうに手をもぞもぞと遊ばせる。

そして、覚悟を決めた。

「私…そして、多分權くんも。もう、食べ物の味が、わからないの…」

「そんな…」

悠里が息を飲む。

こんな顔は見たくなかった。

出来れば、秘密にしておきたかった。

「ごめん…あたし、気付けなくて…」

「私も、すみません…」

「いいのよ！黙ってた先生が悪いんだから…」

慈は手を胸の前で振る。

この子達が悪い事なんて、一つもないのだ。

「味がしないって、どんな感じなのかしら？」

「悠里先輩が悪いわけではないんですけど…土を口に入れてるみたいなの…」

「土…」

口に入れると、妙な異物感と不快感が口の中に広がる。

味がしないだけで、ここまで変わるはずがない。

きつと、頭がこれを食事だと認識していないのだ。

どんなに美味しそうな匂いがしていても、香り付きの消しゴムを食べることはできない。

「もしかして、今日下で大声を出していたのにも…関係ある？」

悠里は先の件と結びつけた。

それは大きなくくりでは間違っではない。

「その、あいつらが…」

「俺を避けたんです。まるで、仲間だとも言いた気に。」

「っ！」

上手く言えない胡桃の言葉を、權が引き継いだ。

初めは驚いたが、今は落ち着いている。

悪い方に考えてしまえば、おそらく權と同じであろう慈の事まで下げてしまう気がした。

「もし、僕と先生が感染者たちに追われないのだとしたら…」

それに、「彼ら」に無視される事はなにも悪いことばかりではない。

皮肉にも感染者の血が混じってしまったばかりに一番安全な立ち位置になってしまった。

「ひとつ、提案があるんですけど…」

「提案？」

「物資調達に行きたいんです。」

「物資？」

「はい。それは安全な場所から出るときに、大きなアドバンテージになります。」

「確かに…それはそうね。」

「あたしよりも何倍も安全に活動できる、ってわけだな。」

「はい。ここの物資もいつまで持つかわかりませんから。」

「…確かに、また購買部に行かなきゃと思っていただけけど…」

「購買部の物資だって減るんですよ。」

人間にとって食事は欠かせないもの。

そしてそれは、勝手に湧いてくるものではない。

生きたいなら危険を冒してでも手に入れに行くしかない。

…が、それは純粹な人間であるものに限る。

襲われるリスクのない2人が食料を取りに行くことの、どこに難しい事があるだろうか。

「あたしも行く。戦力は多い方が良いだろ？」

「いえ…多分、狙われる人がいると、下手に危険になるだけだと思います。」

「…そうかも。」

なおも心配そうな顔の胡桃。

胡桃は新しく入った後輩のことを随分と気にかけているようだった。

「それに、胡桃先輩には学校を守って欲しいんです。…もし、奴らが入って来た時に、戦える人がいないと困りますから。」

「そうだよな…わかった。」

胡桃は説得できた。

問題は、否定的な様子の悠里だ。

「明日、すぐにでも行きたいです。」

「明日？ちよつと急すぎるんじゃない？」

「何が起こるか分からないこの状況。なにか、不測の事態が起きる前に行動するべきだと思います。」

ゲームのように、ゾンビの次は今度は異形のモンスターが…なんてことは流石にないだろうが。

例えば、車が壊されるかもしれない。校門が塞がれてしまうかもしれない。

不用意に動けない今の状況では、些細な事ですら命に関わる。

「それに、もしかしたら外には生きている人がいるかもしれない。早ければ早いほど

良いと思います。」

「もし困っている人がいれば：助けてあげたいわね。」

「なら…」

「それでも。私は、見知らぬ人よりも2人の事が大事なの。」

悠里は、權と慈の手を取る。

そして、慈しむように包み込む。

「それは…分かつてます。危険なこととはしません。」

「襲われないという確証はないのよね。とても危険だと思うけど？」

「それは…しっかり確認してからにします。もし少しでも難しいようなら、やめます。

…これで、いいですか？」

悠里はふう、と一息ついた。

もつと言いたいことはたくさんあった。

が、權の揺らがない気持ちに折れてしまう。

「…わかったわ。でも、絶対に戻って来て。…めぐねえも。お願いします。」

「任せて。あと、めぐねえじゃなくて先生です。」

「…ごめんなさい、佐倉先生。」

第3章? しゅっぱつ♡

第36話

「どうしても、行ってしまおうの?」

「はい。」

「…やっぱり、急すぎない? もう少し、時間をおいてからの方が…」

「いつかは行かなくてはいけないんです。早く行けば、それだけ早く帰って来ることが
できますから。」

その翌日、本当に「彼ら」は權たちを襲わないのか、1日しっかりと確認した。

そして、出発はそのまた翌日となった。

1日かけて確認したのだが、悠里はまだ納得していない様子。

「出張、頑張つてね!」

「ええ。お土産も買ってきてあげるわね。」

「やったあ!」

それとは反対に、由紀は楽しそうに見送っていた。

慈は、そんな由紀の頭を一撫で。

「權。…その、気をつけろよな。」

「わかつてます。」

胡桃も、いつもの元気は何処へやら不安そうだ。

權にとつて、胡桃のその大人しい態度は新鮮だった。

彼女は「彼ら」をも恐れない強靱な精神の持ち主だと思っていたからだ。

「…先生。行きますよ。」

權は、由紀と話している慈の声をかける。

慈は由紀に捕まってしまうていた。

「チップスとソーダとチョコレートと…あ！大和煮も！5こ食べちゃうよ！」

「由紀ちゃん、そろそろ…」

由紀はお土産の話に夢中になっているようだ。

そんな由紀がいれば、残る2人も安定出来るかもしれない。

人間、生きる目的があつた方が張り合いがある。

今の学園生活部は、由紀の幻想を守ることに一丸となっている。

「では、行ってきます。」

「早く帰ってきてね。」

「はい。物資調達後に、何も見つからないようならすぐに帰ってきます。」

「…あ！待って！」

權達を呼び止めた胡桃が、胸元で結われているリボンを解いた。

そして、權に手渡した。

權は、その紐を不思議そうに見つめる。

「絶対、返しに戻って来いよ。」

「胡桃先輩って、ベタなの好きですね。」

「…悪いかよ。」

「いいえ、ちつとも。じゃあ、これは持っていくます。必ず返しに戻ってくるので。」

權は、その紐をくるくると腕に巻いて縛った。

少年漫画の主人公みたいだな、なんて思う。

「私も〜！はい、めぐねえ！」

それに倣って、今度は由紀がリボンを解いた。

由紀から紐を受け取った慈は、アワアワとどうしたものか悩んでいる。

權は、紐に手を当ててそわそわしている悠里へと近づく。

そして、リボンの端を摘んでシユルシユルと解いた。

悠里は驚いて、櫛のされるがままとなっている。

「先輩だけ、仲間外れは無いですよ。」

「…ありがとう。」

「これで、離れててもみんな一緒です。…ですよ、胡桃先輩？」

「うるさい…」

胡桃は自分の行動を思い返して真っ赤になっていた。

そんなになるならやらなきゃよかったのに。

櫛は、設置した非常梯子に足をかけた。

そこから一階へと降り、目指すはミニクーパー。

「あー！待って！私が先に降りるから！私がっ！」

「…どうぞぞ。」

慈の服の作りは単純。

一枚が全て繋がっているワンピースタイプ。

下から覗けば、色々と素晴らしい光景が拝めるはずだったが。

櫛は、後でしっかりと見せてもらおうと心に誓った。

カン、カン、カン…

小気味良い音と共に、慈が一段ずつ降りていく。

慈に続き、權も梯子へと足をかけた。

何日、いや何週間ぶりか。

地上へと降り立った後、落ち着いて駐車場へと向かう。

「本当に、私たちには見向きもしないのね。」

「そうですね。まるで、僕たちだけ違う世界の人間みたいです。」

「世界に2人だけ、か。…ふふっ」

実際には真逆なのだが、權のその例えは言い得て妙。

權の姿を見ようとしてもしない「彼ら」は、權のことが見えていないかのようだった。

權達は安全に駐車場までたどり着き、慈の車へと駆け寄った。

車に乗り込み、エンジンがかかる。

幸い、車は当時のままどうともなっていない様子。

ガソリンも充分あるし、バッテリーが上がっていることもない。

「…なんだか嬉しいな。2人だけの、デートみたい。」

「何か言いましたか？」

「ううん！なんでもないっ！」

慈はブンブンと大きく首を振る。

こんな、お遊び気分ではいけない。

物資を調達して、無事に拠点へと持ち帰る。

そして生存者がいた場合にはコンタクトを試みる。

これは、しっかりとした任務なのだ。

…と、思ったのは慈だけ。

心の底では、權も2人きりのデート、と考えていた。

人に邪魔されることのないこの状況。

慈とどんな事をしようかな、と胸を高鳴らせていた。

第37話

校門をぬけ、しばらく進んだ頃。

こんな世界になっても、二人にとっては軽いドライブ気分だった。

「目的地はどこ？」

「まずは近場のコンビニから寄っていきましょう。」

「わかったわ。」

權たちを乗せた車は、最寄りのコンビニへと向かう。

慈にとっては勝手知ったる道だが、そこかしこに人だったものや事故の跡で変わってしまっている。

特に、処理されていない車の事故で、通れなくなってしまう道があった。

慈のよく知る道とは全く別のもののように思えてしまうほどだ。

通行止めの道では迂回を強いられ、紆余曲折。

ようやく權たちはコンビニへとたどり着いた。

コンビニの敷地近くに「彼ら」はいないようだ。

「自動ドアが開かない…」

いつもの癖でドアの前に立った權が愚痴をこぼす。

電力が来ていないため当たり前だが、これは人力でこじ開けるしかないようだ。

「大丈夫？手伝うわ。」

「いえ、多分1人で…」

權は感染してしまったことで何倍にもなってしまった怪力を使い、無理やりこじ開けた。

嫌な音を上げながら開かれるガラスの扉。

どうやら中にも「彼ら」はいない様子。

「う…こりやひどいな…」

コンビニへ入って開口一番、權は顔を顰めた。

続いて3歩後ろを歩いてきた慈も、室内の異様な臭いに思わず鼻を手で覆った。

「彼ら」がいないためか、ガラスは綺麗に残されていて、自動ドアが閉じきり、密閉されていた室内は酷い匂いが充満していた。

生ゴミを放置していたらこれほどの匂いが発生してしまうのか。

「弁当おにぎり、パンは全滅だ。」

「わかつてはいたけど、鼻が曲がりそう…」

冷蔵のコーナーからは異臭が。冷凍庫の中は変な色の水ができている。

冷凍庫から向こう側には近寄りたくない。

「食べ物、密閉されたお菓子ならまだ大丈夫そうね。」

「お茶や水、ジュースなんかも持って帰りたいですね。ずっと水ばかりだった先輩たちも喜ぶと思います。」

「そうね。私もビール…」

權が驚いた顔で慈を見た。

それに気がついた慈は、慌てて手を左右に振る。

「い、今は飲まないから…っ！運転するから飲まないわよ!？」

「あ、そうじゃなくて…佐倉先生も、ビールとか飲むんだなって…」

「大人ですからっ」

世界がまだ生きていた頃。

權は意外と感じていたが、慈はお酒が好きな方だった。

それも、かなり重度の方で。

「折角なので、ここで一本飲んで行きませんか？」

權は、最奥にある冷蔵庫で慈に提案する。

そのガラス扉の奥には、1本くすねた程度では見た目で分からないくらい大量のペットボトルがずらりと並んでいた。

「私たちが飲むものなら、ここで飲んでも一緒よね。」

慈は、櫂のその提案に乗った。

慈自身、久々に見る馴染みの深い飲料水たちに興味津々だった。

慈はレモンティー。櫂はファソタを手に持った。

熱気のももった冷蔵庫を閉め、臭い匂いの漂うコンビニを脱出。

2人は仲良く駐車場のブロックの上へと腰掛けた。

そして、キャップを開け、中の飲料へと口をつける。

「…味、しないわね。」

「口の中でパチパチ弾けてる水…」

久しぶりの2人はガツクリとうなだれた。

慈は、密かに楽しみにしていたビールを美味しく飲むことができないことを悟り、心の中で涙を流した。

「…櫂くん？」

慈は、手に触れた櫂の手の感触に目を見やっった。

櫂は慈の手を大事そうにぎゅっと握りしめていた。

「どんなに悲しいことがあっても、先生が隣にいてくれるなら我慢できます。」

「權くん…ありがとう。私もよ。」

(ビールがあ…)

それにしても、慈の悲しみは大きかったようだ。

「權たちはお菓子や飲み物などのかさばるものは後日に回すことにした。

今必要なものは、缶詰やレトルト食品、お米といったご飯。

娯楽品はどうしても後回しになってしまるのが現状だ。

それに、どうせ近場だ。いつでも回収にすることができるとは。

「ん〜。」

だが、權は棚を眺めながら何かを探している様子。

そのことに気がついた慈は、權へと問いかける。

「何を探してるの?」

「コンドームですよ。」

「(?!?!?)」

「学校にあるものだけじゃ、すぐになくなってしまふので。」

すぐになくなってしまふくらいするつもりなんだ…

慈はぼつと頬を染めた。

「佐倉先生も、一緒に探してください。コンビニにあるのは確かなんです。」

「うーん……」

慈は真剣な権に触発され、納得いつていないながらもコンドームの箱を探し始めた。

「……あつ……」

そして、偶然にも慈の近くにある棚にそれはあつた。

0・02と書かれたその箱は、恐らく……

「……」

しかし、その箱を慈は見なかったことにして別の場所へといそいそ歩いていく。

権は真剣に棚とにらめっこをしていて、慈の行動には気が付いていない様子だった。

(こんなにもすぐに見つけたら、もともと知ってたみたいじゃない……)

「いっばいあつてよかったですね、先生。」

「そ、そうね……」

権の手には、レジ袋に入ったたくさんのコンドームが抱えられていた。

物資をすべて取ってしまうと、もし生存者がいたとして、ここへ来た場合に何もないと困ってしまうだろう。

だからある程度は残しておこうと決めたのだが、コンドームは残っていても使う人間はいないだろうという判断のもと、すべてのものを持ってきていた。

こんなにたくさん持ってきて消費し切れるんだろうか、と考える慈の胸はドキドキと高鳴っていた。

慈自身が、權との性交を楽しみにしている証拠だった。

「これ、学校に置いてあったのとは違う種類ですね。」

「そうみたいね…」

「あの種類しか見たことがないので、少し不安ですね。」

權は、袋から一箱取り出してじろじろと眺める。

そのスタイリッシュな見た目は、初めは避妊具と分からなかったほどだ。

「どうせなら、ここで一つ使い心地を試していきませんか？」

「だめ！だめだめっ！こんな場所で…」

慌てて否定するも、自らのお腹が切なそうにキュンキュンと疼くのを感じた。

慈は、權に誘われただけで喜んでしまう体へと変わってきていた。

（私、こんな事にも興奮してる…まるで、權くんを調教されてみたい…）

言葉だけで嬉しくなってしまう、それを嗜めるように心を強く持つ。

そうだ。

子供達を置いてきてまで、やらなければならぬ仕事があるんだ。仕事がある。仕事がある。佐倉慈。これは仕事なのよ…

——この後、滅茶苦茶青姦した。

第38話

權は、慈の体に手を添える。

それが、触れ合いの合図。

慈は基本的に流されやすい。

それが、断りたくないものだとしたら尚更のことだ。

「だめよ…早く、行かないきや…」

慈は、触れる權の手をやりわりと押し戻す。

權はそれを気にも留めず、その慈の手を取る。

「僕が、どうして2人だけに拘ったかわかりますか？」

「え？それは、ほかの子がいたら、守りながら行動しなきゃいけなくなつて、逆に危険だから…」

「それもそうです。でも、僕はいつばいえつちなことがしたくて2人を選びました。」

「えっ」

慈は、權の思惑を知って戦々恐々としていた。

これから、学校へ帰るまで、毎日、いっぱい、えっちなことを…!?

なんて、素晴らしい…いやいや。いかがわしいのだろうか。

「先生…僕、学校を出た時からずっと我慢してきました。もう、限界です…」
「き、昨日したじゃない…」

「でも、もうこんな…」

「あ…」

慈が手で確認すると、確かに權のそこは見事にカチカチに硬くなっていた。

このまま放っておくのは、とてもつらそうだ。

「…どうしても、したいの…?」

「はい…」

慈は、ズボンの上から硬くなったものを爪で優しくカリカリとなぞる。

下腹部から、突き抜けるような快感が流れた。

その刺激で權はまた強度を増していく。

「じゃあ…一回だけね?」

この頃には、慈もそわそわと落ち着きのない様子になってきた。

あとは、押せば倒れる状況だ。

言質を取った權は、慈に抱きついた。

薫る女の子の匂い。權は幸せな気分に含まれる。

「あらあら……寂しかったの？」

「……部員の皆と仲良くしているのを見ていたら、先生が遠くに行ってしまったような気がして……」

「……そんなことないわ。」

權を優しく抱き返す。

權は、慈が他の人と仲良くしているのを見て、嫉妬してしまったのだろう。

他の部員と仲良くしていても、權との距離が変わったわけではない。

「先生は、權くんが大好きよ。」

再び、慈は權を強く抱きしめる。

權へ向ける愛情。それは、家族愛と似ていると思った。

もし、子供が出来たら、こんな感じなのだろうか。

「ひゃっ!？」

慈が一人安宅な気持ちを感じていると、突然下半身に違和感を感じた。

權が、スカートの中へと手を侵入させてきたのだ。

「ちよつと、權くん……?」

しなやかな細い手が、下腹部に当たる。そして、くにくにと刺激させられた。

「あつ、あつ……あ……」

吐息と共に、嬌声が漏れる。

人に触られただけで、どうしてこんなに気持ちよくなってしまうんだろう……
とろり……

慈の下着の中からは、慈が性的に興奮した証拠が流れ落ちる。

もちろん、下着の一箇所、クロツチの部分はベタベタになっていた。

「今から、触る必要はなさそうですね。」

「……そうね……」

何もしていないうちから、期待で濡れている。

慈は、無意識に体が權を求めている事を悟る。

本当は、ここも触って欲しかった。

權とのことを思い出すだけで、勝手に濡れてしまう。

そのせいで、慈はまだ權に愛撫されたことがなかった。

權の手で、ぐちゅぐちゅにいじめられたらどうなってしまうんだろうか。

そう想像するだけで、気持ちよくなる。

…こんなことを考えるなんて、教師なのに、なんてえつちなんだろう…

「…挿入れますよ。」

「うん、きて…」

慈は、櫛の怒張を受け入れる。

ずぶ、ずぶ…

柔らかな肉で、櫛の憤りを優しく包み込む。

大量の潤滑液のおかげで、櫛の肉棒はすぐに全て中に収納された。

「あつ…す、すごい、もう奥まで…」

慈の膣は、もう櫛の形を覚え込んでいた。

櫛の肉棒が、子宮までの膣の長さどぴったりと一致している。

奥まで差し入れると、先っぽがちようど慈の子宮口へとこつんと当たる。

奥まで届いたのを感じた櫛は、ピストンを開始させた。

とん、とん、とん…

やさしく、ゆっくり。

慈の、体の中から癒していくように。

「はっ！はっ…いやだ…櫛くん…声、漏れちゃ…」

「聞かせてあげましょう。」

「やだ…」

權がこつんこつんと叩くと、それに合わせて慈が身を振る。

声を我慢しているのか、吐息混じりに小さな声で話しかける。

耳元で囁かれる言葉に、權はさらに興奮を加速させた。

「あつ、ちよつ…權く…やつ！」

そんな中、權が落ち着いていられるはずもなく。

ぎゆう、と慈の体を抱きしめ、さらに奥へ、奥へと腰を突き上げる。

「あつ…だ、だめ…權くん…」

慈も、權の手をぎゅつと掴む。

「はむ…ん、ちゅ…ちゅつ…」

そして、口を合わせる。

ああ…気持ち良い…美味しい…

ずっと、こうしていたい…

ぱんぱん！と激しい運動が行われた後。

慈は、權によって乱された服を整える。

「もう…こんなこと、してる場合じゃないのに…」

「でも、先生も楽しんでましたよね…?」

「そ、それとこれとは関係ありませんっ!」

「すみません…」

「もう…早く行きますよっ」

慈は、櫛を置いて車へと戻っていった。

櫛も慌てて後を追い、助手席へと座る。

珍しく、慈が櫛へと怒っていた。

照れ隠しも含めたものだったが。

…ところで、行くってどこへ?

第39話

運転席へ座り、ハンドルを握ったのは良かったが…

「えつと…どこへ行くこうかしら。」

慈はそのまま固まり、先のことを全く考えていないことを思い出した。

物資調達には、シヨツピングモールが最適か…

「食料の調達ならシヨツピングモールですね。後は、もしもの時のために薬局とか、武器のありそうな交番とか。車のガソリンも注ぎたいからガソリンスタンドにも寄っていただきたいですね。余裕があれば、学校のバリケードの補強のために本格的な工具とか、木材とかも欲しいです。」

「いっぱいあるわね…今回だけじゃ、全部回りきれないかも…」

「あ、それと…」

權はそこまで言っただけで言葉が詰まらせた。

その様子を見て、慈は權へと問いかける。

「なあに？どこか、行きたいところがある？」

「一度、家に帰ってみたいです。…もしかしたら、家族が…」

「…そうね。」

慈は少し考える。

でも、もし彼の家に、変わり果てた家族の姿があれば…

「佐倉先生は、家に帰らなくても良いんですか？」

「私は…一人暮らしたから…」

母のことも気になるが、実家は遠い。

家にもそんなに大切なものは置いていなかった。

確かに、替えの服とかは欲しいけど…

「じゃあ、まずは權くんのお家へ行きましょうか。どの辺りなの？」

「近くには…えっと。鞆河小学校がありますね。」

「わかったわ。」

鞆河小学校、か。ショッピングモールとは、別方向だな。

慈はアクセルを踏んだ。

權の家は、普通の一軒家だった。

新しくも古くもない、普通の家。

珍しいものといえば、ソーラーパネルが設置してあることくらいか。

表札には、しっかりと「宮本」と書かれている。

「宮本……この家であつてる？」

「はい。」

權は、懐かしむようにその家を見つめていた。

そして車から降り、慈へと話しかけた。

權は、家の確認へ1人で入るつもりだった。

「少し部屋を回ってくるので、待っていてください。」

「私も、一緒に行くわ。」

「……大丈夫です。少し、様子を見に行くだけです。」

「それでも。」

慈は、權の背中へと抱きついた。

權の姿に、どうしてか遠くへ行ってしまうような気がした。

そうでなくても、過去を思い出してしまったら權が悲しんでしまうかもしれない。

1人悲痛に心を痛める權を、隣で慰めてあげたかった。

「權くん。……私も、行かせて。」

「…わかりました。一緒に来てくれますか？」

「ええ、もちろん。」

鍵を庭の植木鉢の下から取り出した。

玄関を開けると、いつもと変わらない廊下が目に入った。

「ご両親は両方働いていたの？」

「はい。2人も、遅くまで…」

櫛と慈は、靴を脱いで廊下を進む。

物音はしない。何か潜んでいる、ということもなさそうだ。

リビング。

使用後の皿が重ねられたまま、机の上に置いてある。

洗い物が出たままだ。

和室。

机には、新聞が大きく広げられている。

仏壇には、お供え物がそのまま残っていた。

洗面所。

洗濯機の中にはまだ洗濯物が残っている。

それぞれの部屋を見て回るが、別に荒らされているだとか、血が飛び散っているだと

か、そういう事はない。

あの事件が起きた、2ヶ月前のままだった。

つまりそれは誰かが帰ってきた様子もないという事。

1階には、変わった様子は見られなかった。

そして、続いて2階。

寝室にトイレ、そして權の部屋。

わかっただけはいたが、変わったところはない。

希望がなくなつたわけではないが、増えたわけでもない。

ただ、変わらず安否不明なままなだけ。

權は懐かしい部屋へと足を踏み入れた。

本棚に並べられた本。敷かれたマット。

物が置かれてぐちゃつとした机の上。

すべて、いつも權が見ていた日常だった。

「ハイ、權くんのお部屋？」

帰れなくなつてしまった、日常。

それを見た權は、不覚にも込み上げてくるものを感じた。

「……おこ。」

權は、慈から顔が見えないように背を向ける。

偶然、その視界の先に映ったのは携帯電話。

まさかとは思うが、電波が来ていたりはしないだろうか。

電源ボタンを押すが、反応はない。充電が切れているようだ。

權は、部屋を出てブレーカーを落とし、壁に設置されたパネルを操作して自立運転に切り替える。

その様子を見ていた慈は、不思議そうに權へと尋ねる。

「何してるの？」

「ソーラーパネルの電力をオンにしています。これで、電気が来てなくても電化製品を使うことができます。」

「すごい！学校と同じように電気が使えるの？」

「コンセントに繋がるものなら。さすがにあそこまでの電力はないですけど……」

しかし、この家は電力を何も使わずに2ヶ月貯め続けていた。

蓄電器にはかなり貯まっているはずだ。

權はブレーカーを落としていないコンセントに充電器を差し込む。

独特の充電音が鳴り、スマホの電源が付いた。

ロック画面には、家族からの大量の着信が。

しかし、今は電波すら入ってきていない様子。

電波塔がやられたのか、電力が無くて電波を流せないのか。

あるいは、その両方か。

電波が復活した時のため、これは持っていない問題はないだろう。

携帯シヨップか電気屋で、ソーラーの発電機を見つければ、リスクなく使うことができるだろう。

少しだけ貯まった充電残量を確認した。

長押しして電源を切って、ポケットに突っ込む。

「車に戻りましょう。付き合ってくれてありがとうございます。」

「…もう良いの？ここで少し、休んで行ってもいいのよ。」

「大丈夫です。ついでに、うちにある缶詰なんかの保存食も持っていきましょう。」

「それは…」

慈は、言葉を詰まらせる。

その物言いは、もう家族の生存を諦めているようなものだったから。

「もしも、家族の方が戻られた時のために、残しておいたほうがいいわ。」

「…そうですね。」

權は、目を伏せて答えた。

こんな状況で、自分の家族がまだ生きているなんて甘い希望は持っていなかった。そんな事、あるわけがない。たまたま別の場所で生き残っていた人間が、他の生存者の家族だなんて事…

「止まってくださいー！」

櫂の鋭い声飛び、慈は慌ててブレーキを踏む。

そんなにスピードも出していなかったため、車はすぐに減速した。

大きな声を出した櫂に、慈は何か悪いことが起こったのかと想像した。

「なに？どうしたの…？」

「…あれ、見てください…！」

櫂が見つけたのは、「彼ら」のうちの、1匹。

元、小さな男の子。きっと、小学生くらいだ。

「あれは…！」

慈も、その個体を見て驚いた。

それが、首から見慣れないビニールに入れられた紙を下げていたからだ。

なめかわ小学校にいます。

たすけて下さい。
ごはんとお水さがしています。

はっけん☆

第40話

「助けに行きましょう。」

それを見た慈の判断は早かった。

即断即決。逡巡も見せずに言い切った。

「僕も異論ないです。」

あれから、もう2ヶ月近い。

これを描いた人間はもう全滅している可能性もあるが…

リスクがないなら、様子を見に行かない理由はない。

「鞆河小学校…か。一応母校なので詳しいですよ。」

「本当？それじゃあ、案内よろしくね。」

「任せてください。」

…それにしても、よく考えたものだ。

物資調達に出た人員がもし感染してしまっても、歩く広告塔になってくれるのだ。転んでもタダでは起きないというか、なんとというか。

やはり、教師がいて、そいつがこの方法を考えついたのだろうか。

権たちが見つけたのは、小学生の「彼ら」。

もし、教師が教え子に遠征を任せているのだとしたら：

胸糞悪い。相容れないな。

「まだ生きてるといいですが…」

「…え？」

アレが「彼ら」になつていてということとは、最低でも一度、遠征は失敗したのだろう。襲われていなくても、餓死している可能性も高い。

「あれがいつ書かれたかわからないので何とも言えませんが、この人たちがまだ生きてる可能性は低いと思います。」

「生きてる。きつと、生きてるわ。」

「…そうですね。」

権は、慈には悪いとは思いつつもそうは思えなかった。

この世界には、もう希望なんて残ってない。

車を走らせ、鞆河小学校へと数分もしないうちにたどり着く。最寄りの小学校というだけあって、かなり近い。

校門を抜け、「彼ら」が自由に歩き回っている校庭へと侵入する。

「いっね。行きましょ。」

荒くブレーキを踏んで、すぐにでも車を飛び出そうとする慈。

それを權が呼び止めて、まずは物資を車から降ろす。

今車の中にあるのは、權たちの食料として持つてきクッキーやブロック、ゼリー飲料などの栄養食品。

そしてコンビニから調達したお菓子が数袋。缶詰が20缶、ペットボトルが5、6本。生存者がいた場合に備えて、コンビニの袋に入れて全てを持ち出した。

「1つ1つ教室を回っていきましょ。」

校舎へと入り探索すると、1階だけあって「彼ら」も多かった。

そもそも、こんなところにいたら1日も持たないだろう。

となれば、上階の可能性が高い。

「足跡……」

階段にはいくつもの足跡が残されていた。

しかも、前後両方の向きのものだ。

つまり、一度外に出た後帰ってきている。

歩幅も向きもしっかりとしていて、意思を持っているように感じられた。

それも、どれも小さいものだ。まさに、小学生くらいの大きさか。

「きつと、この先ね。」

期待を高める慈に、權は不安を覚える。

これで、この先の人間が全滅していたら……

階を上がるたびに、防火扉を閉めていく。

近場にいた「彼ら」は、生存者がいた時のために窓から突き落とす。

これでかなり安全は確保できたはずだ。

続く足跡は、一番上の階の教室へと続いていた。

窓はどこから持ってきたのか、数枚の小さな板を木々で打ち付けて申し訳程度に補強

されていた。

中の様子を覗こうにも、擦りガラスになっていて中の様子はよく見えない。

「開けるわ。気をつけて。」

「ほぐ。」

慈は權へ一言声をかける。

權は一步下がり、教室の扉を油断なく見つめる。

そして、前にいた慈がくぼみに手をかけ、横開きの扉を開く。

「っ！」

とある教室の扉を開けると、椅子と机でバリケードが貼ってあった。

これはあからさまに、人為的なものだ。

「誰かいますか！」

防火扉を閉めてきたため、一応声を出しても大丈夫のはずだ。

教室全体に届くように声を張り上げる。

「いませんか？」

慈も声を張り上げるが、帰ってくるのは静寂のみ。

やはり、中で餓死してしまっているのだろうか。

櫛は真相を確かめるため、押しのけようとバリケードをガタガタ動かす。

「…だれですか？」

か細く、問いかける声が聞こえた。

櫛と慈は、素早く顔を見合わせた。

「わたしは佐倉慈。別の学校で先生をしているわ。この中にいるの？」

「…」

そこから、声は途絶えた。

慈は慌てて力づくで押しつけて、教室へ入った。瞬間、鼻に付く腐った臭い。すぐにも出て行ってしまいたいほど、ひどい臭い。

こんな場所にずっといるだけで病気になってしまいうさだ。

床には何本ものペットボトルやお菓子の袋などが散乱している。

他にも、死体がそのまま放置してありどう考えてもそこが臭いの発生源だった。

そんな屍の中に、何人かの、壁に寄りかかっている「人間」がいた。

「皆、人が来たぞ。」

「せんせえ?」

「助けが来たの?」

「あ…ひと…」

中には、今にも死にそうな顔をしている子供もいた。

皮膚も、唇もパサパサ。顔色も土のように悪い。

その子を心配しているのか、他の子と比べて元気な男子が状況を伝える。

「こいつ、何も食べれなくて、どんどん元気が無くなってるんです。」

「先生、早く水を…」

「そうね!」

慈は最後に口を動かした少女の口へペットボトルを近づける。

すると、少しずつこくこくと飲み始めた。

それに倣い、權も慈が相手になっている子とは違う生徒を介護し始める。自分で動ける子もいるようだが、栄養失調の症状が見られる子もいる。顔色の悪い子供を優先して飲料を口に含ませる。

「うん、そうそう。…ゆっくり飲んで。」

これだけ衰弱していれば、食べ物を食べるのだけってつらいだろう。まずは流動的なものを口に含ませるところからだ。

第41話

全員に、一通り水を飲ませ終わった。

教室内で生きていたのは、男子が1人、女子が3人。

男子の方がまだ比較的元気で、自分でペットボトルを持って水を飲んでいた。

權と慈がそれぞれ助けた女子2人は、かなり衰弱していた。

もう一人の女子も弱ってはいるものの、水を飲んだ事で動けるようになっていた。

「みんなの名前を教えてください？」

「わたし、木原みゆです。」

「みゆちゃん。よろしくね。私は…」

「さくらせんせえ？」

「そうよ。」

その女子…美優は、一番慈へと懐いていた。

少しツンツンした、クラスのリーダータイプだ。

「ここは、佐倉先生に任せた方が話が早い。

そう考えた權は、水を飲ませている子の相手をしながら会話を全て慈へと一任していた。

水を飲んで、たまに咳き込むため目が離せない。その度に、權は背中をさすつてやる。

「俺はたくや。」

続いて男子が。

「はなです。」

「るり……」

それから女子が答える。

花は慈が水を与えて、今も横で面倒を見ている。

瑠璃は、權が飲ませた水をいまでもチビチビと飲んでる。

「……おにーさんは……」

黙っていた權に、瑠璃が小さな声で問いかけた。

瑠璃を抱くように体を支えていた權は少し驚いた。

「オレは權。よろしくね、瑠璃ちゃん。」

「うん……」

名前を聞いた瑠璃は、またすこしずつ水を口に含む作業に戻った。

さつきから何度も口をつけているはずが、ペットボトルの水は全然減っていない。一気に飲むよりはこつちの方が良いだろう。

「みんな、ここから移動しない？ずっとこんな場所にいたら、病気になっちゃう…」
「やだ…」

一番に口を開いたのは、美優。

慈の手をぎゅつと握って、必死に抵抗している。

「みんなと、離れたくない…」

女の子は、大粒の涙をこぼし始めた。

先生や友達が目の前で死んでいくのは、この子達にはつらすぎる。

だが、ずっとこんな場所に、それも死体と一緒にしておくわけにはいかない。

「皆、あなたに生きて欲しいって思ってるわ。」

…ただ、この人数を一度に移動させるのは無理かもしれない。

できるとしても、慈の小さな車では2度に分ける必要がある。

「でも、いなくなっちゃったら、あきらくんが…」

「あきらくんって、誰？」

新しく出た登場人物に、慈は首をかしげる。

「今、外にご飯撮りに出かけてる。」

「お友達？」

「うん。」

「あきららは、帰ってこなかった先生に変わって何回も食べ物を取ってきてるんだ。」

美優の言葉を拓也が引き継ぐ。

話し口調から、友達のような関係だったのが伺える。

「まさか、1人で？」

「うん。1人の方が逃げやすいからって。あいつ、木登りがうまいから。」

木登り、ねえ…

櫛は話半分に聞いていた。

確かに、「彼ら」には知能が見られない。

高い場所に登れば、「彼ら」は見失うかもしれない。

「でも、何日も帰ってきてなくて…もしかしたら…」

「やめてよ！」

頼むから喧嘩しないでくれ…

真摯にそう思った。

この子は大きな声や喧嘩が苦手なようで、

「もう大丈夫よ。私たちがいるから。」

慈は、荒れる子供達を抱いて慰める。

慈はこういう事をさせたら右に出る者がいない。

「じゃあ、教室だけでも移動しましょう？隣の教室なら、あきらくんが帰ってきた時もわかるから。…ね？」

「…うん…」

美優は、泣きながらも慈の提案を了承した。

慈は、指で美優の涙を拭う。

そして立ち上がり、生徒たちを教室の外へと誘った。

あの腐った匂いは、權にとつてもつらいものだった。

慈が美優を説得してくれたことはとてもありがたかった。

「瑠璃ちゃん。立てる？」

「ん…」

權は、体に力の入らない瑠璃に気を使う。

瑠璃はやはり動くのは少しつらいようだった。

權がゆっくりと移動する瑠璃に付き添う事で、拠点の引越しは終了した。

隣の教室は多少荒らされているものの、さつきまでの部屋とは比べ物にならないほど

綺麗だ。

「…佐倉先生。今日は、ここでへ泊まっていきましょう。」

窓から空を見ると、もう夕日が落ちて真っ赤に染まっていた。

夕方と朝は、一番「彼ら」の移動が激しい時間だ。

昼夜に屋内へと入っていた「彼ら」が、移動のために道路へと溢れ出す。

そして、夜は車の運転が適さない。

ヘッドライトを付けければ、光に反応した「彼らが」わらわらと寄ってくる。

權たちならば襲われることはないが、道を塞がれると厄介だ。

つまり、車を走らせるなら昼が一番都合が良いのだ。

「私たち、今日ここに泊まってもいい？」

「うん！」

どうやら許可は得られたみたいだ。

權は、じつとこちらを見つめてきた瑠璃の頭を撫でる。

それを合図に、こちらに体を預ける瑠璃はうとうとし始めた。

「このまま寝てもいいから。しっかりと眠るんだよ。」

「…」

瑠璃は權に寄りかかったまま目を瞑り、規則正しい呼吸を始めた。

他の子達は慈と何やら話している。權は、一番大人しい子で精一杯だ。

先生って職業は凄いな、と感心した。

第42話

「気持ちよさそうに眠ってますね。」

「そうね…間に合って、よかったわね。」

「はい。」

あれだけ騒がしかった子供達は、すやすやと気持ちよさそうに寝ていた。

權も、ずっと瑠璃の背もたれになっているわけにもいかず、ある程度してから起こさないように床に横たえる。

床に直接寝かせておくのはかわいそうだが、こんな場所に布団があるはずもなく。

「この子たち、ずっとここに置いておくわけにはいきませんよね。」

「でも、美優ちゃん、ここから離れたくはなさそうね。晶くんが戻ってくるなら話は別だけど…」

慈は一度話を止める。

本当に晶が生きていたとして、仲間がいなくなっていたらどう思うだろう。

慈には、まだ見ぬ生徒をどうしても見捨てることができなかつた。そんな様子を察した權は、ここへと残る事を提案する。

「何日かここで様子を見て、無理だと思つたら学校へ誘いましょう。」

「それだと、由紀ちゃん達に心配をかけちゃわないかしら……」

「……そうですね。一度帰つて、説明しますか？」

「電話がないのは、不便なものね……」

鞆河から巡ヶ丘まで大して距離があるわけではないが、それでもこの世界で移動するのは大変だ。

「手ぶらで帰るよりかは、明日朝一でモールにだけでも寄つて、服や食べ物を持って帰りましょう。」

「……わかりました。その後一度学校へ戻り、生存者の報告。そして事情を説明して、もう一度ここへ戻つて晶くんを待つ。という事で良いですか？」

「少し遠回りになつてしまうけど……權くんはそれで良い？」

「はい。僕も、この子供達を見捨てるつもりはないので。」

だが、それでもずつとこの場所にとどまっているわけにはいかない。

慈の生徒は、この子供達だけではないのだ。

「あと一週間待つて、それでも来なければ諦めてもらいましょう。」

目安は、一週間。

それでも帰って来なければ、書き置きを残して巡ヶ丘へと連れ帰る。

「先生。汗を拭きましよう。」

一通り話が終わった後。

櫛は、ペットボトルに入った水をタオルに垂らし、濡れタオルへと変えた。

貴重な飲料水をこんなことに使えるのも珍しい。

「…そんなこと言つて、えっちなこと、するつもりでしょ？」

「…」

櫛は凶星を突かれ、何も言えなくなつてしまった。

慈には、体を拭くことに漬け込んでいちゃいちゃしようとしている事などお見通しだった。

「でも、体は拭きたいですよ？」

「それはそうだけど…」

職員用のシャワーが日常になつていた慈にとって、1日でも体を洗えないのは苦痛だ。

正直、今日のうちに確かに体を拭いておくだけでもしておきたい。

「じゃあ、服脱いでください。僕が拭いてあげます。」

「…せめて、別の部屋でやらない？この子達が、起きちゃう…」

「起こしちゃうような事、するつもりなんですか？」

「…ばか…」

慈が珍しく、拗ねたように唇を尖らせる。

懼は心臓を撃ち抜かれた。

「脱いだわよ…」

教室を移り、ワンピースを脱いで綺麗な下着姿になった慈。

左腕に巻かれた包帯がなければ、下着雑誌のモデルのようだ。

いつ見ても、抜群のスタイルをしている。

「先生、全部脱ぐんですよ。」

「体を拭くんでしょ？」

「はい。だから、全部脱ぐんです。」

「…」

慈は不本意ながらも、背中に手を回してブラジャーを外す。

ぼよん！と、わがままなおっぱいがブラジャーからこぼれ落ちた。

そんな、男にとっては凶器とも呼べる夕張メロンに、櫛の視線は釘付けだ。慈のその胸は、おおきな焼きマシユマロのような柔らかさと弾力を持つ。

「…そんなに見られていると、恥ずかしいから…」

「何度も見ているんですから、今更ですよ？」

何度見ても慣れない櫛が言うことでもないが。

櫛は、慈の裸体を見る度に芸術品のようだと言ったと心の中で称賛していた。

「でも、やっぱり恥ずかしいんだもん…」

今日初めての、もん、いただきました。

櫛の前では、子供っぽい口調も見せる慈。

それは、気持ちを許しているからなのだろうか。

櫛が慈の言動に1人悶えていると、慈は腰に手をかけ、ショーツを下ろす。

腰から始まる綺麗な鼠蹊部のライン。そしてその奥から、桃色の毛が現れる。

これが桃源郷か…

1時間でも慈の裸体を観察したい櫛だったが、そんな気持ちをぐつとこらえてタオルを持って慈へと近づく。

「拭くので、少し体を楽にしてください。」

「…櫛くん。何だか、目がえつちだよ。変な場所触るつもりじゃない？」

「そのつもりですが、それも飽くまでも汗を拭くためで……」

「隣に、小学生がいるんだからね？いつもとは、違うんだよ？」

「大丈夫です、ぐっすり寝てますよ。そう簡単に起きません。」

「それ、大丈夫じゃないよ……」

呆れ顔の慈に、權はタオルを背中に当て、優しく擦る。

しゅっ、しゅっ……

慈の白い肌を、濡れタオルが上下する。

權は、真面目に慈の体を隅々まで拭き取った。

第43話

慈はもう温度を感じなくなってしまうている。

それに伴い汗をかくこともなくなっているため、そこまで汚れているということはないのだが…

權は、慈が気持ちよさそうに体を預けてくれている慈に、いつものお礼にと精一杯奉仕した。

「…」

「…」

しばらく、無言の時間が続く。

肌と布の擦れる音だけが聞こえていた。

慈は、じつとりと濡れるタオルに心地良きすら感じていた。

權は、慈の腕へとタオルを滑らせる。

怪力を繰り出せるとは思えない、白く細い腕だ。

半分侵食されてしまっても、弾力はしつかりと残っている。ちやうど、噛みつきやすい形をしている。甘噛みしたい。

緩やかなカーブを描く、背中の一本線。

背筋の筋の通りに、タオルを上下させる。

突然スーツと指を滑らして驚かせたい。

手に収まりきらない、おおきなおっぱい。

あまりにも大きく、一度に拭くことができないので、何度も往復させる。

その度にぼよんぼよんと震える。もっちり揉み込みたい。

くびれのラインが綺麗なおなか。

おなかフェチな權の、理想の形。

キュッとひきしまった中に、なだらかに出ている腹筋。

下腹部へと続く鼠蹊部のライン。

傷つけてしまわないよう、優しく撫でるように。

歴史的価値のある彫像を扱うように、慈の体を丹念に拭う。

權にとっては、慈はどんな芸術作品にも負けていない。

「あの子たち。子供だけになって、どのくらいの時間が経ったのかしら。」

「長くて1ヶ月くらい、ですかね？本人たちに聞いても時間感覚なんてもうないでしょ

うけど。」

「…そうよね。そんな長い間、ずっと助けを待ってたのね…」

あそこには、大人だけではなく子供の死体も残っていた。

きつと、飢餓に耐えきれなかったのだろう。

先に「彼ら」の仲間となるのと、長い時間をかけて苦しみの果てに餓死すること。

どちらが幸せだったんだろう。

「数人でも助けられたのは、幸運でした。」

「…そう、なのかな…」

權の言葉に、慈はいつもの悪い癖が出てしまう。

「私、全員助けてあげられなかった…やっぱり、生きられなかった子達には、恨まれているのかな…」

慈の瞳から、涙が溢れ落ちた。

人を助けたはずなのに、自己嫌悪に陥ってしまう。

慈は、そんな人間だった。

「そんなわけありませんよ。」

權は、ポロポロと涙を零す慈を抱きしめた。

そして、子供をあやすようにトントンと叩く。

「感謝しているに決まっています。友達を救ってくれてありがとうございます、って。」
「そうかな…」

「そうですよ。「彼ら」だって、意識が残っていればきつと友達を殺したりしたくないはずです。」

「ほんとう?」

「はい。」

權の胸に顔を埋め、弱音をこぼす。

生徒の前では、立派に大人を演じ続ける慈。

弱い部分は、全て權へと向いていた。

「…權くん…」

「はい。」

きゅつ、と、慈の冷たい手が權の服を掴む。

機は、その手を上から包み込んだ。

先生だって、人間だ。つらいときは、泣きたいときだってある。

權は、慈が落ち着くまでずっと隣で慰め続けた。

あさから♡

第44話

夜が終わり、明るくなって来た早朝。

2人は、慈の愛車であるミニクーパーへと戻って来ていた。

小学校で生存していた生徒たちは、水分を取らせてから寝かせている。

今回、生徒たちは残して物資調達へと行くつもりだ。それでなくとも小さな車なのだ。

衰弱している生徒たちを押し込み、連れ回すのは良くないと判断した。

「先生。ご飯飲みますよ。」

「はいはい。」

権は朝食として持って来た、ゼリー飲料を口へ含む。

そして、そのまま権は慈の口へと吸い付いた。

「はあむ…♡ん…んっ♡…んずずずっ…♡」

「ちゅ♡…ちゅぶぶつ♡…じゆる…んぶつ…」

口の中で相手の唾液を混ぜ込み、嚙下する。

すると生暖かいドロドロした味のないゼリーは、最高の美食となる。

これが、2人が唯一食べ物を美味しいと感じることのできる食べ方だった。

口の中からゼリーが全て無くなってからも、2人は口付けを続ける。

それは、どう見ても食事というよりは激しい口づけ。

食事よりも接吻の方が中心となっているのは誰の目にも明らかだった。

互いに、食べるように口をもぐもぐと動かす。

「はむ…ちゅ♡…んちゅ…んつ…ぶはつ…あ…」

權は、未だ口内を舐め回す慈の方をつかみ、優しく引き離す。

この食べ方は、意外なことに慈の方が夢中になっていた。

權が離れた瞬間、この世の地獄を見たかのような悲しい顔になった。

慈は權へと伸ばしかけた手に気付き、少し頬を染めた。

權は再びゼリー飲料を口へと絞り出し、慈を迎えた。

權の口から、慈の口へ。そしてまた權の口へ。

「んちゅ…♡んぶつ…んぶつ…ちゆる…じゆる…♡」

「んう…んつ♡ちゅ…♡はぶ…はむ…はぶつ…ちゅずつ…」

舌を使い、互いに絡め合い。2人の繋がった口内で、唾液とゼリーをくちゆくちゆ混ぜ合わせる。

生暖かかったゼリーは、少しずつ權たちの体温へと近づいて行く。

そして、温度が全く一緒になった頃、2人はゆっくりとゼリーを喉の奥へ流し込む。こく、こく、と小さく喉が動く。

2人で食事をしているだけで、幸せな気分になる。

口の中からゼリーがなくなれば、今度は唾液を飲み込む。

情熱的なキスを続けて、呼吸の苦しくなった權が離す。

口と口との間に、つう、と銀の橋が伝う。

今度離れた慈の顔は、とろんと夢見心地だった。

「先生。……ここで一回していきませんか。」

「…なにを？」

慈は、權の言わんとする事をなんとなく察していた。が、わざと惚ける。

權は、隣に座る慈の耳へと口を寄せる。

「えっちな事です。」

「…♡」

櫛に囁かれ、慈も興奮してしまう。

食事によって慈もえつちな気分になって来ていた。

くちゅ…

櫛が慈の下着に手を伸ばすと、ほんのりと湿っている。

「佐倉先生の（こ）こ、期待してるみたいですね。」

「ちよつと…やだ…♡」

櫛はクロツチの部分へと指を置いたまま、こすこすと上下に擦る。

それだけで愛液がじわじわと溢れてくる。

慈は、完全にスイツチが入ってしまう。

「あつ♡あつ♡櫛くん…♡」

（そのまま指入れて欲しい…♡くちゅくちゅ♡ってして欲しい…♡）

慈は、櫛の指が自分の膣の中へ差し入れられるのを想像した。

挿入ってきた櫛くん指は、そのまま気持ち良いところをかき回されるのだ。

私が、やめてっってお願ひしてもやめてくれなくて。

ずっと気持ち良いのが続いて、頭がおかしくなるくらいに気持ちよくなって…

指でそこ…ぐちゅぐちゅ♡ってかき回して欲しいよ…♡絶対気持ち良いよ♡

「はあ…はあ…」

体の奥からは、期待で愛液がどんどん溢れてくる。

權は、濡れて来た慈の下着を脱がせる。

慈はこれで前戯は終わりだと悟った。

(やだ…♡いっぱい触って欲しっ♡指でいじめてっ♡)

それでも、慈は言えなかった。

自分からおねだりなんて、慈にはハードルが高かった。

「いっぱい溢れて来てますよ。」

權のいう通り、期待に濡れる慈の奥からはとめどなく液が流れ落ちる。

それが、てらてらと權の手を濡らしている。

「ゴム、しなぎや…」

ズボンをずらした權は、慈の腰へと手を当てた。

慈は、そのまま挿入しようとする權を嗜め、車の中からコンドームを取り出す。

これだけは譲れない。年長者の勤めだ。

勃起した權のおちんちんに、コンドームを被せる。

くるくると装着すると窮屈そうながらもゴムの中へと収まった。

「佐倉先生…挿入れますね…」

「うん…きて、權くん…」

そして、慈の体へと自らの肉棒を押し付けた。

權に触られただけで、お腹の底がきゅんきゅんと悦ぶ。

愛液が垂れ、慈の体が勝手にセックスの準備を始めていた。

「あつ、あつ、あつ♡」

押し当てられた權が、ずぶぶ、と挿入ってくる。

閉じられている慈の体を押し広げて、奥へ奥へ。

慈が出した愛液で、權は抵抗なく最奥へと辿り着いた。

慈は、挿入ってきた權をきゅうう、と締め付ける。

「そ、そこ……っ♡權くんが、奥まで来てるの、わかるよ……♡」

權のが、慈の子宮口へこっん、と当たる感覚。

前回と違い、その押し上げられる感覚が気持ち良い。

腰の奥から、ずん！と気持ち良いのが溢れてくる。

「權くん……そこ、気持ち良い……♡」

「先生のなかも……きゅんきゅんしてて、気持ち良いです……」

昨日の夜、お預けした分、2人はぐちゅぐちゅと腰をぶつけ合う。

慈は、下の口で權をぱっくりと啜えこんで擦り付ける。

權の体を抱いて固定する。そして気持ち良い奥に当てて、ぐりぐりと腰を振る。

「あつ♡あつ♡あゝ♡」

權は、エッチなスイッチの入ってしまった慈にされるがまだまだ。腰を擦り付けて、一番の気持ち良いを探求する。

もう少少で、絶頂へと達してしまいうさだ。

「佐倉先生…っ！刺激、強すぎて…」

「うん…出していいよ…♡いっぱい、射精して♡」

達しそうなのは權も同じだったようだ。

快樂を求める慈の動きに、權も気持ちよくなっていた。

「も、イキます…っ…う、あ…」

「んっ♡私も…一緒に…♡」

びゅ♡びゅぶっ♡びゆるるるっ♡びゅびゅびゅっ♡

慈に誘われるがままに、權は慈の中で勢いよく果てた。

權は慈の手を探し出して、強く握りしめる。

同時に、慈も体がじんわりと暖かくなるような甘い絶頂を味わった。

射精が終わってから慈の中で、どくどく、と続く痙攣。

慈は、膣の中で權が暴れているのを感じ取っていた。

（權くん、權くん。ビクビクしてて、可愛い…♡）

慈は絶頂直後のふわふわと浮いているような意識の中、
腕の中で、快感に震える權を抱きしめる。權のことだけを
考えていた。

今だけはずっと、こうしていたかった。

第45話

ずるん。

射精の終わった權が、慈の膺からゆっくりと引き抜かれた。

慈は、体の中から大切なものが抜けていったかのような感覚を覚えた。

抜きたくない、と、そう思ってしまった。

權を失った慈は、呼吸をしているかのようにパクパクと開閉を繰り返す。

その中から、とろりと白濁液が流れ落ちた。

權はコンドームを外して、先を結んで中に精液を閉じ込める。

何度もやった作業で、その動作も手馴れたものだ。

どうやらコンドームは破れていないため、全て慈の愛液なのだろう。

權に、女の子の一番弱いところを突かれて出てきた本気汁が今更姿を現していた。

慈のおまんこからは、愛液がとどまるところを知らなかった。

行為は終わったというのに、物欲しそうに奥から垂れ落ちる。

(まだシタといって、權くんにはバレちゃう…)

いくら拭いても、また奥から垂れ落ちる愛液。

慈が二回戦を望んでいるのは、誰の目にも明らかだ。

權も、慈が結合部を綺麗にしようと悪戦苦闘している事に気がついた。

「佐倉先生って、意外と好きですか？」

「そんな事ないもん…普通だよ…？」

「普通の人はこんなにあっちな汗出しませんよ。」

慈は、權の言葉責めとも取れるその言葉で一人興奮していた。

心臓を刺されたような、締め付けられるような、掴まれたような。

慈がこれまで体験したことがない、表現が難しい感覚。

それと同時に、お腹の底からキュンキュンと切なさが溢れてくる。

それこそ、言葉だけで達してしまいそうなほどだった。

これが恋？愛？それとも、えっちな気分になっただけ？

それら全てが初めての慈にとって、とても難しい問題だ。

男は一度絶頂に達すると一時的にだが満足する。

が、反対に女はさらに興奮が高まることがある。

特に、今回の慈のように甘イキだけでは不満が溜まってしまふこともある。

慈は今、興奮させるだけさせられて焦らされているような状態だった。

「佐倉先生。すこし、触りますね。」

「えっ? えっ?」

權は、慈の濡れそぼったその場所を確認するため手を伸ばした。

慈は、權の手が自分へあてがわれた事により、びくっ!と大きく震える。

まだ諦めきれしていない、ぐちゅぐちゅかき回してくれるかも、と淡い期待を抱く。

權の手は、しかし慈の期待に反して未だ触ったことのないクリトリスへと当たる。

その瞬間、慈は腰にビリリ!と電撃が走ったかのような感覚を覚えた。

そして、反射的に腰を引きつらせて大きく飛び退いた。

触ったことのない場所に、感じたことのない感覚。

(何?今の…)

慈は、自分の体に起こった謎の現象に目を白黒させる。

權の触る自分のおまんこから目が離せなくなっていた。

無意識に、自分の腰を權の手に押し当てる。

それはまるで、もともつと、とおねだりしているようだった。

「あ…あ…あつ! ああつ!」

自分でも知らない気持ちいいところを、權に探られる。

初めて味わう感覚に、慈はもう満身創痍。

腰もガクガクと力が抜け、もう立っているだけでやつとだった。

慈は無意識に手を自分の口へともってきて、指の第二関節に噛み付く。しかし、どれだけ強く噛み付いても、感染の影響で痛みはない。

このままでは、意識が飛んで行ってしまいそうだった。

慈の、そんなあられもない姿を見て、權の息子も元気を取り戻していた。

いや、むしろ先ほどよりも大きくなっているような気さえした。

（權くんの、大きくなってる……また、してくれるのかな……）

気持ち良い場所にぶつけて、また何度も何度も気持ちよくなりたい。

慈の頭の中は、もう快樂のことしかなかった。

「權くん……もう一回、できるわよね……？」

もつと、權と一緒に気持ちよくなりたい。気持ちよくしてあげたい。

そう考えると、もう止まらない。

今の慈は、催淫にでもかかっているかのようにだった。

第46話

慈は、櫂の大きくなった肉棒から目が離せない。

また、あの棒で体の中をつつかれたい。

もつと強く、激しくいじめられたい。

慈は、否定できないほどにえっちで、そしてMだった。

「櫂くん…もう一回、できるわよね…？」

「は、はい…」

それは、魔法の言葉だった。

それを合図に、2人は止まれなくなってしまう。

ずにゆにゆにゆ…♡

ぬとぬとの慈のおまんこは、もう一度櫂を啜え込んだ。

慈は、挿入ってきた櫂を絶対に離すまいと膣圧を強める。

その窮屈さは、先程何度も押し広げられたとは思えないほどだ。

「ねえ、權くん。私のなか…どんな感じ…？」

慈の膣肉が、無意識にきゆうう、と引き締まる。

さらつと聞いた慈だったが、權の回答をとても気にしていた。

「柔らかくて、ねつとりしてて、すごく気持ち良いです…それに、すごく、きついです…っ」

「気持ち良いんだ…こうしたら、どうかな…？」

ぐちゅ♡ぐちゅちゅっ♡

「あつあつ…あ…先生…待ってください…」

慈は、ゆつくりとした動作で腰を前後に動かし始める。

權の肉棒は、慈の膣内にあるたくさんのひだひだにずるとしごかれる。

權は、そのあまりの気持ち良さにぞぞぞぞ、と背筋に寒気が走った。

「あの、さつきイッたばかりなので、敏感で…」

「ごめん、ごめんね…止まれないの…」

初めは、權を悦ばせたいと思っていた。

が、今は逆に自分が權に気持ちよくさせられてしまっている。

こん、こん、と、控えめに子宮口をノックする權のおちんちん。

その度に、ビリビリと腰が抜けそうなくらい気持ち良いのが溢れてくる。

「權くん……ちゅー……しよ……」

慈はもう恥も自制も忘れてしまっていた。

子供のように、慈は權へとおねだりする。

その可愛さたるや、そんなじよそこのアイドルが裸足で逃げ出して行くほど。実際、今の慈に勝てる人類なんてこの世に存在しない。するはずがない。

「はむ……♡」

心臓を射抜かれたまま固まってしまった權。

そんな權を見て、慈は權の無防備な唇へと襲いかかった。

まずは、唇ではむはむと甘噛みする。

それに飽きたら、小さな舌がチロチロと權の唇を舐め回す。

最後には、口内へと侵入してきてしまう。

「はむ♡あむ♡はあん……♡んっ♡」

口の中に入ってから、歯茎を辿り、内頬をしゃぶる。

歯をこじ開け、舌を絡めてから、何度も何度も握手を求める。

權の舌を、嬲るように舐め回す。

「じゅるるるっ♡じゅぶっ♡ちゅう♡ちゅるるっ♡」

舌から嚙り取った唾液を、口の中でしっかりと味わって？み下す。

權の口の中の全てを味わおうとする慈。

慈は、それはそれは幸せそうに權の唇を貪る。

もちろん、その間も下の口でピストン運動を続けながら、だ。

(すき……♡すき……♡すき……♡すき……♡すき……♡)

心の底で叫ぶ、恥ずかしくて口に出せない本音。

思う度に、どんどんどんどん、好きになる。愛おしくなる。気持ちよくなる。

「も、いつちやう……あぁっ♡あぁっ♡あぁっ♡」

瞬間、ぞわぞわと体全体の性感が高まる。…絶頂が近いのだ。

理解した瞬間、慈の腰が勝手に激しく動いた。

まるで、慈自身が絶頂を欲しているかのように。

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

「せ、せんせ……少し、手加減してください……!」

急に早くなったピストンに、權が慈へと泣きつく。

その顔はとても他の女の子には見せられない……いや、見せたくないものだった。

「あ♡あ♡あ♡……イ……っ!!」

びゅるるっ♡びゅるるるっ♡びゅーびゅー♡びゅっ♡

びくびくっ♡びくん♡

2人は、コンマ数秒も乱れることなく同時に絶頂を迎えた。

權は、精液溜まりへの抽送中、ずっと慈を抱きしめていた。

時折ひくん！と跳ねる權の体を、自身も絶頂の余韻で力が入らない慈はよしよしとなだめる。

余韻に浸り抱き合う2人は、このまま数分間、繋がったままだった。

「…あの、佐倉先生…？」

「な、なあに…？」

くにゆ、くにゆ…

慈は、權の肉棒を優しく手で包み込み、揉みしだく。

半勃ちで柔らかかった權の肉棒は、むくむくと起きあがる。

「もうすこし、その…クールタイムを…」

「もう一回、もう一回だけだから…」

泣きそうに懇願する慈に、權は許可を出さざるを得なかった。

了承後の、慈のにつこり笑顔には勝てなかった。勝てるはずなかった。

2人の長い行為が終わった後、車を走らせる。

慈は、自分がとても恥ずかしいことをしてしまった自覚があった。

あんなにはしたなく、自分から何度もおねだりをして。

あの時の自分は、どうかしていた。こんなはずではなかったのに。

先程の行為のことをどうしても意識してか、会話が続くことはなく、車内には気まずい空気が流れていた。

運転席で、慈は自分のとった行動を振り返って恥ずかしがってばかりいた。

權はそんな慈の様子を盗み見ながら、車窓の景色を楽しんでいる。

鞆河小学校は、巡ヶ丘学院から見て、シヨツピングモールとは真逆の場所に位置している。

事故が多く通れない道があるため、迂回が多発し今回は少し長めのドライブとなった。

このあたりで一番大きな店といえばここだ。

どちらにしろ、モールには寄らなければならぬ。

それにこのモールは、ランドル・コーポレーションの傘下。

もしかしたら、何か手がかりがつかめるかもしれない。

モールが見え、そろそろ車を停める場所を決めようかと言う頃。

そろそろ落ち着きを見せてきた慈。

「！權くん、あれ……！」

何かを見つけたユスの慈は、慌てて後部座席で窓の外を眺めていた權を呼ぶ。

慈はフロントガラス越しに、モールから出てきたのだと思われる少女を発見した。

少女は動いている車を見つけ驚いた後、大きく手を振る。

まるで、無人島でようやく船が通りかかった時の遭難者のようだ。

そんなにお袈裟に動かなくてもしつかり見えている。

「生きてる人…いた…！」

そんな生存者の彼女の瞳から、涙が溢れ落ちる。

余程、生きている人間に出会ったのが嬉しかったのだろう。

こちらは純粹な人間とは言い切れないが…

初めての遠征で生存者をこんなに見つけることができるなんて、なんて運が良いのだろうか。

慈は、生存者がいることを純粹に喜んだ。

「…」

対して權は、少し複雑そうな顔をしていた。

瑠璃たちのような幼い子供はまだ良い。

が、制服を見るに彼女は巡ヶ丘の生徒。

つまり、相手は高校生。

權たちを受け入れてもらえるかどうかは難しいかもしれないからだ。

きゆうしゆつ

第47話

車に乗っていた權たちを見るなり、縋り付いてきた女生徒。

清潔感のある、ハーファップに纏めた肩までつくつかないかの茶色い髪。
どこかハツラツで活発そうな印象を受ける、ワインレッドの瞳。

そんな少女は過呼吸になりそうになりながら、何かを伝えたい様子。

「あつ、ああ、あああの！な、中にも、と、とと友達がいて……！」

「慌てなくて大丈夫。ちよつと落ち着きましょ……？」

慈が、慌てすぎて口の回らない女生徒を宥める。

彼女はこくこくと頷き、荒くなってしまっている呼吸を整える。

その間に、權と慈はその彼女を観察していた。

着ているのは巡ヶ丘の制服だ。

服は汚れてしまっているが、彼女自身が「彼ら」に傷つけられた様子はない。

状況から考えるに、恐らく放課後に事件に巻き込まれたのだろう。そしてそのまま制服を着続けている。

彼女は小学校にいた生存者とは違い、どうやらこれまで文化的な生活は送っていたようだ。

あれから2ヶ月ほど経つが、あからさまに寝れている様子はない。

本人の前で言葉にすることはできないが、酷く臭つたり、不潔な印象は受けない。食品に加えて、清い水の入手経路もありそうだ。

「もう、大丈夫です。ありがとうございます。」

慈に背中をポンポンと叩かれ、その女生徒は人目もはばからず泣き出してしまった。

しかし、気合いで涙を止めて、なんとかまともに話すことができるようになった。

足は、生存者を見つけて安堵したのか笑ってしまっただけで立ってなくなってしまうことが

：

「それで。お友達がいるのよね？」

「はい。ずっとモールの上に2人で住んでて…」

そこで、彼女はふと言葉を止める。

そして、慈の顔と姿をじっくりと眺めて一言。

「…もしかして先生ですか？」

慈の授業を受けていなくとも、彼女の事が印象に残っている生徒は多い。

特に、慈はその見た目や性格から生徒から人気が高い。

直接あつたり話したりしていなくとも、慈の事を知っていても不思議ではなかった。

「ええ、そうよ。私は佐倉慈。確かに、巡ヶ丘学院で教師をしていたわ。こっちはその生徒の……」

「宮本權です。」

「やっぱり！美人な先生だなんて、記憶に残ってて！」

「そんな、美人だなんて……」

圭に褒められた慈が照れる。

權は圭のその言葉に心の中で全面肯定した。

その後、今の印象は美人でも、後々可愛い系だと気が付くと確信した。

「あ、私は同じく巡ヶ丘の生徒で、祠堂圭です。」

この場にいる者、そしてその友達である生存者が全員巡ヶ丘学院高校の関係者とは何かの因果のようなものを感じる。

巡ヶ丘の制服には何かの加護でも込もっているのだろうか。

「それで。あなたは俺たちにどうして欲しいんですか？」

「どうして、って……」

「あ、いや。少し言葉を選び間違えた。えっと、俺たちは自衛隊でも警察でもないから、できる事には限りがあるっていうか…」

本題に入った權から責められているとでも思ったのか、圭はたじろいだ。

權は慌てて否定して、しかし思うように言葉が出てこなかった。

「つまり、生活の援助をして欲しいだけなのか、一緒に行きたいのか、って事よね？」

「あー…そんな感じですよ。」

「あ、えっと…」

權の言葉を、慈が引き継ぐ。

そんな質問に、圭はあからさまに戸惑う。

權たちがそんな質問をしてくるとは思っていなかったのだ。

「それは、友達にも聞いてみないと…でも、私自身は一緒に行きたいと…思ってます…」

後半になり尻すぼみになり、声の大きさがどんどん下がっていく。

權たちに見れば生存者を迎えるのは大歓迎だ。が、いくつか問題がある。

その友達とやらが、今まで生活してきた場所を捨て、学校まで移動する決断をするのか。

食事が美味しい。防火扉を閉めていて安全。シャワーがある。布団がある。

これだけの利点を捨てるとは思わないが、このモールの方が物資は多いし、移動のり

スクもある。

どれだけのリターンがあっても、拠点を移すのはリスクを冒すことに他ならない。

2人を連れて帰ることにより、車に「彼ら」を引きつけてしまわないか。

車ならば、「彼ら」いくら目をつけられてもスピードで振り切ることができる。

だが、2人が「彼ら」を引きつけてしまい道路に「彼ら」が溢れかえってしまつてはどうすることもできない。

權たちは安全だろうが、生存者の2人は無事では済まないだろう。

慈の愛車であるところのミニクーパーS。

もともと小さな車なこともあり、定員である4人が乗れば荷物はトランクに入れるしかない。

そのトランクもとても小さいこともあり、大量に持ち帰ることはできそうにない。

思った量の物資は調達できないだろう。

そもそも、權と慈の状態を受け入れられるのか。

半ゾンビな2人と生活するには、それなりのリスクが伴う。

飛沫感染を防ぐため、普段から互いにマスクをするのが好ましい。

シャワーは決まった場所、それぞれ別々の時間に。

食事には細心の注意を払わなければならない。

2人が食事を作ることはできない。洗い物は2つに分ける。そして2人は決まった食器を使う。

ぱつと思いつくだけでこれだけある。特に、最後は重要な問題だ。

これをいつ伝えるかによっても、2人の運命を変えてしまうことになるだろう。

「それは、一度会ってみてから話会いましょう?」

「そうですね…わかりました、案内します!」

意気揚々と歩き出そうとする圭。

權は、そんな彼女を呼び止める。

「あ、ちよつと待って。」

「へ?」

固まった圭をそのままに、權は慈へと話を振る。

「人数が多いと、「彼ら」によく狙われるようになります。物資調達と生存者の保護、ど

ちらから行きます?」

「…そのお友達を助けてあげましょ。物資はいつでもいいけれど…」

「人は死んでしまつたらおしまいですからね。わかりました。」

本当は守りながら行うのが面倒な物資調達から行ってしまいたかったが、權にとつ

て、慈の決めたことは絶対。

權は異論なく納得した。

番外：オナニーの日♡

權くんは、おち…ん、ちん…を、私の頬に擦り付ける。

えっちな匂いが鼻に香り、ぷにぷにと突かれ続ける。

「んう…權くん…權くん…」

こんなに近くで見せられて、舐めたいし、触りたい…

けど、それはできない。

この權くんは、私が頭の中で思い描いている想像だから。

本当の權くんは、見回りをしてきている。

頭の中の權くんは、おちんちんをズボンの中にしまっってしまった。

私がしたいのを知っているくせに、意地悪してるんだ…

（これはお預けです。）

「ああ…權くん…やだよ…」

本当に欲しいのに、お預けなんて…ひどい…

私の中からは、ドロドロとえっちなお汗が溢れてきていた。触ってみると、ねっとりしていて強い粘り気を持っている。手がぬとぬとになるくらいいっぱい出てきている。

(一人でできたら手伝ってあげます。)

「ああつ…そんなあ…」

(だから、頑張って自分で弄ってください。)

「ほんとは懼くんに触って欲しいのにい…」

懼くんと会うまでは、触った事のなかった自分のあそこ。

そこに、私は躊躇いなく手を伸ばし、右手の中指を穴の中に入れる。

そして上の方、ザラザラするところに指を当てる。

ぐちゅ♡ぐちゅ♡ぐちゅ♡♡

指をこまねくように折り曲げ、擦る。

お汗がいっぱい出てるから、ぐちゅぐちゅって音が出ちゃう…

懼くんに見られながらするの、気持ち良い。気持ち良いよお…

(気持ち良いですか?)

「うん…気持ち良い…」

(どこが気持ち良いんですか?)

「どこ、つて…その、あそこ、が…」

(あそこつてどこですか?)

「お…まん…?…」

(おまんこ気持ち良いんですか?)

「おま…んこ、気持ち良い…」

ぐぶ♡ぐぶ♡ぐぶ♡

(えっちな音、いっぱい出てますね。佐倉先生がこんなにえっちな先生だとは思いませんでした。)

「そんな…お願い…失望しないで…」

言葉には出してみるものの、手は止まらない。

私って、こんなにえっちなだったんだ…權くんは、こんな私をどう思うのかな。

やっぱり、はしたない女の子は嫌いだよね…

(しませんよ。僕はえっちな先生も大好きです。)

「ごめんなさい…えっちな先生で、ごめんなさい…」

せめて、想像の中では私を好きな權くんできて欲しい。

私のことが好きで、大好きで、愛していて。

私のことをいっぱいいいじめてくれる權くん…

ぐちゅちゅ♡ぐぼ♡ぐぼ♡

一本だった指が、二本に増える。

そのせいで穴が広がって、奥に溜まっていたお汁がどんどん流れ落ちてくる。

そのお汁がお尻まで伝わって、ちよつと気持ち悪い。

(そんな激しくしちやつて。もう我慢できないんですね。)

「できないよ…：權くんの、欲しい…」

(なら、早くしないとですね。)

「うん…はやくいくから…その後で…」

(はい。その時は、もつといっぱい、おちんちんでいじめてあげます。)

「ああ♡ ああ♡」

無意識に、我慢できなくなった声が出てしまう。

想像の中なのに、本当に言われたわけじゃないのに…

私、すつごくドキドキしてる。お腹の奥が、キyunキyunって喜んじやつてる。

すき♡すきすき♡意地悪な權くんすき♡優しい權くんもすき♡

ぐちゅちゅちゅ♡ぐちや♡ぐぶぷ♡ちゅく♡

もつと強い刺激が欲しくて、指が激しくなってしまう。

これ♡すごい、気持ち良い…あ、もうイきそ…

(僕が今から、10数えるまでにイってください。)

「…え?なに?」

(じゆうきゆうはちなな…)

「まって…待つて待つて♡そんなにいきなり、むりい…♡」

ぐちゆうぐちゆう!ぐちちつ!ぐちゆう!

私は、權の期待に答えるため、指を激しく動かす。

気持ち良すぎて、勝手に腰が起き上がってしまった。

それでも、早く動かしてイかなきゃ…

(なな、ろく、ご…)

数えるスピードがゆつくりになった。

なったつていうか、間に合いそうになかったから私が遅くしただけだけど…

(よくん、さくん、にく、いち、いち、いくち)

「あつ…い、いつ…いつちやう…」

いく、いく、いく…♡

(ぜろ!)

「あつ♡あああつ♡あつ♡」

ばしや♡ばしやしやっ♡

絶頂と同時に、緊張した奥の方から水が溢れ出す。

足がガクガク震えて、空に飛び上がるような感覚に陥り力が入らなくなる。

お腹の奥がきゆうう、と締め付けられて、幸せがいっぱいになった。

「はっ♡はぁーっ♡はぁーっ♡」

絶頂の余韻で、空を飛んでるような浮遊感を感じる。

時間を置いて、荒い息を落ち着かせる。

「んう…♡權くんが帰って来る前に、掃除しなきゃ…」

びしゃびしゃになってしまった床に目を向ける。

ティッシュで拭くより、タオルで拭いた方が早い。

シャワー室から、タオルを持ってこよう。

扉に目を向けると、扉の隙間から覗く彼と目があつた。

私の顔は、一瞬でかあつと熱くなった。

第49話

圭を守りながら、4階まで登る。

圭の護衛は、權たちが考えていたよりは難しくなかった。

そもそも、相手は足の遅くて鈍感。

囲まれたり追い詰められたりしなければ逃げるのは容易だ。

「こつちですー！」

權と慈は、圭に先導されながらモール内を駆け上がる。

時に物を壊して引きつけ、時に邪魔な「彼ら」を殺し。

そこまで苦なく、權たちは系が暮らしていたと言う一室へと辿り着いた。

「ここですー……ここに美紀が……」

隠れながら移動していた圭は、2人からパツと離れて1つのドアへと向かった。

この辺りにはいないようだから良いが、圭の行動はどこか危うい。

2人は慌てて圭へと続く。

「…あれ？開かない…」

ノブをガチャガチャ回し、扉を押し込む圭。
がしかし、扉は開かないようだ。

ドアの小窓から見るに、どうやら奥にバリケードとして大きな荷物が置いてあるよう
だ。

「美紀！お願い、開けて！」

圭が大声を出してしまったことに、2人は焦った。

この声で、「彼ら」を呼び寄せてしまうかもしれない。

「圭！待ってて、今開けるから…」

中で、何かガサゴソと音が聞こえる。

バリケードをどかしているのだろう。

小窓から、荷物が動いているのが見える。

「やっぱ無理だったんでしょ？だから、やめた方が良かったのに。」

「違うよ、美紀。生きてる人、連れてきたよ。」

「…嘘でしょ？」

2人は知る由もないが、圭がここを出たのはたった十数分ほど前。

部屋の中の美紀なる女生徒が不自然に思うのも仕方ない事だった。

「あなたが、圭さんのお友達かしら？」

「ほ、本当にいたんだ……！」

慈が話しかけたことにより、中の人物が驚いているのが伝わる。はたして、荷物をどけて現れたのは……

「權くんダメー……っ！！！」

瞬間、慈がビタンン！と權の目に平手を打った。

權の痛覚は鈍化していて、痛くはなく、突然暗闇に包まれる。

權にしてみれば、突然のことで何が起こったのか分からなかった。

が、權の目には一瞬、ノースリーブのアンダーウェア。ガーターベルトに、その下のショーツまではつきりと写っていた。

一瞬すぎて顔までは見えなかったが、体と声が女性的なのできつと女の子なのだろうことは想像できた。

「みっ、美紀！ちゃんと服着て……！」

「うっ、うん……」

權と美紀は、互いに顔を赤く染めるような初対面となった。

「巡ヶ丘の人……ですか……？」

「あ、はい。1年の宮本權です。」

「後輩なんだ！私たちは2年だよ。」

「ちよつと、口挟まないでよ…それに、リボンで学年わかるでしょ。」

「あ。」

美紀がコツンと圭の腕をつつく。

圭は笑いながら、ごめんねと小さく謝った。

側から見るに、とても仲が良さそうな2人だ。

「私は直樹美紀。圭の言う通り、2年です。」

光に反射して輝く、パールホワイトの目に優しい髪が印象的だ。

權は初見じゃどっちが名前なのかわからないな、と思った。

「私は佐倉慈。巡ヶ丘で国語教師をしていたわ。」

「あ、先生だったんですね。」

教師という言葉に反応して、美紀が崩れていた姿勢を直す。

「いいの、いいの！先生って言っても、そんなに固くならないで欲しいな。」

「そうだよ美紀。めぐねえは生徒と仲良い事で有名なんだから。」

「あの、祠堂さん。めぐねえじゃなくて…」

「そのめぐねえって何？」

「えー！3年担当のめぐねえだよ！知らない？」

「知らない…」

ヒートアップする圭に、若干引き気味な美紀。

「美人の先生がいるから3年の国語が楽しみだ〜って皆言ってたよ。」

「私、そういうの興味ないし…」

「がーん！」

慈は一人、思わぬところでショックを受けていた。

権はそんな慈の背中をさすって慰める。

僕はいつでもどんな状況だって佐倉先生の味方ですよ…

「ところで。」

ガールズトークがひと段落したと察した権は、話を軌道修正させる。

「俺たちは今、巡ヶ丘の学校に住んでいます。他に3人の生徒がいて、今日俺たちはここま
で物資調達に来てます。」

「学校に？」

「ええ。そこで生き残った生徒同士、協力しあって生きてるの。よかったら、あなたたち
も学校へ来ない？」

「…って事なんだけど、美紀はどうしたい？私は行きたいけど…」

後に、美紀が嫌なら、と続いた。

少し考えるそぶりを見せる美紀だったが、すぐに首を振る。

「やっぱり、ここを離れるのは危ないよ。」

「でも、私も外に出られたし…ここからは、先生の車があるから安全で…」

「死んじやったらお終いなんだよ?」

美紀の言っていることは、權にもよくわかった。

今の美紀は、まるで地下シエルターから出られなかったあの日の權のようだった。

「…美紀は、ここで一生暮らしていくつもりなの?」

「それは…」

言葉に詰まる美紀。

だが、決断は揺らいでいない様子。

「美紀。学校には電気もきてるし、浄水槽もあるから水も綺麗なんだよ。」

「確かにリターンも大きいけど、リスクはもつと大きいよ。」

「そんなこと言ったら、一生ここから出られないじゃない?」

「でも、私、あんな死に方、したくないよ…」

話は平行線。

二人の意見は真つ向から食い違っていた。

「…私たちは、もし2人が学校へ来られなくても、精一杯の援助はするつもりよ。食べ物とか、消耗品も運んできてあげるわ。」

そんな中、慈は美紀を擁護するような提案を持ちかけた。

これには、權や圭だけでなく美紀までもが驚いていた。

何を考えているのか、と權は慌てて慈へと耳打ちする。

「…良いんですか、そんなこと言って。学校で保護した方が良いんじゃない？」

「無理矢理連れては行けないもの。美紀さんがそういう選択をするなら、私はそれを尊重してあげたい。」

…そうだ。佐倉先生とは、こういう人物だった。

權は、慈の考えを決めつけていたことを恥じた。